

琉球大学学術リポジトリ

「琉球国要書抜粹」について —史料翻刻と紹介—（下）

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科 公開日: 2022-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 豊見山, 和行 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017889

「琉球国要書抜粹」について―史料翻刻と紹介―（下）

豊見山 和行

一 「琉球国要書抜粹」の全体的特徴

「琉球国要書抜粹」（以下、「要書抜粹」と略）の第一冊と第二冊の翻刻は、前号において（上）として掲載した。本稿はそれに続き（下）として第三冊、第四冊、第五冊を翻刻した。これで「要書抜粹」全文を翻刻することになる。なお、前号において「要書抜粹」を全四冊としたが、第五冊目の紹介が漏れていた。ここで訂正したい。第五冊は表紙の右肩に「291791 / 1 / 昭和28年3月16日」のラベルが貼付され、墨付きは六三丁である。それ以外の書誌情報は、他の四冊と同様であることから省略する。

また、前号（上）において、第一冊目の史料の年代幅について「一六九八年（康熙三十七）から一七二三年（雍正元）に及ぶ文書がほぼ年代順に配列されている。」としたが、それ以外に一八三六年（道光十六年）の文書（38）号等が含まれている。その点も追記しておきたい。

「要書抜粹」の基本的性格は、市来四郎の関心事にそって文字通り抜粹された書写史料という点にある。本号（下）における「要書抜粹」全体の特徴は、次のようにまとめられる。

第一に、文書の年代幅は、一六五七年（順治十四）から一八五六年（咸豊六）までである。ただし、時系列ではなく年代が前後するなどランダムな配列となっている。

第二に、薩摩藩に関係する記事が多く採られている。いくつか例示すると、義村王子が磯御茶屋へ招かれた記事

〔88〕、鹿児島上町での火事〔89〕、広大院の三回忌〔93〕、大信十三回忌・芳蓮院五十回忌・観光院十七回忌〔97〕、在番奉行の交代記事〔100〕などである。

第三に、第二と関係するが、薩摩藩主および藩主の親族の逝去・死去に伴って、普請や殺生禁断・鳴物停止の通達記事が散見される〔175〕〔208〕〔213〕など。

第四に、薩摩藩主や藩主の一族の実名(重、家、治、竹など)や同名の唱えの禁字に関する通達記事も見られる〔209〕〔212〕〔214〕〔349〕。

第五に、薩摩藩を介した幕府法令の布達記事が見られる。抜け荷や抜け商いの発生とその防止策が通達されている〔190〕〔191〕〔193〕〔195〕〔196〕など。

第六に、第五同様、幕府からのキリシタン禁令記事も注目される〔199〕。

第七に、一九世紀中頃における仏人・英人等の異国船来航および滞在に関する記事も多く採られている〔105〕〔131〕〔134〕など。

第八に、琉球・鹿児島間を往来する琉球人が携帯する刀剣や武具などの取り締まりや管理に関する記事も見られる〔187〕〔236〕など。

以上、琉球―薩摩藩―幕府に関する記事を紹介した。次に琉球国内に関する記事をいくつか検討したい。

二 琉球国内関係記事

市来四郎は、琉球国内における物価や貨幣記事にも関心を寄せていた。市来は、琉球国においてフランスから

の軍艦購入中断の案件を処理し、一八五九年(安政六)に帰藩した。その後、藩内で琉球通宝の鑄銭に尽力していた(安藤保「琉球通宝の鑄銭と安田轍蔵」(上) / (下)『九州文化史研究所紀要』四二・四三合併号、一九九九年/同四四号、二〇〇〇年、参照)。琉球における物価や貨幣に対する市来の関心の所在については、検討を要する問題であるが、その点は今後の検討課題とし、ここでは琉球史における史料の意義について若干付言しておきたい。

具体的に例示すると〔162〕、〔168〕などが上げられる。一六六七年(康熙六)〔162〕には、上馬一疋・代銭二百貫文、中馬一疋・同一五〇貫文、下馬一疋・同一〇〇貫文であった。この値段に設定した理由は「右、馬代之儀、此中不似高直ニ罷成候付而、此節被仰定候、向後右直段ニ而可有売買候、若相背者於有之者稠敷可及御沙汰之由被仰出候間、如斯候、以上」と、この間、馬の値段が高値となっていることであつた。高値を抑制する法令として發布されていた。しかし、その後、一六七三年(康熙一二)〔163〕では、上馬一疋・代銭三〇〇貫文、中馬一疋・同一〇〇貫文、下馬一疋・同一五〇貫文となつて、値段は上昇している。

馬の価格だけでなく、砂糖(黒糖)と鬱金(ウコン)も法定価格が設定されていた。〔164〕の一六六九年(寛文九)の例では、砂糖一斤・代銭八〇〇文、ウコン一斤・同七〇〇文であつた。その設定理由は「右、当年於鹿児島直段高下御座候ニ付、当年より右之直段被仰定候間、公儀ニ可被売上候、弥以脇売御禁止ニ候、自然脇売仕候ハ、至于地頭衆御沙汰可被成旨、我々方可申渡由候条、噯中堅固ニ可致仰付候、以上」と、鹿児島での売却価格の高下を一定に保つための措置とする点にあつた。琉球国内での価格と密売(脇売り)問題が連動している点は注目される。本文書の通知先は惣地頭衆となつている。そのことは惣地頭らの管轄する各間切における価格が統一されていたことを示している。なお、一四年後の一六八三年(康熙二二)〔165〕には、砂糖一斤・代銭一貫一五二文、ウコン一斤・同一貫八八文と価格は上昇している。

旧来、この時期の農政史料としては、「羽地仕置」（一六六七年～一六七三年）、および「諸間切法式帳」（一六九七年）に限られていたが、本「要書抜粹」を手がかりとすることが可能となった。その意味において、貴重な記事と言えよう。

貨幣に関する記事は〔233〕〔234〕〔235〕等々に散見される。銀子一匁と銅銭の換算状況に関しては、〔169〕〔173〕〔234〕などの記事がある。さらに、京銭と新銀そして鳩目銭の換算率も見られる〔233〕。琉球の貨幣史を検討する上で見逃すことができない史料と言えよう。

一八六三年（同治二）時点での文替りに関係する記事としては〔26〕がある。この文替りに関連する史料として〔267〕〔268〕がある。特に、〔268〕は同年の下大豆・唐豆・素麵・豆腐・塩・醤油・菜種子油・庭鳥・玉子・芭蕉紙等々の多品目の価格が代銭で表示されている。琉球の物価史の基礎的な史料となるものである。

その他、一七九〇年と推定される〔361〕には、「今般江戸御使者立、五月中上着無之候而不叶段、琉球館より申越趣有之」云々、とある。琉球から江戸へ派遣される名称は「江戸立」というのが一般的な用法であったが、ここでは「江戸御使者立」とある。このことから、「江戸立」は「江戸御使者立」の略称とも考えられる。

ともあれ、それ以外の多種多様な記載は、『琉球王国評定所文書』など、これまで刊行された史料集には見られないものが多く含まれている。それらの本格的分析は、今後の課題として残されている。

〔訂正〕

前号（上）、二四ページ一二行目、「狂言等置き安和」↓「狂言等沖繩」。

〔凡例〕

- 1 .. 旧漢字と当用漢字が混在しているが、史料に従って翻刻した。
- 2 .. 翻刻の形式は、行数・字数ともに、本紀要の字数にあわせて編集した。
- 4 .. 翻刻者の責任によって、適宜、読点を付した。
- 5 .. 〔88〕等の通番は、便宜的に豊見山が付したものである。前号の（上）も同じ。

琉球國要書抜粹

一道光式拾六年より同三拾年迄

[88]

去歲義村王子為使者上国仕候處、磯御茶屋江被 召呼、御前被 召出
御懇之蒙 上意、諸使者附々迄

御目見被 仰付、御囃子并御庭拜見綱引・花火見物、御料理・拜領物等頂戴之、且亦王子始諸使者等、二丸御庭拜見、御本丸於御茶屋両度

御目見、拜領物・御馳走等、段々難有被
仰付候旨、島津豊後、調所笑左衛門宛

午四月十六日

國吉親方

小祿親方

與那原親方

浦添王子

[89]

去年十一月上町出火町中致燒失候節、琉球館茂危相見得候處、御出被成御下知、館中無難相防候由、聞役・在番親方申越有之、國王始至私共忝次第奉存候、右御禮、島津豊後宛、

四月十六日

國吉親方

小祿 與那原

浦添

[90]

故中城王子上国出格之以 御仁恵、一世

御宥免被 仰付候御禮使者、去夏義村王子被差上候處、勤事等御都合能相濟、唐御料理進上、踊等被遊御滿悦被思召上、

御内沙汰被為 在、浦添王子・國吉親方迄被仰付候趣、其上踊獅子舞等付、多人数上国之儀茂御都合宜、訊而御沙汰被為 在、翁長親方被召寄、義村江被 仰含越候趣等、国王具承知被仕、誠以重畳難有仕合御禮、碓山将曹宛、

四月十六日

國吉親方

小祿親方

與那原親方

浦添王子

〔91〕

濱元親雲上・幸地親雲上事、去歲義村王子江差添上國被申付候處、踊御覽等之節別而御都合向茂宜、殊是迄江戸立、亦者其御地江茂度々致上國候付、勤功旁取扱向之儀、御内沙汰被為在、去秋御内分被仰下趣委曲承知仕、國王江申聞候處、右通御都合向宜、御内沙汰等被為在候儀頂上之仕合被奉存、先様其見合有之候様被申付候、右付、御内沙汰

御趣意濱元・幸地江茂拜承為仕、先以褒美沙汰等申渡置候、御前之儀何分二茂可然様御心得奉頼候、調所笑左衛門宛、

四月十六日

國吉親方

浦添王子

〔92〕

寵姫様御婚姻被為整候御祝儀之使者金武親方兼務二而被差上之候、萬端可然様御引進頼存候、恐惶謹言、島津権五郎宛、

四月十六日

國吉親方

小祿親方

與那原親方

浦添王子

[93]

廣大院様、就三回御忌、御香奠献納之使者金武親方兼務二而被差越之候、萬端可然様御引進頼存候、恐惶謹言、島津權五郎宛、

國吉親方

小祿親方

與那原親方

浦添王子

[94]

太守様

少将様国王江御返翰被成下、拜領物被

仰付候御禮、去夏被申上候処、於江府被成御披露候旨、被仰下趣申聞被入御念儀被存候、恐惶謹言、島津豊後宛、

四月十六日

國吉親方

[95]

御前様

寶鏡院様、国王江拜領物被 仰付御禮、去夏被申上候処、於江府被成御披露候旨、被仰下趣申聞被入御念儀被存候、誠惶謹言、嶋津豊後・島津老岐宛、

四月十六日

國吉親方

外同人、

小祿親方

與那原親方

浦添王子

[96]

御前様

寶鏡院様江従国王進上物被仕候処、於江府被成御披露候旨、被仰下趣申聞被入御念儀 被存候、恐惶謹言、嶋津豊後・嶋津老岐宛、

浦添王子

〔97〕

大信院様十三回
芳蓮院様五十回
觀光院様十七回御忌御法事付、御香奠以富嶋親方献納被仕候処、福昌寺江奉納拜禮相濟候旨、被仰下趣國王江申聞、被入御念儀被存候、誠惶謹言、島津豊後・嶋津壹岐宛、

國吉親方

小祿親方

與那原親方

浦添王子

四月十六日

〔98〕

尊書拜見仕候、琉球段々物入打續一鉢及困窮、專交易相立候國柄本手乏敷、存知之通商茂調兼候趣共被達 御聽、御手元金之内より為御救、鳥目五萬貫文拜領被 仰付、右取捌之儀を茂被仰出、且亦唐物御商法御差延被仰渡、再重御手厚御内訴被仰立候得共、公邊御改政央涯々御願濟相成候儀難計候付、拜領之鳥目日本手差向候趣法等 御内沙汰被為

在候為御禮、去夏從國王輕品被致進覽候付、被仰下趣申聞候処、被入御念儀被存候、誠惶謹言、 碓山将曹宛、

四月十六日

浦添王子

〔99〕

太守様

少將様倍御機嫌能被遊御座、恐悅奉存候、將亦貴公様弥御勇健被成御勤仕、珍重御儀奉存候、於当地國王無異被罷居候、然処当四月嘆国船一艘來着、乘組之内医者一人・妻子・通事唐人等逗留、且亦同月佛国船一艘來着二三日後大總兵船二艘皇命を請來着、直国王江對面、和を述候間、前に達置候段申出、旁之次第御内分申上趣御座候処、国王始私心配之程御察被下、折角平穩之方二取計大總兵船致來着候者無難佛唐人茂召乘致帰国候様、精々尽詮議平田善太夫殿江茂御相談仕、無手拔可取計旨委曲以尊書被仰下趣承知仕、国王江茂申聞被入御念儀忝被存候、其後追々御内分申上候通、当五月右大總兵二艘來着和好・貿易、且当地津口江会船所召成候様二与之儀共申立、相断候得共落着無之、此方申立者彼国皇帝江可致奏達、是迄逗留之佛人并通事唐人者此節列行、皇命申渡有之候者、今一ヶ年程二者又々佛国船可致來着、皇命到來之節為通事用外佛人一人殘置、且三四ヶ月後者是迄逗留佛人茂可差渡段申置、為致出帆事御座候、就而者当地計迄二而者行届兼可申、大總兵申立断筋聞濟逗留之者共令帰国候取計向、当秋唐江別段以使者被頼越度、此節伺之使者摩文仁親雲上被差上候、猶亦彼国之船來着有之候者、応答向并殘居候者共取扱等諸事善太夫殿以御相談、随分平穩取計候様可仕候、此等之段為可申上如斯御座候、誠惶謹言、

島津豊後宛、

國吉親方

七月六日

小祿親方

與那原親方

浦添王子

[100]

倉山作太夫、当地在番平田善太夫交代之、云々、

道光廿七年丁未十二月廿日

[10]

島津豊後殿江戸御詰被 仰出、琉球方掛被成御免候、云々、

十二月廿日

[102]

一御当地江異国船渡来之儀二付、去辰年以来御守等拜領被仰付御禮之、云々、

一嶋津壹岐殿、琉球方御掛寄被成御引取候、云々、

一従 太守様 少将様、美里王子江拜領物被 仰付候処被致病死、嫡子美里按司より御請 御禮之、云々、

一御当地江異国船渡来之儀付、御守拜領被 仰付御禮之、云々、

一於遊羅之御方御用御調文品相調次第差登候、云々、

一御当地江佛嘆之者共致滞在候儀、何様之訳ニ而候哉、内々承趣以候ハ、御内々申上越候様、被仰越候、云々、

一御守札被差上候付、御返物被御遣、且正五位下被蒙勅許候由被仰越之、云々、

一御返翰・御拜領物之御禮被成御披露付、云々、

一御進上物并御内證御進上物被成御披露候旨、被仰越候、云々、

一御法事二付、御香奠御献納相済候旨、被仰越候御再報之、云々、

一寵姫様御婚姻為御祝儀御進上物被遊候付、被仰越御再報之、云々、

一安室親方產物方御用精勤仕候付、拜領物被仰付候御禮之、云々、
一去々年義村王子上國之節、磯御茶屋江被為 召、段々難有被仰付候御禮之、云々、
一異国一件、唐江別段以使者被願越度御使者を以被仰上趣、且右二付御進上物被成御披露候旨、被仰越候御再報之、云々、

一冠船拜借銀返上錢元利銀去年半方、当年皆返上被 仰付候御禮之、云々、
一唐物御商法以前之通御願被 仰達可被下旨被 思召上候旨、被仰渡候御禮被成御披露候、云々、
一御当地江異国船來着致出帆候段、御届申上候付、被仰下候御再報之、云々、
一上町出火之節、琉球館江御出被成御下知候御禮之段、

太守様 上様江御内々御品々御拜領被

仰付候為御禮、御進上物被差上候付、被仰越候御報之、云々、

一御手元御用之御茶并珊瑚珠時計瑪瑙唐鳥登方、且欠相成候鳥、当秋唐江詔越候段、申上候書狀之、云々、
一少将様御用之縮緬并御製菓方御用之菓種登方、且買欠相成候菓種何分被仰越候様、申上候、云々、
一就楷船差上候

太守様 少将様御機嫌御伺書狀、云々、

二月十五日

[103]

一島津豊後琉球方掛被成御免候、云々、

二月十五日

[104]

一当春島津壹岐殿方尊書、三司官小祿親方役儀御断申出、跡役座喜味江三司官被仰付候御請之、云々、

三月廿七日

[105]

一当地江去辰年以来異國船来着種々難渋申掛、異國人等残居、何分不容易儀与深被遊 御配慮、当國為安全向々江格別成御祈禱御願被為 在、神箭并御札卷数等追々御差下相成、猶亦土御門家江茂御祈禱被遊御頼、右御守国王并浦添王子、且異國船渡来之節致面會候總理官・布政官江茂拜領被

仰付、誠以重疊厚 思召之程、国王始一統難有次第奉存候、就而者無事平穩相成候上、屹与御禮可被申上候得共、先早々御禮書状之、云々、 島津将曹宛、

一当地江去辰年以来佛朗西國・啖咭喇國船度々来着、難題筋種々申掛、剩両國之者共残置、就而者私共始役々出張夫仕、亦者過分之所望品等相與、殊去秋清國江別段使者迄茂差渡國中一統困窮之折柄、莫太之及入價別而難渋之段被 聞召上、当時御改革中不容易御事候得共、別段厚以 召上御米三百石・昆布一萬斤御手許御計二而拜領被仰付旨被仰渡趣承知仕、右御米・昆布御物御計を以御差下、於当地御引渡被仰付、誠二以厚御仁惠之程、國王始至私共難有仕合奉存候、右御禮之、云々、 調所笑左衛門宛、

四月廿五日

〔106〕

一琉球江異國船渡来付、

太守様当正月中旬御暇二而、

少将様御儀者 御着城之上被遊

御参府度御願之通被 仰出、御先格之通被遊御拜領物候、御祝儀之使者天願親方兼務二而被差上之候、萬端可然様御引進頼存候、云々、

四月十六日

〔107〕

一少将様御國許江被遊 御下向候御禮之使者天願親方兼務二而被差上候、云々、

四月十六日

〔108〕

一琉球江異國船渡来付、

少将様御國許江被遊御下向候付、按司以使者御禮被仰付等候得共、異國船到来、凶年等之以御取訳、年頭使者江兼務被 仰付候御禮、天願親方を以被申上候、云々、

四月十六日

[109]

一琉球江異國船到來付、依御願

□振公

少将様御国許江之御暇御給、御先格之通被遊御拜領物候御祝儀之使者天願親方兼務二而被差上候、云々、

四月十六日

[110]

寶鏡院様就御卒去、

太守様 少将様被奉伺御機嫌、且御香奠献納之使者天願親方兼務二而被差上之候、云々、

四月十六日

[111]

一大慈院様七回御忌 蓮亭院様三十三回御忌 寶鏡院様御一周忌御香奠献納之天願親方兼務二而被差上候、云々、

四月十六日

[112]

一去年指宿二月四御茶屋御焼失付、御機嫌之使者天願親方兼務二而被差上之候、云々、

四月十六日

[113]

一琉球江異国船渡来之儀付、厚 御趣意之趣被仰渡候付、按司以使者御禮被仰付筈候得共、近来異国船渡来之儀付而者、臨時之物入過分二而難渋之由被 聞召上、別段之以思召、年頭使者江兼務、云々、

四月十六日

[114]

一当地江去辰年以来佛朗西國・暎咭喇國船度々来着、難題筋種々申掛、剩兩國之者共残置、就而者私共始役々出張夫仕、又者過分之所望品等相與、殊去秋清国江別段使者迄茂差渡国中一統困窮之折柄、莫太之及入價別而難渋之段被 聞召上、當時御改革中不容易御事候得共、別段厚以 思召御米三百石・昆布壹萬斤御手許御計を以拜領被仰付御禮之、云々、

四月十六日

[115]

去冬從

太守様美里王子江国分御煙草九斤・干鯛十二斤、少将様美里王子 国分御煙草五斤・蠟燭六十六挺・鑿節三十本拜領被 仰付候處、頂戴不仕内致病死候、然者右体之節者嫡子江拜領被仰付候先例御座候故、嫡子美里按司江拜受申渡候處、難有仕合謹而頂戴仕候御請御禮之、云々、

弘化四年未四月廿五日

一当地江異国船渡来付、無異平穩之御祈禱土御門家江被遊御頼候處、彼御家向格別重御秘法御執行螢火御守被成御差出、国王江拜領被仰付、私并異国船渡来之節致面會候總理・布政官江拜領被仰付候旨、被仰越趣承知仕、右御守相届謹而頂戴之仕候御禮書之、云々、

四月十六日

一当地江佛・嘆之者共致滞在居候儀、何様之訳ニ而哉、自分表御方江者御届可相成候得共、内々承趣茂候ハ、右江致齟齬候而茂不苦候間、貴様迄御内々申上越候趣、

御内沙汰被為 在候段、御別書を以御申越之趣、委曲承知仕候、然者去辰年以来異国一件残居候者共事茂表向御届之外、御内分より御掛合御家老衆江成行委ク御届申上候通ニ而、右外相替申儀無御座、去歲佛国大総兵渡来、和好・貿易等申立有之、小国不相調訳を以相断候付、断之趣意者彼国皇帝江可致奏達候、左候者一箇年程ニ者皇命可致到来、其節通事用佛人可残置段申立、折角相断候得共聞濟無之、押々残置為致出帆事御座候、其以前逗留之佛人ハ天主教相教度彼是与強而申立有之候得共、屹与相断為申事ニ而、右大総兵運天津滯船之砌ニ茂天主教相学候儀、於中国者免許有之候、其段爰許江茂相知候哉与一通尋有之候付、相知不申段相答申候處、右免許を取候文見候様ニ与差出為申迄ニ候、且当分残居候佛人共ニ茂其以来天主教之事一切沙汰無ニ打過來候處、到当二月ニ者係通事共江漢文相渡、片仮名相付俗文ニ組直させ呉度、不屹立向を以頼有之候處、右文唐官人より天主教相廣候一件之文ニ而、天主教ニ便差障可申与、致吟味早速相断、右差返申候、且又嘆人事茂醫者と申最初より病人致

療治度申出候得共、禁止申渡置候付、嘆人療治を受候者不罷居候故、終ニ醫術并天文・地理・耶蘇之道相廣度屹
与申立有之、是又難應訊を以相断候處、夫より何分申立者無之候得共時々致外出、於所々琉人木佛致拜禮候儀不
宜候間、其儀者取止上帝江可致拜禮趣、手様扨仕高聲にをらへ罷通候付、右等之処茂御内分より追々御掛御家老
衆江申上候通御座候、件之振合を以在佛・嘆之者共、当分者宗旨を導き候向ニ茂相見得、右之防者每度嚴密取締
申渡事候得共、(衍字)兩國之者共奸計深、殊ニ佛国大総兵より皇命可致到来与之申置等、低意難計旁以昼夜及心配居申
候、就而者就而者重而佛嘆之船来着之節、應答向等萬事都合能行届何れニ茂無事平穩令帰國候様、國王を始諸官一
統無油断吟味仕、且者佛国大総兵江此方断筋聞濟させ、逗留佛嘆之者共令帰国候手筋、去秋唐江被頼越置付、唐
取計之一左右等折角待合居申事御座候

御内沙汰被為 在候段承知仕事候付、此等之段貴様迄御内分より申上候間、宜様御心得可被下候、以上、

四月十六日

浦添王子

伊集院平殿

[118]

去歲國王江御守札被成御遣、(遣カ)且又去夏輕品被致進覽候付而御挨拶被仰越、且去歲御上京正五位下被蒙 勅許候
由、兩通御紙面之趣茂申聞候處、被入御念忝被存候、随而練蕉三端被致進覽候、云々、

四月廿五日

〔119〕

一廣大院様三回御忌御法事付、御香奠以金武親方献納被仕候処、福昌寺江奉納拜禮相濟候旨、被仰下趣、云々、

四月廿五日

〔120〕

一寵姫様御婚姻被為整候為御祝儀、去歲従国王進上物被仕候処、於江府被成御披露候旨、被仰下趣申聞被入御念儀、云々、

四月廿五日

〔121〕

去々歳義村王子被差上候節、於磯御茶屋

御前江被 召出 御懇之蒙 上意、諸使者・附々迄茂 御目見被 仰付、御囃子并御庭拜見、綱引・花火見物御料

理被下、拜領物等被 仰付、且亦王子始諸使者等二丸御庭拜見、

御本丸於御茶屋

御目見拜領物等被 仰付候付、去夏従国王御禮被申上候処、於江府被成御披露候、云々、

四月廿五日

[122]

一当地江佛朗西国大総兵来着、和好・交易等之儀申立、乗組之内残置致出帆、且亦啖咭喇国之者妻子等列渡致逗留居候付、取計向之儀共以使者清国江被頼越度為可被奉伺、去歳使者被差立候旨、太守様江進上物被仕候処、被成御披露候旨、被仰下趣申聞被入御念候、云々、

四月廿五日

[123]

去辰年三月那霸川口外江異国船一艘来着泊沖江乘廻、異国人一人・唐人一人残置出帆、且亦去年四月泊沖江異国船一艘渡来、同五月運天津江廻着、同月同津江異国船二艘来着、去辰三月残置候異国人・唐人者列行、外異国人一人残置、三艘共去年閏五月致出帆候段、御届相濟候旨被仰下候、云々、

四月十六日

[124]

去年三月四月久米島沖江異国船追々乗寄、異国人伝聞より所之浜江漕来、所望物相渡致通船候段、御届申上候、云々、

〔四月十六日カ〕

[125]

去年閏五月豊見城間切沖江異国船一艘來着、同間切大嶺村沖干瀬江走揚候付、助船差出挽卸、泊沖江乘廻船具仕替、所望物等相渡致出帆候段御届申上候趣被聞召達、公邊御届相濟候旨被仰下趣承知仕、被入御念御儀奉存候、

四月十六日

[126]

去年七月泊沖江異国船一艘來着、異国人一人殘置、全八月致出帆候段、御届上候趣、公邊御届相濟候旨、被仰下趣被入御念御儀奉存候、

四月十六日

[127]

去年八月泊沖江異国船三艘來着、追々致出帆候段、公邊御届前条同断、

同日

[128]

清国江異国一件願之使者池城親方、去年十月八日福州參着、同十五日布政司江咨文国王差上候処、撫院より被致奏文願通可取計旨、広東総督江勅諭有之、勅諭通彼総督取計被致置候間早々帰帆、右之趣国王江申聞候様、当四月廿五日布政司より被申渡、先月十六日福州出帆、同廿二日那覇入津仕候、依之唐之首尾為可被申上池城被差上之候、

萬端可然様御引進頼存候、

六月十二日

[129]

去辰進貢使喜舍場親雲上、同年十月十四日福州出立、十二月十七日京城參着、例之通勤方相濟、国王江例年賜物之外蟒緞二疋并品々被賜之、進貢使并大夫江茂例式之外賜物有之、去々年二月九日北京出立、四月廿一日福州下着、去夏帰帆仕答候処、已年接貢船福州着無之候付滞留、此節大唐船江乗船仕、先月十六日唐出帆、同廿二日爰許帰着仕候、依之唐之首尾為可被申上喜舍場被差上之候、云々、

六月十二日

[130]

一異国調伏之御守札御当地江奉納被仰付候付、御禮被仰上候段、且撰政・三司官より御禮申上候、云々、
一異国人より相賜候遠目鏡、國吉親方名前を以、御内々被遊御進上候、云々、
一異国人より請取置候金銀、差上候様被仰越候御報之、云々、
一於遊羅之御方御調文、細上布登方、且粧具類差上候付、被仰越候御報之、云々、
一少将様御用御反物、御製菓方御用菓種苗種子、御手許御用之御道具、唐鳥其外品々登方、又者求方不相達申上候儀、且買欠之分者買求差登候様、被仰越御報之、云々、
一宰相様 少将様、其 御外様倍御機嫌能被遊御座、恐悦奉存候、将亦貴公様御勇健被成御勤珍重御儀被存候、

於当地二国王無異被罷居、私共二も無異儀相勤申候、然者此節摩文仁按司被差上、国王繼目之願被申上候処、願之通無相違被 仰付、誠以国王始一統難有之仕合奉存候、右付江戸江御禮使者之儀、極々難渋之砌柄急二手當調兼候付、来ル子年方差上申度被奉願趣、則被達 貴聞候由、然処去ル辰年以來当地江追々多艘之異国船渡来、剩異国人等残置、于今逗留罷在、於 公邊茂別而被遊御掛念候折柄二茂候処、御旧例之順年二不被召列、年延二而子年二御召列被遊度御伺被仰上候者、江戸より当地迄者海陸數百里相隔り事実通し兼候付、佛嘆両国之一条御掛念被為在為御見聞、当地江 公邊御役方等被差渡候時宜二共相及候時者、御断茂難被仰上、又々難渋相嵩誠二当地興廢二茂相拘候程之御都合二可罷成候付、何分御旧例之順年二御出府御座候得者、第一旧来之御先規不相欠、當時 公邊異国人逗留一条至極御掛念之砌柄、無滯使者可差上旨被仰上候得者、當國安堵之事情茂相顯、於 公邊被遊御安心候儀者勿論、其

御方樣二茂御同様之御事二而、御互二目出度御都合二候間、右之趣摩文仁按司・天願親方江委細御内達被仰付置候付、篤与承知仕候樣、右二付而者使者参府之用銀大粧之儀二而、心配之筈候付、御改革中なから出格之以御沙汰、摩文仁按司江御渡被置候御手扣書之通被 仰出、古例茂無之御救筋、當御時節柄不輕御儀、畢竟近年頻二入価差湊候儀を深被遊御憐察候而之御事候間、此上者無異儀御請被申上候者、猶其上之儀者專貴公樣御引受、御都合宜樣御取計可被成段茂 御内沙汰御承知御座候付、宜評議之上早使より御請被申上候樣御内々以尊書被仰下、右之御趣意依仰、聞役・在番親方より茂申越有之、猶亦摩文仁帰帆直二申出、御在番奉行倉山作太夫殿より茂委曲承知之仕、国王江申聞候處、

公邊御都合段々厚被遊 御勘考、其上當御時節柄出格之御救筋等被仰付候儀、誠以重疊御高恩之程一統難有仕合奉存候、当地統方古来未聞之難渋二而、右通年延願等為申上事候得共、公邊御都合向相拘、殊更難渋之所御憐

察被為 在、御救筋等被仰付猶貴公様御引受御取計可被成下段茂承知仕、深重難有次第二而此上者年延之願難申上、弥御内沙汰通來々戌年御禮使者被差上候様、其手当被申渡置候、云々、

四月十二日

[13]

一当地江佛朗西国并咲咭喇国船々來着、佛人・咲人等残置不容易難題之事候付、清国江使者池城親方差越、滞琉之者共列帰り候様致歎願候処、於清国取請宜広東總督江被命、渡合之佛咲之官人江相談之旨有之候処、佛人者列帰候様可致、咲人者未返答無之候得共、佛人同様列帰二而可有之候趣、池城帰帆之上申出候付、右之首尾為可被申上同人被差上、右形行細々申上候処、追々兩國之船渡來佛咲人等残置難題申掛旁二付而者

御兩殿様別而被遊 御配慮御事候処、追而迎船可差渡与之趣共、被達 御聴、至極之御都合向良被遊御安堵候御事候由、就而者迎船渡來候者萬端無手拔平穩二為列帰候様取計候而、早其御届被申上候者御満足可被遊之、云々、
一異賊調伏之御祈祷、般若院江被 仰付、於和州三輪山致修行、御守札被差上候付、別段厚以 思召琉球江奉納被仰付候旨、伊木七郎右衛門殿より池城親方江被仰渡、御守札池城捧下、右之 御趣意国王承知仕御守札頂戴、誠以難有御禮之、云々、

一太守様当年 御參勤御時節御定例之通御伺可被遊筈候得共、琉球江異国人致逗留不容易御時節、且御領内海岸防禦御手当等茂 御巡見之上被遊御指揮度候付、当秋迄 御參府御延引御願之通被仰渡候御祝儀之使者、翁長親方兼務二而被差上候、云々、

四月十六日

〔132〕

一慈徳院様百回御忌 宝鏡院様三回御忌御香奠献納之使者、翁長親方兼務二而被差上之候、云々、

四月十六日

〔133〕

一盛姫君様御逝去付 太守様 少将様御機嫌伺之使者、翁長親方兼務二而被差上之候、云々、

四月十六日

〔134〕

一当地江来着之異国人より国王初琉役々等江差送候品々、日料所望物等之代料請取置候金銀、

御手許御用相成候間、当夏早船より差上候様、且亦右贈品之内二階堂志津馬殿、平田善太夫殿御上国便差上候品之内、御用無之品者池城親方帰帆便御差帰被成候段、三通を以御内分御申越之趣委曲承知仕候、右爰許御申越之通笑左衛門殿より倉山作太夫殿江被仰越趣御座候由二而、作太夫殿より御達有之、右贈品之内 御手許御用相成候分者作太夫殿江差上候付、摩文仁按司乗船より為被差登由、且前文池城便御差帰之品茂御在番所より御引渡有之候同断所望物代金銀之儀、此以前御掛御家老衆江御内分御届申上置候通、逗留佛人共江相渡候諸品代高直有之由二而、直下之儀色々難渋申立有之、就而者彼国之船来着之上、右一件又者何敷与難渋申掛請取置候金銀不差出候而不叶時宜合も可致出来哉、異国人共段々自由体二而何角反覆ケ間敷有之、且佛嘆人共より金銀換錢之儀、時々申出有之候得共、当地金銀茂蔵方江致格護置候段相達置事候付、当分右金銀差登候儀、念遣敷逗留之者共、

引取候迄者今形当地藏方江格護被仰付置候様被仰上越度旨、作太夫殿江申上、弥其通御取計可被成段承知仕候間、是亦笑左衛門殿江作太夫殿方為被仰上筈与存候返答之、云々、

四月十六日

[135]

一調所笑左衛門殿江之進覽物、被致死去候付、御同姓左門殿より御禮被仰越候御報之、云々、

一少将様御用御反物御手許御用之唐鳥相届被差上候段、且右代銀館内江御引渡一件并阿蘭陀医書唐解之書不求請段も被申上候段、被仰越候御報之事、(云々)、

四月十六日

[136]

去辰年以来佛郎西船追々渡来、品々難題申掛、其上佛人残置剩国王江對面申立、不容易危難之事候処、国頭按司儀総理官之名目ニ而応対有之、国王對面茂無之都合能相濟、別而精忠之事ニ被 思召上候由、右付迎船渡来列帰候者、自ら以使者柄御禮可被申上事故、国頭儀応対旁骨折拔群勤功茂有之事候間、王子江昇進右御禮使者上国仕候者、御都合宜御座候付、其通可取計旨、調所笑左衛門殿より追々御内々被仰下趣承知仕居候処、先達而佛郎西人無事平穩ニ列帰候段、御届申上候趣、則 公邊江茂御届被仰上候而被遊御安堵候御事御座候間、右御禮使者之儀、当夏被差上候様ニ与之御事候由、右付而者国頭儀、前条通之勤功茂有之候付、今般王子江昇進申付、当夏御禮為使者上国有之候様、就而者 公邊御響合旁無御扱御訳合有之、御禮使者与表通者被仰御事候得共、御内実ハ御内用之儀被

為 在被 召呼候御事候間、右旁相含国王江相達御請申上、当夏上国有之候様可取計、尤右次第之詎合殊更急速之事二而進上物等揃兼可申、不相揃分者御延之願申上來夏進上仕可宜与之御事候間、旁御趣意厚相含、弥以

思召通御請申上候様、猶亦笑左衛門殿より尊書相届拜見仕、三司官江茂相達、委細国王江申聞候処、弥国頭儀王子江昇進、右之御禮使者二而当夏上国被申付置候、笑左衛門殿御死後相成候付、此段貴様迄申上候間、御前之儀萬端御都合宜様御心得被成被下度、頼存候、云々、

三月十四日

[137]

一 太守様別段厚以 思召、去歲於磯御茶屋、異賊調伏之御祈祷

御直御修行被為 在、御供物被遊

御備候御菓子、御内々調所笑左衛門殿以御取次国王江拜領被 仰付、誠二以厚思召之程重疊難有次第恐入被奉存候、逗留佛朗西人無異儀列帰り候付、追而御禮可被申上候得共、先貴公様御禮申上候、云々、

四月九日

[138]

一 中山王繼目被 仰付候付、江戸江御禮之使者来年御參勤之節被 召連候様、被仰渡候間、先規之通御請可被申上

旨、琉球館内聞役江被仰渡候御書付之趣承知仕、中山王江相達、此節御請被申上候、此段為可申上如斯御座候、云々、

四月十五日

[139]

一 太守様御儀、当正月廿八日

御登城、御暇之御禮被仰上候处、御居残之儀被遊御承知、於御黒書院御家老中様御列座、御用番阿部伊勢守様より琉球国滞留之佛人引拂一廉者

御安慮之儀一段之事被思召候、乍然未暎国人相残居候付、猶又御勘弁を被加、早速引拂一刻茂御安心相成候様与之儀、御別紙写之通御直被遊御承知候段、御到来御座候付、此段中山王承知候様、左候而暎国船渡来茂候者、心機変無事平穩列帰候様取計、一日茂早奉安尊慮候様可致、尤暎国人列戻候者早々以飛船申上越候様、御別紙御取添、琉球館聞役・在番親方江被仰渡候御書付之趣承知仕、国王江聞難有次第被奉存候、就而者彼国之船来着候者、仰渡通取計仕無事平穩ニ為列帰、早速以飛船申上越候趣、從国王茂被申付候、右之御禮之、云々、
四月十五日

[140]

一去辰年以来佛朗西国大総兵船等追々来着、難題筋申掛剩佛人残置、且暎咭喇国船茂来着、暎人等残居不容易事候付、別而被遊御配慮段々御手厚御取扱被仰付候处、去歳佛朗西船来着、逗留佛人無事列帰候付、御禮為可被申上使者国頭王子被差上之候、云々、

一 慈徳院様百回 賢章院様二十五回 宝鏡院様三回御忌御法事付、御香奠翁長親方献納被仕候处、福昌寺江奉納拜

禮相濟候旨、被仰下趣、国王江申聞被入御念儀被存候、云々、
一去冬摩文仁按司上国之節、按司始在勤之親方、磯御茶屋江御内々被 召呼 御前江被 召出
御懇之蒙 上意、役々迄茂 御目見被 仰付、御庭并御流儀炮術打揚等拜見、御料理被下、拜領物等被 仰付、
去夏従国王御禮被申上候、云々、

四月廿七日

[14]

一名越右膳大目付被仰付、書状之、云々、

四月廿七日

[142]

一故国王卒去付、御悔被仰付候御挨拶、去夏被申入候付、被仰越候御紙面之趣、云々、

四月廿七日

[143]

一去夏従国王、御親父笑左衛門様江輕品被致進覽候処、被成御死去候付、貴様より御禮被仰越候由、御紙面之趣致
承知、国王江申聞候処、被入御念候、云々、 調所左衛門宛、

正月廿七日

[144]

一少將様御用之御注文品、去々秋渡唐役者江買求方申渡、去夏本錦并紅紫紋縮緬御調文之、云々、山口直記宛

四月廿七日

[145]

一異国人為調伏、射術鳴弦御守、且護摩修行被仰付、御守灰御下方被仰付、御禮状之、云々、
一去歳帛帆之御使者役々江海上為安全、水天宮御守札拜領被仰付候御禮状、且当夏上国之御使者役々右御守札守護
二而持登候様被仰渡候付、上国之上御禮申上候、云々、

四月廿七日

[146]

一御守札被差上候付、御返物被遣候、云々、
一寛之助様御天亡付、伺御機嫌被仰上、云々、
一御年回忌二付、御香奠御献納、云々、
一異賊調伏之御祈祷御修行被為在被遊御備候御菓子、御内々拜領被仰付候御禮之、云々、
一去歳正月久米島沖干瀬江異国船壹艘走揚、同月同所江同式艘乗寄、右走揚船人数乗移走通、同月同式艘同式月同
壹艘同所江来着、右同断追々致出帆候段、御届申上候趣被聞召達、公邊御届相濟被仰聞候、云々、川上筑
後、島津將曹、島津石見、末川近江宛

二月十四日

[147]

一当國江佛朗西国船并嘆咭喇国船、度々渡来剩佛嘆人残置候処、佛人之儀者迎船渡来無異儀列帰稍被遊 御安堵候得共、未嘆人致滞留居候付、猶亦以来之儀共段々厚思召被為 在、国頭王子御前江被 召出 御趣意之程細々被仰出、王子帰着国王委細承知被仕、私共茂奉拜承之、誠以難有次第 御趣意通精々尽吟味取計候様、国王方も被申付置候、萬端無事平穩致治定候上、御届可被申上候書状之、云々、 島津将曹宛、

四月十五日

[148]

一 国頭王子事、異国人御手当 御指揮被成下候御禮、且佛人引取候御届之為、使者去歳上国仕候処、段々厚思召被為 在為御褒美御脇差一腰、王子磯御茶屋江被召呼候節、於御前拜領被仰付段、王子帰着国王承知仕候、右御禮被申上候、云々、 島津将曹宛、

四月十五日

[149]

一 去辰年佛朗西国船并嘆咭喇国船度々渡来、種々難題筋申掛、其上佛嘆人残置不容易国難之處、佛人儀去々秋迎船渡来無異儀列帰、早々御配慮被遊 御指揮候処より無事平穩引拂候御禮之使者、磯御茶屋江被召呼 御目見被仰

付、当地之事情旁被遊 御聞届、且同人儀佛国船江度々致出張、無事取計、殊二逗留佛人無異儀引拂、右者不容
易危難国家之興廢相掛事故、旁被遊御指揮追々被仰付越候 御趣意、深汲受取計首尾能相勤候次第等、別而奇特
之至

御満足被 思召上、為御褒美御脇差一腰拜領被仰付候、云々、 島津将曹宛、

四月十五日

[150]

去年十一月江戸田町御屋敷内火起候得共、早速及鎮火、就右 太守様御差扣御伺書被差出、少将様者 御差扣之
儀如何可被遊御心得哉之旨、是又御伺書被差出候處、

御両殿様不被為及御差扣旨被仰渡候付、恐悅為可被申上使者奥武親方兼務二而被差上之候、云々、 新納主税宛、

四月十五日

[151]

一廣大院様就七回御忌御香奠献納之使者奥武親方兼務二而被差上候、云々、 新納主税宛、

四月十五日

[152]

一道光皇帝崩御、新帝即位之段到来仕候付、当秋進貢使江慶賀使者兼務二而被差渡度旨、為可被奉伺使者、奥武親

方兼務ニ而被差上候、委細琉球館開役・奥武可申上候条、萬端可然様、云々、新納主税宛、

六月二日

[153]

一辰年以來異国船度々来着、剩異国人共長々逗留、当年江戸立付而者莫太之入価差見得、旁別段之以 思召猶亦当年より先拾ヶ年は迄之通被 仰付候旨、国頭王子帰着委細承知仕、誠以 御厚恩之程国王始至私共茂難有仕合奉 存候、右御禮之、云々、新納主税宛、

四月十五日

[154]

五月八日御書院当御取次、備 上覽、

一射術鳴弦御守札一通格別成秘法ニ而、異国人為調伏執法被 仰付、御差下被成候条、私共ニ限り右之趣致演説、逗留嘆人夫婦并子共步行等外出之節、嘆人共居間之上・天井裏等目ニ不懸場所江可張付置、右式大切成御守札之事候処、館内者勿論於当地外々江不相漏様隱密可取計旨、分而 御内沙汰被為、在候旨、国頭王子江被仰渡、御守札国頭捧下、右之

御趣意奉承知難有、云々、伊十院平宛、^(集)

四月十五日

〔155〕

一 水天宮御守札五枚、

内

国頭王子より玉川王子江御讓渡

一枚 野村親方、

一枚 奥武親方、

一枚 伊舍堂親方、

一枚 仲嶺(マツ)築親方、

一枚

戊三月

〔156〕

一 去年御内用御用白地かすり・細上布并卓子一脚、右之道具一揃差登候処相届候由、右之細上布長尺引入候得共、

御取置相成代銀茂館内より申出次第御下渡可被御取計段、委細御申越之趣致承知、被入御念儀忝次第御座候、猶

亦御内用為御用細上布并長盆・廣盆・机香盆等致調方差登候様、御調文御取添、去秋御申越之趣致承知、御調文

通相調当夏便差登候様申渡置候付、館内より差上可申候、云々、伊集院平宛、

四月十五日

[157]

一大信院様十七回御忌御法事付、御香奠以識名親方獻納被仕候処、福昌寺江奉納拜禮相濟候旨、云々、島津豊後、川上筑後、島津将曹、島津石見、末川近江宛、

四月廿一日

[158]

一寛之助様御天亡付、御前様為伺御機嫌以識名親方被申上候処、於江府被成御披露候旨、被仰下、云々、島津豊後、川上筑後、島津将曹、島津石見、末川近江宛、

四月廿一日

[159]

一大守様別段厚以思召、去々歳於磯御茶屋異国調伏之御祈禱御直御修行被為、在御供物之御菓子御内々拜領被仰付、且逗留佛朗西人無異儀列帰候付、御禮可申上候得共、其内貴公様迄御頼之、云々、一御本丸御普請付、御金納被為蒙仰、重出銀米等被仰付置候処、厚以思召右出銀米御免被仰付候御禮申上候付、被仰越候御再報之事、

[160]

廻文

康熙廿二年

天和三年癸亥

今度御國元祢寢八郎右衛門殿御仕置ニ付、斗升并俵作り相改り候間申請召下候、来正月方公私一統ニ可用様ニ可被觸渡候、自然相背者於有之者、稠敷可及沙汰候、右之趣堅固ニ可申渡者也、

亥十二月十八日

[161]

康熙廿二年

天和三年癸亥

今度御國元祢寢八郎右衛門殿御仕置ニ付、俵作り相改り候間、手本用ニ申請召下候、来年仕上せ上納米之俵作り、右品手本相調候様ニ可被申付候、此儀者別而入念候へて不叶通、於御國許被仰候条能々可被申付候、右俵作り下知者一間仕^(切力)脇地頭三人宛廻合ニ申渡、其上惣地頭可被加下知候、自然大方成儀共有之、右之通御成合候ハ、知人可致沙汰候間、此旨賢固^(堅)ニ可被申渡者也、

亥

十二月廿一日

[162]

康熙六年

寛文七年丁未

康熙十二年

寬文十三年癸丑

一上馬老疋

代錢三百貫文

一中馬老疋

代錢貳百貫文

一下馬老疋

代錢百五拾貫文

右之直段、御定可被下様ニ御披露頼上候、以上、

三月九日

別当 平識親雲上

一上馬老疋

代錢貳百貫文

一中馬老疋

代錢百五拾貫文

一下馬老疋

代錢百貫文

右、馬代之儀、此中不似合高直ニ罷成候付而、此節被仰定候、向後右直段ニ而可有壳買候、若相背者於有之者欄敷可及御沙汰之由被仰出候間、如斯候、以上、

六月廿七日

申口

首里 那霸 泊 惣地頭衆

[164]

寛文九年

一 砂糖壹斤二付

代錢八百文

一 鬱金壹斤二付

代錢七百文

右、当年於鹿兒島直段高下御座候二付、当年より右之直段被仰定候間、公儀ニ可被売上候、弥以脇壳御禁止ニ候、自然脇壳仕候ハ、至于地頭衆御沙汰可被成旨、我々々可申渡由候条、^(被力)噯中堅固ニ可致仰付候、以上、

酉十一月二日

宜湾親雲上

惣地頭衆

[165]

康熙廿二年

天和三年癸亥

一 砂糖壹斤二付

代錢壹貫百五拾貳文

一 鬱金壹斤二付

代錢壹貫八拾八文

右、当年之砂糖・うきん之直段如此相談相済候間、諸地頭衆江可被申渡者也、

御物座取次

亥五月十八日

大田親雲上

[166]

康熙十二年

寬文十三年癸丑

手形

一 檜木 壹本、長貳間二三寸角

代錢壹貫五百文

一 檜枚木、長貳間二廣四寸原二寸(厚九)

代錢壹貫五百文

一 檜敷鴨居木 壹本長六勺五寸
廣四寸原五寸
(厚九)

代錢壹貫四百文

一 同丸木 壹本長貳尋二
根木口六寸四分

代錢壹貫八百文

一 同丸きち 壹本長三尋二
根木口一寸貳分

代錢百五拾文

右、從此筋脇々所望材木手前夫二而之直段相定候、木之依大小二右之例を以算用仕、向後代錢可被請取者也、

丑三月一日

三司官

池城親方

[167]

康熙十九年

延宝八年 庚申

一 麦 壹石二付

代錢八拾貫文

一菜種子壹石二付

代錢百八貫文

右、当年之直段如此相談相濟候間、公私一統ニ相守候様、各嘜中可被申渡者也、

御物座御印

申六月十日

越来親方

[168]

康熙廿三年

貞享元年 甲子

一八重山上布 壹疋

代銀拾八匁五分

一同下布 壹端

代銀六匁

一官古上布 壹疋

代銀拾六匁五分

一同下布 壹端

代銀五匁七分

一久米紬 壹端

代銀廿七匁

一綿糸 壹把

代銀拾四匁

右直段ニ御相談相濟候間、当月方其引合仕候様可被申渡者也、

御物座取次

子正月十五日

越来親方

[169]

康熙廿三年

貞享元年

老兩敷

銀子老刃二付

代錢四貫文

右直段ニ御相談相濟候間、当月方公私一統ニ其引合仕候様ニ暖中 泊中 霸(那)な中首里可致申渡者也、

御物座

越来親雲上(親方)

子正月十五日

[170]

康熙三十九年

元祿十三年庚辰

銀子老刃二付

代錢百五拾文宛

右直段被仰定候間、從今日取拂仕候様ニ諸奉行所江可致仰渡候、以上、

(辰十二月十一日カ)

御物奉行印

[171]

康熙四拾二年

元祿十六年 癸未

新銀壹匁

古銀ニノ七分五リ

右者此中新銀壹匁ニ付、古銀七分引合ニ而候得共、於唐右之引合ニ仕候由、此節到来仕候間、今日方其引合被仕候様、諸座江可被申渡候、以上、

八月十八日

保榮茂親雲上

[172]

寶永元年

銀子壹匁

代錢壹貫貳百文

右之通被仰定候間、今日方其引合被仕候様ニ御嚙中江御申渡可被成候、以上、

申八月十八日

御物奉行

[173]

康熙四拾四年

寶永二年

銀子壹匁

代錢貳貫文

右之通被仰定候間、今日方取計被仕候様ニ御仕配中江御申渡可被成候、以上、

酉正月朔日

御物奉行

[174]

順治十四年

明曆三年 丁酉

一 兵法稽古并夜行之時、刀・脇差持行間鋪事、

右之條々 大和・琉球之御禁止ニ而候間、一ヶ條たりとも相背者於有之者、無遠慮可被申出者也、

明曆三年丁酉二月十八日

三司官

[175]

康熙四拾二年癸未より同四拾五年迄廻文寫目錄

一新銀壹匁 古銀にして七分五引合ニ被仰定由、諸座江被仰渡候事、

一鍋保丸様御卒去ニ付、殺生禁斷、物音被召留候儀ニ付御觸之事、

一那覇浦崎筑登之下人宮城与申者、夜中誰人共不相知庭江呼出相果置為申由披露有之、被仰渡候事、

一御城中皮草履并簑笠・長さし仕儀、御禁止之事、

一諸士より御材木挽上度由願有之ニ付、色々物数寄共有之、衣類(華美)花火過不宜ニ付、締方被仰渡候事、

一不孝之者八付之事、

一大和年号寶永与相改候旨、被仰渡候事、

一焼酎造候儀、御免許之事、

附、諸祝儀等之節ハ、先度被仰渡置趣堅ク相守可申旨、被仰渡儀込、

康熙五拾貳癸巳より五拾四乙未迄廻文寫

目錄

- 一時・よた多罷成邪魔事申、世間之障ニ罷成候ニ付而、公義時・よた并相付之外、一向被相留候事、
- 一百姓農業之儀ニ付而、両惣地頭江申渡ケ条之事、
- 附、諸間切百姓身壳候儀、右同断、
- 一又三郎様御元服被遊候ニ付、御在番所江御祝儀之事、
- 一於御國元、刀・脇差并兵具之類相求候儀、御法度之事、
- 但、於御國元右類拵之願有之方、手形之儀ニ付被仰渡候儀者込ル、
- 一今度從 御國元御領國中并御檢地被仰下候付、王子・按司・親方衆江詮議被仰渡候事、

- 一江戸表地震・火事有之候付、御国許御儉約被仰渡候由御到来ニ付、弥相守候様被仰渡候事、
- 一中将様御逝去ニ付、諸士一七日白衣裳着并物音被仰渡候事、
- 附、龜姫様御卒去之由御到来ニ付、御在番所江御悔被仰上候儀込ル、
- 一薩摩守様御下向御祝儀之御使者被成上国候ハ、早々御目見可有御座候間、御祝物之御目錄等御用意有之、若相直ル儀も候ハ、其御地ニ而調替候由被仰下旨、被仰渡候事、
- 一島津家御代々様方之御書・御判物・御筆并御家老衆より之御書付、又者御当地軍記之類、御國元方御用ニ付、御觸之事、

〔177〕

雍正元卯年より同三年巳年迄制札・廻文目録

一 桐油之儀、大和船頭自銀を以買下候代銀式割三部掛相渡候得共、琉球調ニ而被差下候付、下物同前大式割懸被仰(右カ)置、諸事無間違様被相勤候、此段申越候、以上、

〔178〕

雍正四年午正月方申二月迄廻文寫目録

一 御國元上々様御卒去、御法名御到来、物音・殺生禁断被仰渡候事、

附、御卒去ニ付、思弟部・按司部・親方部・禪家・聖家、御奉行所江御悔被申上様、御觸込、

一 御國元大御支配付而、盛增高之半分增高被仰付、地面平等ニ相成間者、先出米懸ニ而上納被仰渡候事、

咸豊五年より同六年迄廻文

〔179〕

一 此節、小松相馬殿・五代怨兵衛殿・甲斐弥右衛門殿・小村純康殿・黒江善左衛門殿、異国方御役々御代として御渡海被成筈候間、自然依風并其元江御汐掛被成候儀も候ハ、早速飛船を以可被申越候、尤其節相馬殿ニハ御書院当御使を以御祝儀被仰入、御肴御進入有之筈候間、御在番奉行并役々御着船之節被仰渡置候通兼而手当仕置、諸事無間違様被相勤候、此段申越候、以上、

卯正月廿七日

國吉親雲上

[180]

一此節、諏訪數馬殿御当地御詰として御渡海被成筈候間、自然依風并其元江汐掛被成儀も候へ、早速飛脚を以可被申越候、尤其節者御書院当御使を以御祝儀被仰入、御肴御進入有之筈候間、御祝儀申上候、云々、

卯九月十三日

[181]

一來年江戸立付而者、仕舞方精々差急、初夏二者是非致上着候様分而琉球江可申越旨、高橋縫殿殿より被仰渡候段、琉球館より申來候、然者江戸御使者之儀、於鹿兒島茂段々御式事有之、萬一及延着儀茂候而者甚御差支相成事二而、仕舞方無滞相調置、時節能早々上着有之候様、先達而茂被仰渡置候得共、右通分而仰渡之趣有之候間、只今より其心得を以諸舞方折角差急、いつれニ茂初夏上着有之候様可被取計候、此旨御差圖ニ而候、以上、

附、樂師・樂童子江者樂正より可被申渡候、

卯十二月八日

宜野灣親雲上

[182]

一護国寺江逗留為有之咲人引拂二付、寺中為見物祈願人之外、老若男女多人數立寄蹈荒候由相聞へ、格別成御寺之弁茂無之、右様物めつらしく遊樂之挙動甚以無調法之仕形、別而如何之事二而、屹与御取締被仰渡候間、久米

村・那覇惣横目相合、右寺邊江詰居下知いたし、自然違犯之者者則々捕付可被申出、尤祈願二事寄立寄候者も可有之哉、氣を附致差引、縦令祈願迎も多人数出入不致様取締可有之候、此旨御差圖二而候、以上、

卯十二月十五日

兼城親雲上

[183]

一御國元 御城下所々植疱瘡相時行候由、右二付而ハ下船々より風氣移越候儀も可有之哉、当時柄疱瘡相時行候而者至極可差支儀二而、防方被仰付候間、童子共津端又者旅戻之家江不参様、且下荷物童子共入交候所二而取扱不致様、能々可相慎候、此旨那覇中・久米村中堅ク可被申渡旨、御差圖二而候、以上

辰三月七日

兼城親雲上

[184]

毎月御忌日朝夕御精進

- 一得佛様 (忠久公) 十八日
- 一慈徳院様 (宗信公) 十日
- 一重年公 (重年公) 十一日
- 一圓徳院様 (重豪公) 十一日
- 一大信院様 (齊宣公) 廿日
- 一大慈院様 (齊興公御夫人) 十日
- 一賢章院様 (齊興公御夫人) 廿日

一 芳蓮院様

八日

月次朝計、御祥月終日御精進、
(齊興公生母)
一 寶鏡院様

十八日

但、閏月有之節者、閏五月十八日、

右之通、毎月御精進日被定置候事、

右者御国許御精進日年来相慰、到御当分ハ御除之御方者有御座間敷哉、於館内奉伺趣有之候処、右之通被仰渡候段申来候間被得其意、支配中可被申渡旨、御差圖ニ而候、以上、

(九カ)
□月九日

[185]

一 去年佛郎西國提督来着、御当地彼國与箇条相定候様申立有之、段々御断被仰入候得共、一切聞取無之、不被及是非、別紙写之通御取替相成、逗留佛人共住家造立、食用品茂蕃錢京錢江換錢を以直買御免被仰付置候、就而者於其許諸事取計向之儀、去々年亜米理幹国提督依申立、文書御取替相成候筈、ケ条書を以被仰渡置候振合ニ基キ可取計候、尤佛国ケ条書之内、地屋等借せ渡筋相見得候付、萬一右様之申立有之候ハ、時宜相当之謂を以相断、自然落着於無之者、彼者都合不相損様程能取計、若佛人等残置長々逗留之模様相見得候ハ、早々成行飛船を以可被申越候、此旨御差圖ニ而候、以上、

附、一佛人等より約条書御取替相成候段存知候哉与相尋候儀も候ハ、府本方申越有之存居候段、可相答候、

一 異国船滞船中、くり舟・伝間等之儀ハ夷人等雇申出次第無遅滞可相達候、

辰十月七日

兼城親雲上

阿波根親雲上

川平親雲上

〔一宮古島 八重山島 久米具志川間切 久米仲里間切 慶良間島 伊江島 伊平屋島 渡名喜島 粟国島 久志間切 今帰仁間切 勝連間切 本部間切 国頭間切 讀谷山間切 喜屋武間切 在番〕

右之通、被仰渡置候間、可被得其意候、此旨御差圖二而候、以上、

辰十月七日

[186]

先達而御在番所より我々御用有之、致参上候処、近年江戸立・冠船引受二付而者莫太之失費茂差見得候間、平常質素節儉を専心掛、決而驕奢之風儀無之様、急度可申渡旨、被

仰出候条、萬反國王御為宜様可令精勤旨、御家老衆御書付を以被仰渡候段、御達有之、且亦御当地御難渋二付而者追々上納銀等御宥免之上、猶御取救を茂被仰付砌柄二而一往御仮屋方御相待向引方減少等を以段々御取縮之方、駿河殿御ヶ条書を以被仰渡候段館内より到来、右御書付備 上覽候処、困窮之段被

聞召上 御配慮を以段々厚御取扱被仰上候上、右通何篇為筋相成候様被仰付事候得者

御趣意之程一統令承知、儉約向猶以入念候様可申渡旨 御意被成下、彼是深重難有次第奉恐入事候条、此旨世上一統謹而可奉拜承候、然者来申年封王使御招請、来午年江戸江御使者被差上筈二而莫太之御入価差見得候処、先年来

臨時御物入之儀共打統御藏方御手迫成立、脇方御借財殊之外增長、館内御借銀茂古來未聞之大借二相及、極々御難
渋之砌、去辰年以來異国船繁々渡來、佛・嘆人等逗留、不意非常之御入費差屯、且而先嶋・久米嶋茂近來飢饉變等
打續未進穀大分相及候上、時々御救筋被仰付旁二付、弥増御難渋成立世上二茂一統難儀之砌柄候得共、封王使御
申請之儀、御一世一度之御太禮、江戸江御使者被差上候儀茂御當國御規模之御事候故、いつれの筋御先格通首尾克
被為濟候様不被遊而不叶御事二而、深御厭ながら先達而重置出物被仰付置候、就而者貴賤共猶以難儀可成立賦二候、
此涯取分儉約不相用候而不叶、御國元より茂右通段々難有被仰付、儉約筋訳而被

仰出、且 御意之趣茂御座候付者彼是心得二銘し、いつれ其涯相見得候様無之候而者不相濟、上々様方二茂諸事御省
略被為在御事候間、諸士末々萬反儉約を用、無益之費用者勿論、衣服飲食饗応家作等外見二不拘、如何二茂質素二
志て、先々身上取續、右御太禮首尾能相調候様、朝暮心掛候儀此涯之御奉公候条、末々二至り前文之旨趣具二可令
領掌候、去申年二茂ケ条書を以分ケ而稠敷御儉約被仰付置候上、連々申渡置趣茂有之候処、何ぞ守達之稜無之哉二
相聞へ候、人々節儉を用身上取統度段々誰茂覺悟有之賦二而、一統御時節柄を汲受、面々厳格之心得有之候ハ、
御儉約之一筋可詮立之処、連々過美之風二成來、質素取守候向者、却而鄙吝之様取受候習俗二而專外見二拘り、右
様時々申渡之旨趣茂汲受薄躰相見得、甚以不可然事候、是程御難渋之境節前文御趣意之段茂奉承知ながら此上等閑
之向茂候而者御達之本意取失候段者勿論、奉対御國元候而茂御都合不仕、旁如何之至候条、彼是世上一統深勘弁いた
し、向後是迄之流弊屹与引改、專質素節儉之風儀堅可取守勿論、外向而已省略を用、家中取締令大形、就中女人共
勘弁薄何歟仕來杯与申、内々雜作ケ間敷向茂候而者、日用臨時之費無際限、餘事實素之詮も立兼候条、右躰之仕向
屹与差留各分限二応し、日用少事たりとも成丈せり詰、此涯内外大小二よらす省略向誠実二取計、随分御趣法取通^(敢)
詮立、少茂驕奢之風儀無之様、精々可相嗜候、此旨國中島々江不漏様可被申渡者也、

辰十月廿九日

評定所

御物奉行、申口

右二付而者、題目各取締向二相懸事候条、勤向一稜被相励厳重見聞いたし、違背之者於有之者不依貴賤即々平等方取次申出、尤違背之者不罷居候ハ、其段茂毎月朔日首尾被申出、いつれ其涯相立候様、精々勤務可被致者也、

辰十月廿九日

評定所

康熙五十七戊正月同五十九年子十二月迄廻文寫

[187]

一唐物御締方ニ付而、御國元方数ヶ条を以被仰渡候付、次書ニ而觸渡候事、

一御國元方琉球之兵具持渡候儀御禁止之旨、且又刀持登候方ハ送状別立向可相附旨被仰渡候付、次書を以觸渡候

事、

一鳩目錢之儀、封印作直致通用候もの有之由相聞得候最中、(唐)たう人方ニ付而肝要成御入用候處、右通相掠候族於有

之ハ、親兄弟與中迄重科可申付旨、申渡候事、

一公儀御尋者之儀ニ付、天下并鹿兒島方御書付数通到来之事、

一右ニ付、諸島在番江人相書相渡堅相改、證文を以首尾可申出旨、申渡候事、

一唐物御締方并御國元方武具之類相求持下候儀御禁止、且亦此元方持登候刀茂御法様之通送状引合御案内申上、持

下候様ニ上國之面々江申渡候事、

一唐物之儀、本方有物ニ而も御國船頭水主并大嶋類之諸嶋人ニ賣渡間敷旨、申渡置処、去年於鹿兒島楷船水主之

者、町人へ唐物所望渡置及御披露候二付、猶又締方申渡候間、首里・泊・那覇・久米村中江五人組以證文首尾可申出旨、申渡候事、

一於鹿兒島万事二付而不締之儀無之、且亦國中欠落申渡出米共申付事候間、無益之費無之様ニ上國之面々申渡候事、
一公儀御尋者之内御吟味相濟、出牢被仰付置候処、又々御法相背致沖買候者有之、召捕大坂御奉行所可差出旨、
此節町御奉行方被仰渡候間、当地二而入念相改、其首尾可申上旨、御書付到来二付、諸島在番人申渡候事、

〔188〕

一当年返上物船方御下屋敷御方江相納候人參、惣様虫付罷成御用不相立候、去年渡唐船々・返上物船も当年不相届忒年之儀候得者、又々御用之人參虫付可罷成儀案中候間、於琉球見届こうじんなど不相付様、入念格護可有之候、
此段申越様御差圖之由、御部屋栖様御方物奉行衆、國分惣左衛門殿方承候、定而其御心得候可有之候得共、右之通被仰渡たる事候間、其通可被仰渡候、以上、

大脇正兵衛

九月廿七日

佐渡山親方

物奉行宛

〔189〕

一右御葉種之儀、入念致手入候儀二付御國元方被仰下、其旨趣委細申渡、醫者吟味之上手入致様、各書付次書を以当夏御國元江為申上由候処、右通人參二虫付、御用不相立由不念之仕形笑止之至候、当年も返上物格護仕候故

念遣存候間、随分入念虫拂等細々申渡、猶以手入之致様吟味之上、致格護来年可被差登候也、

九月廿二日

勝連親方

浦添親方

高奉行

[190]

去比大坂町奉行所ニ而唐物ぬけ商之者召捕候付而、同類とも国々江申越段々差出候得共、面々手前方改被出候との儀者いまた届無之候、当六月書付を以相達候趣共も候處、如何被相心得候哉、先様被差出候者大坂ニ而相知候分計之儀候、年来之事情得ハ、ぬけ商之もの余多可有之候間、西国・中国筋津々浦々人多く集候所者平日無油断被致吟味、他領之者ニ而もぬけ商ニたつさハリ候者ハ召捕、大坂町奉行・長崎奉行両所之内手寄可被相届候、尤召捕候者を被出候二者不及候、以上、

十一月

一唐船海上ニ見懸候ハ、間を隔可罷通候、并唐船と同様舟かゝり不可仕趣、当夏被仰出候、最早右之御觸國々廻船之者迄も可致承知候間、此以後唐船漂流之節番船之者ニ申付置、若右躰之品相背候船於有之者相改、うたかわしき儀も候ハ、召捕可申候、但ふと参懸候様子ニ候ハ、湊江引入、舟中荷物委相改、其上ニ而通し可被申候、以上、

十一月

右之通段々 公義被 仰渡候ニ付、去年十一月被 仰渡御書付之写、琉球在番江差越之、唐船漂流之所近ク不圖不参懸様、其元江下居候船持共江堅可申付旨、先比申越候、然者拔買之儀ニ付、別而被入御念御事候故、去年六

月以來被仰渡候御書付之寫、此節相渡候間、撰政・三司官江右仰渡之趣末々迄相守候様ニ可相達候、尤地下之船、唐船近く船を寄唐物致拔買候儀、又々買本不慥唐物類相求候儀、曾而不仕様時々可申渡候、就中横目之面々申含置、萬一右躰之者於有之者遂吟味、其者急度覚悟申付置、無油断早々可遂披露候、右之趣稠敷可申渡候、以上、

二月十八日

[19]

琉球江可申渡覚

一唐物致拔買候者有之、從 公義段々被仰渡趣有之候、御領国之儀琉球より唐通融有之候付而、前々より別而被入御念段々締方申付置事候故、大形者無之候得共、萬一輕キ品ニ而茂蜜々(密)致商売、自然 公義及御沙汰候儀共有之候而者別而不宜事候条、随分入念締方堅固可被申付候、尤爰元江持渡候唐物之儀も自今以後致脇売候ハ、買手より御勝手方江申出令免許候節、仮屋守承届慥成品々売渡候様ニ与此節琉球仮屋守江申渡候、且亦御当國之者唐物於長崎買調候節も御勝手方免證文を以可相調候、上方於他国買求候儀一切令停止候、乍然菓種之儀者他所ニ而茂不相求候而不叶品有之候ハ、拔物ニ而無之段売主より證文取置可相調候、買元不慥唐物相求候者於有之者、不依自他国者屹与可及沙汰旨、御國中一統申渡置候、尤琉球在番方江茂委細申渡旨有之候条、聊緩せ之儀無之様可仕候、

右之通三司官方江可申越候、以上、

亥四月

種子島弾正

[192]

覺

- 一米・粟老石起 代銀八拾九匁六分錢
 - 一麦老石起 代銀四拾四匁八分錢
 - 一黍老石起 代銀三拾九匁貳分錢
 - 一菜種子老石起 代銀百四拾匁錢
 - 一白大豆老石起 代銀百五拾老匁貳分錢
 - 一本大豆老石起 代銀百四拾匁錢
 - 一下大豆老石起 代銀百拾貳匁錢
 - 一下小豆老石起 代銀百匁八分錢
 - 一(綠)豆老石起 代銀八拾九匁六分錢
- 右之通、今日方相場代如此二被仰付候事、

亥八月七日

御物奉行

[193]

一先頃渡邊外記書御用先西國・中國筋之面々唐船拔商之者於領分吟味之様子、家来とも相扣相当候処、或領内之者共證文申付、或誓紙(詞)血判致させ候、又ハ相觸候書付を度々誑聞せ所々有之由書付差出候、是等之事無益之儀改之、名聞迄二而書付二預ヶ置、畢竟吟味之本意共不相立事二候、右之類無益自今堅無用二可被致候、旧冬茂書

付を以相達候通、拔商之者共於奉行所遂僉議、其領主江申越候得者召捕被差出候得とも、面々手前より改被出候者無之候ハ、吟味之筋おろそかに候故と相聞得候、向後者一人成とも召捕候を専一二可被申付候、以上、

六月

右之通今度從 公義被仰渡候間、撰政・三司官可奉得其意候、唐物拔商

御禁止之儀ニ付而者、去年以來段々被仰渡候趣有之、先達而委細申渡置候条、猶以忘却仕間敷候、右躰改之儀ニ付而者書付を讀聞せ證文等取置候迄ニ而者書付ニ預ケ置筋ニ而改之詮無之候間、横目共且亦役々之面々、其外ニ茂蜜々申含置可然者共江茂見合次第とくと申聞置、兼而氣を付候様可仕候、尤地下之船、唐船近船を寄致拔買候儀、又者買元不慥唐物類相求候儀、曾而不仕様可相心得候、萬一右躰之者於有之者遂吟味、其者急度格護申付置、早々可遂披露候、聊大形無之様可被申渡候、以上、

九月

一唐物拔買之儀付、此節從 公義被仰渡趣有之候間、謹而奉得其意堅固相守可申候、以上、

九月

弾正

[194]

一米・粟老石 代銀貳拾八匁錢

一白大豆老石 代銀三拾七匁四分錢

一下大豆老石 代銀四拾六匁七分錢

一本大豆老石 代銀五拾貳匁五分錢

一 麦 壹石 代銀拾六匁三分五り錢

一 黍 壹石 代銀九匁三分五り錢

一 小豆 壹石 代銀五拾壹匁三分五り錢

一 菜種子 壹石 代銀三拾七匁五り錢

一 粟 粃 壹石 代銀四匁錢

一 菜種子 油 壹盃 代銀壹匁五り錢

一 胡麻油 壹盃 代銀壹匁五分錢

右、相場代右之通被仰付候間、今日より其取拂仕候様ニ御暖中江可被申渡候、以上、

三月廿四日

[195]

一 唐船拔商之儀ニ付而者、從 公義段々被仰渡、先達而申渡置候處、今度長崎御奉行より又々被仰渡候趣有之、地方之浦々江者別紙之通一統ニ申渡候、右條書之寫此節相渡之候、於琉球者地方之通二者難成儀而已有之候得共、扱買之儀ニ付而ハ被入御念被仰渡儀ニ候間、撰政・三司官江茂兼而入念候様可被申渡候、以上、

子二月日

比志島隼人

嶋津奎

島津内記

一今度從長崎御奉行被仰渡候者、先比沖買ニ罷出候者召捕被差出候方有之候、畢竟唐船打拂候より者專要之儀ニ候、且亦近比ハ逢洋中ニ而帆影茂陸より不相見所ニ而、唐船へ日本船を附候而致拔商候段粗相聞得候、拔商相仕無候而茂荷物ハ兎角陸江取揚可賣拂事候、日本船者常躰之小船之様子ニ茂有之間敷候、荷物等入置候仕形茂可有之候、心付候ハ、左様之躰茂可相知候間、随分精を出召捕候様可仕旨被仰渡候、唐物拔買之儀ニ付而者、去年以来段々從公義被仰渡候趣茂有之、委曲申渡置候、猶以此旨相守此節被仰渡候通、拔買之者向後召捕候方專要之候間、可奉得其意候、

一於洋中拔買相仕舞候而茂、兎角荷物陸江持卸可売払候間、不依自他国之船、浦々江致着船候ハ、通路筋之津口番人證文可有之条見届之、別条於無之者荷物不及改候、若證文無之疑敷躰ニ候ハ、別而入念相改、若白糸・唐織物、其外唐物類、其外唐物類(衍字)、於有之者其船不致出帆、船頭・水主共欠落など不致様其手当申付、不寢之番余多附置、早速可遂披露候、曾而油断仕間敷候、

一拔物之儀ニ候得者、別而竊ニ致格護筈ニ候間、積荷物一々可相改候、自然者船中ニ重座などに相拵隱置儀茂可有之候条、随分氣を付可相改候、右改ニ付及滯船候共、唐船拔物之儀ニ付而者、諸船共ニ入念可相改旨、公義より被仰渡候趣を申聞、能々入念可相改候、

一於洋中、唐船へ日本船を近寄せ候儀見及候ハ、追船五六艘先早速可出之候、左候ハ、一艘ニ役人と頭など三四人程并從成衆中二三入ツ、乗組、鑓・鉄砲・ことり鳶口類見合次第乗付可成程心懸、追付唐船江日本船を近寄せ候ハ、可差留旨、公義仰渡之趣得と申聞、其船を地方江引入候様可相心得候、自然右唐船へ相付候日本船(せり)茂不得差留様子ニ陸より見及候ハ、追々小船餘多所役人と頭など其外衆中余多鑓・鉄砲・ことり鳶口類持者候

而乗出、地方へ引入、船中相改唐物之類を致所持者番人等申付候儀、前条同断可相心得候、且亦唐物積入無之候而茂右躰之船二候ハ、留置、早々可遂披露候、

一 追船を近寄せ候ハ、悪黨共難逃存候間相防候儀茂可有之候間、可成程事を不致、此節 公義より被仰渡候趣申聞相定可申候、萬一悪黨共より刀なと抜候而相働、無是非仕合候ハ、打果二而も時宜次第二可致候、縦打果候儀二成立候而茂何とそ一兩人成共生捕候義を專一二可心懸候、尤捕候者ハ船共二陸近ク列届、右躰之船者可差留旨 公義 仰渡茂有之候段申聞、不寝之番等堅固申付、欠落など不致様格護仕、是亦早速可遂披露候、

一 自然日本船を差留候付、唐船より致荷擔相防候ハ、乗出し候者共茂可成程可成程相働可申候、萬一唐人二死人なと有之候而茂無是非事候間、其節之時宜相応二相叶可申候、

一 悪黨者共致手向候付、討果生捕何人有之候、唐人共致荷擔相働二付無是非死人など幾人、且亦悪黨船追失ひ候儀共候ハ、陸より日本船近寄候海上之道程、風波之善悪、又者難追付次第、其節之様子書付を以早々可申出之候、其趣を以有躰を

公義江委細被仰上答候間、聊大形二存間敷候、

右之趣堅固可相守候、抜物之儀二付而者毎度申渡置候得共、此節被仰渡候趣二付而者猶以浦々之者迄も平日不致油断様、稠敷可申付置候、萬一緩之儀有之候而者、此御方御無調法罷成事候間、別而入念候、聊大形有之間敷候者也、

享保五年子正月日

隼人

奎

内記

[197]

一元祿以後之銀子之儀、來丑年を限、翌寅年より世上通用一切停止之旨從 公義被仰渡候由、此節御國元方被仰下候旨、右銀子所持之方者來春、夏便差登可申候、此旨國中急度可被申渡者也、

十二月七日

康熙十一年壬子より同十五年廻文寫

[198]

一鉄砲式拾挺

右、当秋進貢船二艘之海上用心持用之内と可被下候、

子七月廿四日

当銘筑登之親雲上

世名城筑登之親雲上

名嘉真筑登之親雲上

右之通、渡唐役者被申出候間、宜様ニ被仰上拜借可被下候、以上、

七月廿四日

池城親方

伊野波親方

羽地按司

有田新左衛門殿

鎌田弥右衛門殿

一きりしたん宗門之儀弥 御禁制之旨、当春天下仰出就有之、先頃條書之寫差越候、右之趣改不怠様ニ可被入念、萬一右宗旨於有之者、早速鹿兒島可致披露旨、島中江堅可被申渡事、

一今度手札改之儀、先年之帳ニ引合、改大形無之様入念、萬事無遲滞可沙汰有事、

一百姓之子を乞請直子札取申儀、堅令停止事、

一流罪人之儀者其島々ニ而手札可出之、主人有之者手札肩書ニ可被記之、勿論古札ハ可取上事、賣遠島人之者ハ賣流人与可書之事、

一額ニ入墨之流人ハ手札肩書ニ入墨流人与可被記之、尤嶋々へ被遣置候者同断たるへき事、

一札失候者并手札替之者ハ如前々過料可被申付候、手札失与之偽申出者も可有之候間、入念可有沙汰、不慮之火災などニ而札於致焼失者、其間切之物頭證文ニ而可相糺之事、

一死人札可被取上事、

右條々堅固可相守之、若緩疎於有之者可及沙汰者也、

寛文十二年子九月十五日

弾正印

勘解由印

又左衛門印

帯刀印

市正印

右御條書、此節人数改二付、從 大和被仰下候間、堅固ニ可被相守候、若緩之儀有之者稠敷可及沙汰二者也、
子十月廿七日
池城親方印

〔200〕

一大倭・唐へ之使者、旅前親子兄弟之外振舞ニ参間敷事、

一親子兄弟之外、為暇乞酒肴提重不可致持参事、

〔一〕帰帆之刻為土産物、不依何色不可贈候事、

一常々傍輩中申受馳走かましき振舞無用之事ニ付、懸合之料理ハ一汁三菜いかにも輕ク可然事、

一不逢祝儀之振舞者、先年被 仰出候趣、弥可相守事、

一先祖法事之刻、出家振舞二汁二菜、引物三色之外可為禁止事、為差知親類之外、提重ニ而見廻無用之事、

一右先年從 大和御制禁被仰下候處、頃日猥ニ有之由候、畢竟者奉公方之緩ニ罷成儀、且亦其人之為ニ罷成候
条、向後以其心得御奉公方被相勤專要候、若相背者稠敷可及沙汰者也、

寛文十三年癸丑六月五日

池城親方

[201]

一延寶元年

右、年號去歲九月廿一日、大倭御改元御座候由、此度被仰下候条、今日方用様ニ噯中へ可被觸者也、

寅三月五日

[202]

一夏衣裳之事、

按司部・親方部・御物奉行・取次衆ハ、於御城御振舞・御見舞之刻、細上布・紺染・淺黄染・深玉色之類可然事、

一脇々者紺島類之事、

一冬衣裳之事、

按司部・親方部・御物奉行・取次衆ハ、

一正月朔日・十五日・冬至、又者那霸御奉行所御禮ニ被差出候刻、縹子・緞子・紗綾之類、着被仕候而不苦事、

一常二者日野紬・紀子・木綿之類可然事、

一座敷衆并其外方日野紬・紀子之類、常二者木綿之類着仕可然事、

右、此中衣裳定無之二付、無上下之分候故、此節相定候、各相背者於有之者、其沙汰可申付者也、

寅四月十五日

羽地按司

〔203〕

一当年之米直段、石二付代錢貳百貫文ツ、公私一統ニ相定候間、首里三平等堅固ニ觸渡可有之、若相背者於有之者、稠敷可及其沙汰、

閏六月十一日

三司官

〔204〕

一筆令啓達候、然者異國船近日追々致帰帆候間、領内可入念之旨、自長崎奉行所被仰下候条、島々おひて飛乗之者無之、又者船中之者不残置様、堅ク可被申付候付、然順風無之陸近寄来候ハ、如早晚番船附置、日和次第為致出帆、後日其首尾可被申出候、委曲兼而申渡置候趣、相違有之間敷候、謹言、

九月十六日

肝付主殿 町田勘解由

島津帶刀 島津市正

島津出雲

〔205〕

一おくこのこと申阿蘭陀人てしぬまるか國主与申合、日本江商売ニ可致致企之旨、去年長崎奉行所江阿蘭人申上由候、彼輩者阿蘭人同前之由候間、自然依風波其地江令漂着候者碇を入候ハ、唐船来着申時之御仕置を可相守旨、当春御條書被成下之候間、致書写差遣候、具二拜見可被得其意候、若シ致漂来儀御座候ハ、右御條目之趣相達早速以飛脚可被申通候、鹿兒島申上事候条、好々可被入念事、

乾隆十九年甲戌年同廿五年迄廻文目錄

[206]

- 一 御前様 信證院様御逝去二付、慎方之儀被仰渡候事、
- 一 墓所を明、死人之簪・衣裳等剥取候者有之由、右躰悪行之者見出聞出申出候者御褒美可被下由、右二付段々被仰渡候事、
- 一 奥御書院江常式被遊 出御候節、生花御儉約二付、被召留候事、
- 一 諸役人帳内無出入、且帳調方宜有之候儀二付、御褒美之事、
- 附、琉仮屋藏役并両先島役人御褒美込ル、
- 一 樺山左京殿・桂太郎兵衛殿、御用物調用馬尾根仮屋方江差下候處、荷札彼方御与力名書計二而宛書無之候故、向役方何方江も届方難成由二而差帰候付、其段仮屋方より申越有之、向後右躰之節ハ得差圖可致首尾方旨、且亦仮屋方親見世宛書之届物被差下候處、付状探束仕候^{索之}とて届方相滞候不届二付、存之向役科柰料被仰付、右二付里主・御物城江段々被仰渡候事、
- 一 殿様御副札并 上様御副札之儀、
- 一 太守様御名被遊 御改候付、書改被仰付候間、御評定所江可差出旨、被仰渡候事、
- 一 やちう病之儀、別紙之通品々取合相用候得者、致相應快罷成由候、田舎之儀右躰急病差当候節、醫師申受候儀差支申積候故、別紙相渡候間、右病氣差当候ハ、相用候様可被申渡候、且亦田舎二者右躰之療方、又者其外二茂養生之致様跡々方传来、于今相用其詮相見得候儀茂可有之候、右療方ハ於何方茂可相調候得者、別而重宝之儀候間、檢者二而百姓中相尋、委細書付を以来月十日限申出候様可被申渡候、左候而御醫者中江為致吟味候上、國中

江被^{ママ}可為相用候、此旨支配中堅可被申渡者也、

十二月十九日

三司官

〔207〕

やちう病之薬

一 いん九年母皮三わ、

一 もんじゆるいちゆび根 壹束、

一 阿加いすまい根 壹束、

一 真かや根 壹束、

一 芥根 壹束、

一 苦竹中子 壹束、

一 青燈心、

右、水二碗入一碗ニせんじ用候也、

但、右品相用候内青芥之汁もミ出、酒ニ入相用候而も能候、

一 いん九年母皮、

一 鍋へすく、 但、なへのほそを取候而用、

一 牛房壹束、

一 芥之根 壹束、

右、是茂やちう病之薬ニ而候也、

戌二月十九日

〔208〕

一当二月二日

御前様御逝去被遊候由、御到来御座候付、諸士今日中可相慎候、

一普請之儀、今日中可相止候、

一殺生并鳴物遊興之間敷儀、今日方日数十日可相止候、

右之通被仰渡候間、不洩様可被申渡候也、

四月十七日

〔209〕

一又三郎様實名忠洪様与奉稱候付、

右御實名之字、且又唱同様之名乗相用候者者、早速可相改候、

右之通被仰渡候間、急度相改候様可被申渡候、以上、

戌十月十五日

三司官

〔210〕

一樺山左京殿・桂太郎兵衛御用之功夫馬□為納用馬之尾髮根白黒一包、当四月限仮屋守大山彦右衛門殿、於役所船頭小根占之藤右衛門江相渡被差下候付、那霸致着船親見世方江差出候処、荷札樺山左京殿与力児玉佐平次殿、桂太郎兵衛与力築瀬吉右衛門殿与有之、宛所不相知候付、請取叵成由二而差歸候付、如何様御用物二而可有之

候間、被相糺請取度旨、藤右衛門再三申出候得共、宛所無之候而者曾而請取不罷成由申候付、無是非持歸り為申由二付、役所江差出候、然者右通宛所不相見得候へども左京殿・太郎兵衛殿与力名書有之候付而者取揚、得御差圖何分ニも可致首尾処無其儀、自分計を以差帰、御用物調方間違罷成候、至以後ニ右通有之候而者御用向ニ茂間違可有之候間、向後右躰之仕形無之様、親見世方江可申渡旨、此節琉飯屋方被申越趣有之候条、向後右躰之節者、即々申出候上、致首尾候様可被申渡置候、

一右通得御差圖可相計之処、無其儀別而不可然儀候、何様之儀ニ而右通候哉、委曲其訳被相糺可被申出候、以上、

亥十月廿三日

[21]

鹿兒島御禁断日

一淨国院様 毎月十日

一靈龍院様 同五日

一瑞仙院様 同廿日

一慈徳院様 同十日

一圓徳院様 同十六日

右之通、此節從 御國元被仰渡候趣有之候間、支配中不洩可被申渡者也、

亥十一月廿三日

三司官

鹿兒島御禁断日

一 寛陽院様

正御月忌十一月

毎月廿九日

一 大玄院様

正御月忌九月

同十九日

右、五十年御回忌相過候付、月次御忌日・御精進日被明、殺生等之儀無御構候、死罪等重き御科目不被仰付、遠流其外御科目事不苦候、御忌日二者御科目事都而不被仰付由、此節被仰渡候、

一 浄国院様

毎月十日

一 靈龍院様

同五日

一 瑞仙院様

同廿日

一 慈徳院様

同十日

一 圓徳院様

同十六日

右之通、此節從 御國元被仰渡候趣候間、可被得其意候、以上、

十一月廿二日

三司官

〔213〕

一信證院様被遊逝去候付、殺生并鳴物遊興ケ間敷儀、今日より日数七日停止被仰渡候間、不洩可被申渡候、此旨差
圖二而候、以上、

四月十五日

〔214〕

寫

一重 シゲ イエ ヘル タケ トヨ ツク ヒロ タ、
家 治 竹 豊 繼 洪 忠

右文字實名致遠慮、同唱之文字迄可致遠慮候、

一貴 吉 信 宗 年

右文字實名可致遠慮候、同唱之文字ハ遠慮ニ不及候、

右者實名之文字、以前方段々遠慮被仰渡置候得共、

右外之文字者不及遠慮候、此節表方御役人限江致通達、與中・支配中、諸外城・私領江可申渡旨致通達、御側
方・御隠居御方・御勝手江茂可相達候、

十一月

圖書

右之通被仰渡候間、急度相改候様可被申渡もの也、

子五月八日

三司官

〔215〕

一頼久

右之二文字、名乘二相用候儀從御國元御禁止被仰付候間、一切用間敷候、此旨支配中可被申渡者也、

子十一月十八日

三司官

〔216〕

一去年琉球切支丹宗門改帳当夏差登候付差出申候処、土家内式万八百拾九家内与有之、去々戌改帳二ハ式千八百式

拾家内与御座候処、糺方仕可申上旨被仰渡候、為念茂相届候故見合申候処、是亦同斷二候、酉札御改本候へ者、

惣家内ハ不相替筈御座候得共、定而書誤り二而可有御座候、其外帳内勘定方ハ何之間違之儀有之間敷与存候得

共、何れ之筋ニも爰元ニ而者叵被相糺御座候間、琉球江申越、相究趣来夏申上候様可仕旨、書付を以島津權左衛

門御取次ニ而差上被聞召置候間、糺方被仰付、来夏可被仰越儀奉存候、改帳差返此段御問合申上候、以上、

八月廿一日

木場傳内

宮城親方

城間親方

〔217〕

一今度於 西御丸御誕生之

姫君様、御名

千代姫君様与奉称候、千代之文字名ニ用候儀末々迄茂先年来遠慮之事候故、此節分而不申渡候、右之通表方江致通達、御側方・御隠居御方・御勝手江茂写を以可相達候、

八月廿七日

縫殿

[218]

一かもし　長三尺五寸以上、色ハ如何ニも黒き方々、

但、拔候而御用之由分而御座候、切候而者御用不相立候、

右者

於嘉久様御用御座候間、当夏古米立船便之間ニ合、御所望相渡候様ニ与新御奉行様方御申出有之候間、所持之方者四五わ程ニ而も代付取添、来月五日限小細工奉行所へ申出賣上候様、首里中・那覇中・久米村中・泊中不洩可被申渡候、尤有無之段茂首尾申出候様、是又可被申渡候、此旨御差圖ニ而候、以上、

寅四月廿四日

[219]

一太守様御名、薩摩守様御實名重豪公与奉称候間、豪之字者勿論唱同様之實名相用候者ハ可致遠慮候、

右之通表方江致通達、御側方御隠居御方、御勝手方江者寫を以可相達候、

七月

圖書

右之通被仰渡候間、急度相改候様可被申渡者也、

寅十月六日

三司官

[220]

一 喜安日記、

一 琉球神道記、

一 南浦文集、

右、御用有之候間、所持之方ハ御借被差上候様、首里・那覇・泊・久米村中廻文差通、有無之首尾も急度可被申出候、御差圖ニ而候、以上、

閏六月九日

[221]

一 御轎夫頭代合之節者、御轎夫之内より人躰見合御印紙を以頭役ニ進、右御轎夫跡役之儀ハ退役之頭跡役与言上仕来候處、頭役ニ進候御轎夫跡役与言上可仕旨、御書院奉行湧川親方を以御念被成下候間得其意、向後頭役ニ進候御轎夫跡役与おかす可被申出候、

辰二月四日

琉球國要書抜粹

道光貳拾七年未より同廿九年酉年迄廻文寫

〔220〕

一去辰年佛朗西船来着一件記事組立方之儀、残置候仁人唐人等帰帆首尾引結候上組立候様被仰付置候処、去年佛
国大総兵渡来、右兩人者列帰候得共、右大総兵より今一ヶ年程二者彼国皇命可致到来、其節通事ニ申、猶亦右外
佛人兩人残置于今首尾取不申、且去年来着佛国・暎国之船、暎人医者残居候儀共いまたニ首尾取不申、記事組
立清書者不相調候、然処右都而之首尾引結候上、多端之成行組立候様有之候而者差支ニ茂可相及、異国一件ニ相
拘り候儀共相成丈ヶ者早々地組取付、漸々取調部置首尾引結候上、始終之成行相調候様被仰付候旨、可被得其意

候、尤右之趣者中取共代合之砌、無遺失次渡候様御申渡可被成旨、御差圖ニ而候事、

道光廿七年未三月十二日

〔23〕

知念間切外間切^(村)

内間筑登之親雲上

右者三司官小祿親方跡御役御國元江御伺之儀ニ付、御書翰為念宰領崎山筑登之親雲上乘船船頭被仰付、当正月那霸川出帆之處、不時之海上順風有少候上、風波荒立段々為及危躰儀も有之候處、船功宜船中末々迄申勸精々相働候處より僅之日數ニ往還共全乗届、一稜之働候間、相当之御褒美被仰付度旨、崎山申出趣有之、右御伺之飛船使名嘉地親雲上乘船者於屋久島沖破船、上着遅成候得共、崎山乗船右通早々乗届御返札無滞持下候段、遂披露候處、殊勝之儀ニ被思召候、仍何歟願出之砌、一稜其功見合候様被仰付候間、御船手勲功帳ニ書載置候様可被申渡候、以上、未四月廿一日

〔24〕

一中城王子様、唐御名尚泰公与被為附候間、名字并唐名名乘泰之字、当時附居候方者屹与相改候様、噯中可被申渡者也、

申正月八日

評定所

〔225〕

一此節從御國元御用ニ付、島津登殿并御同人御用達御渡海被成筈候、自然依風根其元江潮懸被成儀茂候ハ、早速
飛脚を以被申越候、且又其節者御書院当御使を以御祝儀被仰入、御看御進入有之筈候間、御在番奉行御着船之節
被仰渡置候通、兼而手当仕置、諸事無間違様可被相勤候、此段申越候、以上、

申二月廿五日

恩河親雲上

〔226〕

一大和年号当三月十五日より嘉永与被相改候旨、一昨日到来候間、同日より用候様可被申渡者也、

申七月十七日

三司官

〔227〕

知念間切久高村首里屋小之

並里筑登之親雲上

右者先達而佛朗西船来着、逗留佛人列帰候御届私上国之砌乗船々頭被仰付、去八月八日那霸川出帆、翌九日七ツ時
分方風辰巳之間相成候付、押上乘ニ而大嶋西之古見近乗寄候處、向風殊ニ風波強右湊江難乗入無是非御当地之様乘
戻候洋中逢大風、段々及難儀、帆樯伐捨風俣漂流、翌十日より者猶以風波猛數艫包板被相破候上、時々波茂打込
極々及難船候付、私を始乗合人数足輕永田伝次郎以下船方未々迄髪を切、深立願仕候得共大風相止不申、既二十死
一生之涯ニ及居候處、右並里水主中引勵、本船西江碇三丁・繩三房流シ、尤楫波ニ被打破候而者重而通船難成事候

付、早速楫卷揚昼夜段々相働、十二日朝よりハ風波静相成、十三日二者輿論島沖流行、暫其沖ニ而順風見合、十四日二者帆けたを以仮ニ檣相立、弥帆ニ而本帆を作り、又者さんはんていらを持、御当地之様通船、同日夜八ツ時分國頭崎近乗寄候處、風酉戌之間相成又以乗帰、同十五日七ツ時分二者沖永良部島近乗寄候得共、風子丑之間相成、又々御当地之様乗戻候、同日夜九ツ時分國頭間切邊戸崎江碇を御、早速奥村江問合差遣、翌十六日挽船を以奥港江廻船仕申候、左候而於彼所帆檣申請、船修補等付而茂右並里、所之者共相合、檣木見立猶亦木作船修補、帆作等水主中申勸相働候故、彼是早め相調、九月二日同所出帆、翌三日二者風酉戌之間相成、御國元之様乗行かたく、大島笠利間切前比田浦汐掛、同十六日同所出帆、順風不吹續、同十八日口永良部嶋汐掛、同廿四日未明山川參着、同廿六日前之濱上着、御用相濟、去十月十一日山川廻船、同十四日同所致出帆候處、雨天殊ニ波立強、御当地之様難乘行、同日夜八ツ時分口永良部嶋汐掛、同十五日夜八ツ時分同所出帆、同十六日其嶋渡通船之砌戌亥之間ニ而風波荒立、本船相弱漏所等到茂至極及心配候處、是亦右並里水主中引勵修補を加へ、亦者助木等ヲ入、同十八日日本部田仲江碇を御、翌十九日那覇川順着仕申候、右通上国之節者、時節後之海上、殊ニハ逢大風極々及巨船、且帰帆之砌茂七島渡ニ而風波強、本船相弱一涯及心配為申事御座候得共、右並里船柄達者之上、昼夜心労を尽、水主中引勵諸事働宜故、一統助命仕格別成御急用筋首尾能相弁、一稜之働殊勝之儀与奉存候間、何卒右次第別段之御取分を以、一稜其功勞御見合被仰付被下度奉願候、此旨可然様被仰上可被下儀奉願候、以上、

申十二月

德平里之子親雲上

右通申出披露候處、殊勝之儀被思召候、何歟願出之砌、其砌見合候様被仰付候間、御船手勲功帳ニ書載置候様可被申渡候、以上、

十二月

喜屋武親雲上

〔228〕

御國元

一御城下中并諸郷江茂所々庖瘡相時行候由、右付而ハ下船々々風氣移越候儀茂可有之哉、當時柄庖瘡相時行候而者至極可差支儀ニ而、防方被仰付候間、童子共津端又者旅戻之家江不參様、且下荷物童子共入交り候所ニ而取扱不致様、能々可相慎候、此旨可被申渡旨御差圖ニ而候、以上、

酉二月十八日

〔229〕

一來年江戸立付而者仕舞方精々差急、初夏二者是非致上着候様分而琉球江可申越旨、伊勢雅樂殿御取次ヲ以被仰渡候段、此節琉球館より申來候、然者江戸御使者之儀、於鹿兒島も段々御式事有之、萬一及延着儀も候而者甚御差支相成事ニ而仕廻方無滞相調置、時節能早々上着有之候様、先達而も被仰渡置候得共、右通分而仰渡之趣有之候間、只今方其心得を以諸仕廻方折角差急き、いつれニ茂初夏上着有之候様可被取計候、此旨御差圖ニ而候、以上、

附、樂師・樂童子江ハ樂正方可被申渡候、

酉七月七日

摩文仁親雲上

勝連親方

〔230〕

一來正月朔日、二ヶ寺并 尚濬様御神位江御焼香之儀、日食ニ付而者被召延、当日御書院奉行御使御焼香有御座度、奉存候事、

以上

西十二月廿二日

右之通、言上相濟候間、先例之通可被相勤候、以上、

西十二月廿二日

喜屋武親雲上

御書院右之通言上相濟候間、日食始不申内
御燒香之御使可被相勤候、以上、
寺社座

聞得大君御殿、佐敷御殿、野嵩御殿

大親右之通言上相濟候間、日食始不申内御燒香
之御使可被相勤候、以上、

[231]

一来元日未之三刻方酉頭一刻迄日食付而当日日食始次第、下くおり当を以言上候得者、御装束二而被遊御戒慎、圓

次第可被遊御着替事、

一右同付、役掛之王子衆以下役々迄色衣冠二而各詰座江罷出慎居、円次第退座可仕事、

一当番之親方・座敷、下くおり江罷出右同段之事、

右之通被遊御戒慎役々迄も慎方被仰付候間、奉得其意構之座江茂可被申渡候、以上、

西十二月廿二日

喜屋武親雲上

[232]

一来元日未之三刻方酉頭一刻迄日食二付而当日日食始次第、御装束二而被遊御戒慎、復圓次第御着替可被遊候間、

役掛之面々色衣冠ニ而各詰座罷出慎居、復圓次第退座仕候様被仰付候間、奉得其意、構之役々江茂可被申渡候、以上、

西十二月廿二日

康熙三拾七寅より同四拾一年午迄

制札 条書 廻文 高札寫

[233]

一京錢壹文ニ銀十六匁引合、御国許為相改由、此節琉仮屋方方申来候間、新銀壹匁ニ付鳩目錢三貫文引合にて、公私一統取遣申渡候事、

一前々ハ銀取遣仕候処、致中絶不自由之方ニ候間往々銀致取遣、錢之儀ハ目足尤諸物代之儀も銀ニ相改、壹匁以上五百目迄山川親雲上包候判銀可用由、去々年申渡候処不相守突止千万之至ニ候、依之此節猶以申渡候間、向後堅固ニ可相守事、

一百錢・悪錢不可撰由、先年御条目之通度々申渡置候得共不相守差支之由、致風聞不可然候間、向後然与可相守、云々、

右之通、首里・那覇・久米村・泊・諸間切江堅固ニ可被申渡者也、

(三脱カ)

康熙十七年寅三月十五日

[234]

一京錢壹貫文、銀拾六匁引合取遣可仕由、先比申渡置候処、京錢壹貫文拾五匁引合御国許為相改由、又此節琉坂屋方方申來候間、新銀壹匁ニ付鳩目錢三貫二百文引合、公私一統取遣仕候様ニ首里其外可被申渡者也、

一麦壹石

代錢百貫文

右、当年之直段如此相定者也、

寅四月十九日

[235]

一前々方有來候鳩目錢相減、國中不自由ニ罷成候、今躰ニ而ハ必然与可指支与念遣存、段々吟味為仕候処、鳩目之儀此中之一倍ニノ公儀へ買入、新規封印を以取遣仕候ハ、可然由申遣候間、弥其通申渡事、

卯四月廿五日

[236]

一近年、琉球人於御当地刀・脇差を相求磨拵等相調持渡者有之由、其間得ニ候、琉球国之儀者御領内之儀ニ者候得共、向後刀・脇差・弓・鉄炮其外兵具等琉球江持渡儀ハ一切御禁止之事候間可得其意候、尤於琉球致所持候刀・脇差御当地江持渡、拵等相調候儀者御構無之候間、於琉球寸尺并作相知候ハ、其段相糺、在番之奉行江申出候ハ、證文を取持渡、琉球方取次川村少左衛門江渡置之、帰帆之節少左衛門方裏書ヲ取可持下候、異國へ刀・脇差其外兵具等差渡候儀者

公儀御禁止之御事候故、琉球国之儀ハ渡唐口之儀ニ候二付、別而被入御念御事候、若右之旨致違背、於御当地
 刀・脇差・兵具之類相求、密々持渡候者有之、於露頭者評定所へ申出、急度御沙汰可有之候間、詰中之面々江堅
 夕可申聞候、尤右之段者三司官中江茂可申越候、聊緩疎有間敷者也、

元禄十二年閏九月廿五日

新納美作

右之通被仰渡候間、噉中堅固ニ可被申渡置者也、

卯十一月九日

池城親方

外略又

一内之浦鍋吹座之儀、去ル丑年宮之原甚太夫依訴訟、鍋座名代鹿兒島下町長倉孝左衛門江十七ヶ年御免許ニ而御分
 国中・琉球島々迄之鍋商売、右孝左衛門相勤候間、右座本外之もの致商売儀堅禁止ニ申渡候、然者琉球下諸船於
 当地鍋座方鍋買下儀も有之候ハ、孝左衛門證文を以船手方通手形申給可差下候、萬一船頭・水主共密々手
 形迦於積下ハ鍋座手代之者方可取揚之由申渡置候条、琉球并爰元於飯屋も可有其心得旨、寅二月廿七日之覺書を
 以琉球飯屋へ申渡候間、其時節三司官中江者飯屋方申越、地下人江ハ琉球方方為被申渡置ニ而可有之事、

一諸下船琉球着船之砌、檢者を以船改被下候節、右檢者鍋座手伝之者をも召列相改、自然手形迦之諸物并ニ拔鍋於
 有之者可取揚之、左候而船頭之儀者縦右之段不存候而茂不念付而科錢貳貫文、荷主・水主ハ壹貫文、自然船頭荷物
 二而候ハ、科錢三貫文上納可被申付候、且亦右船改之節取揚候鍋之儀者尤御物へ被召揚筈ニ候、脇々二手伝之者
 見逢取揚候鍋者鍋座方へ被下儀ニ候、此段ハ爰元船改所御法様之通申渡候事、

一鍋座方過分ニ壳殘鍋有候節、なへ座手伝之内壺人其元江不殘置候へハ支配叵成之由申出候へ、委細被承届於
無紛ニ者申出候通殘置、聊尔無之様ニ可被申渡候事、

右之通可被申渡者也、

元祿十二年卯十月十二日

御國遣座

琉球在番奉行

右之通向井市之丞殿方御引合御座候間、各喫中堅固ニ可被觸渡置者也、

卯十一月廿九日

池城親方

[238]

一銀子壹匁二付

代錢百拾文

右、直段被仰定候間、今日方取払仕候様ニ諸奉行所へ可被仰渡候、

辰十二月十一日

御物奉行印

[239]

一京錢之儀、当地ニ而取遣仕儀被召留被下度由、去辰年御國許江訟申上置候、就者被達 貴聞置候得共、未何分与
御誕茂無之、重而御意次第可被仰渡候旨、地下人并商人・諸船頭持渡所持之者可有之候、藏方江茂有之候半、熟談
仕京錢一錢茂國中江不持置、藏方江預置、来年以便船鹿兒島江返上可仕候、京錢之員数次第銀子を以引替ニ可被

下候、右通錢返上之沙汰茂候ハ、前以持主方存違隱置候儀茂可有之候間、横目・付衆方江も被申聞、緩せ無之様
二可被仰付旨御差圖にて、琉球方御取次川上八左衛門殿方十月十日御書付二而御在番奉行方へ被仰越候、
右通被仰付候間、首里其外五人組二而堅固二相改、首尾書付を以可差出候、諸間切之儀者兩惣之地頭二而相改、
右通二可仕候、左候而所持之方者藏方江相納、御國元立直之通、銀老勿二錢七拾老文六分之引合二而差替二銀可
相渡候、

一京錢所持之方者藏方江可差出旨、先比觸渡候処不相調候、此節之儀御國元方堅被仰渡返上之儀二候得者、一錢も
不隱置様二可相改候、最前觸之儀者無緩様可相心得候、

右書付之通入念可相改之候、若一錢も隱置至後日致露頭候ハ、当人者不及申、首里・那覇・久米村其外可申渡者
也、

午十二月十二日

池城親方

[240]

康熙廿七年より同廿九年迄廻文

一公儀流人江向後一類方通路不仕様二可被仰付候、若無抛儀於有之者被聞召届、其上二而御伺可被成旨、今度江戸
自 御老中様被仰渡之旨謹而相守、其旨預り之流人江茂堅可申聞置之、尤難遁儀於有之ハ其旨趣可申出候之、自
然本國又者当國江右之同類之者、其外何方方も蜜々書状等之取替者仕儀可有之條、常々入念不審成儀於有之ハ早
速可有披露、若於緩者預主可為越渡、右之旨琉球中流人預主へ急度可被申渡者也、

貞享五年辰三月廿七日

[24]

一筆令啓達候、然者異國船近日追々致帰帆之間、領内可入念之旨從長崎御奉行所被仰下候条、於島々飛乘之者無之、又者船中之者不残置様ニ堅可申付候、自然順風無之陸近寄來候ハ、如早晚番船付置、日和次第為出帆、後日首尾可被申上候、委曲兼而申渡置候趣相違有間敷候、恐々謹言、

十月十八日

肝付主殿

新納又左衛門

島津縫殿

島津大學

鳴津中務

鳴津図書

種子嶋藏人

新納又左衛門

喜入右衛門

鳴津大學

鳴津縫殿

鳴津圖書

三司官

[242]

一毛織之類持渡候儀御禁止之旨、於長崎唐人并阿蘭陀江被仰渡候、毛織之物持帰之、当年より者不持渡候者、因茲此節從琉球持渡候毛毯少々長崎候得共、急度相払候儀難成、漸(密)々々内證ニ而相払之者、右之通御禁止之物ヲ内證ニ而も相払候儀別而不可然事候間、向後持用之外不買渡候様ニ、当年より以後渡唐之人江慥可被申渡旨、大里按司・三司官江急度可被申越候、以上、

子十月十一日

右之通渡唐之衆へ各前より可被渡由、近江方より可申越之通、平山次郎右衛門殿取次ニ而被仰渡候間、渡唐之衆江委曲可被申渡候、此旨拙者方方可申越候旨新納近江殿差圖ニ而候、以上、

子十月十四日

有馬新左衛門

大里按司様

伊野波親方様

稻嶺親方様

[243]

一米老石ニ付

代錢百弍拾貫文

右、当年之直段如斯御相談相濟候之旨、公私一統相守候様ニ可被仰渡者也、

午七月廿六日

[244]

一米 壹石付

代錢百六拾貫文

右、当年之直段如斯御相談相濟候間、從今日公私一統相守候様可被觸渡者也、

午十月廿六日

[245]

一白大豆 壹石

代錢百貳拾貫文

一本大豆 壹石

代錢百壹拾貫文

一下大豆 壹石

代錢百貫文

右、当年之直段如斯御相談相濟候間、公私一統相守候様可被觸渡者也、

午十月廿六日

雍正元卯年より同三巳年迄廻文

[246]

一吉 京 重 豊

右之文字名乗之字ニ用候儀、無用可仕旨、且亦右之文字ニ而無之候而も、よし又ハむね・しげ・とよと唱候字

迄、惣而遠慮可仕候、云々、

正月

大藏

御勝手方

右之通、和田次兵衛殿御取次ニ而被仰渡候間、此段御間合申上候、以上、

巳二月八日

吉井甚右衛門

[247]

一大判之儀、元禄年中吹直有之、古来之大判より位劣候付而、此度右吹直、以前之大判之位吹改被仰付候、当十一月より兩替屋共江相渡候間、献上并被下物其外之通用者当十二月朔日より可用之候事、

但、老枚ハ金七兩二分之積たるへく候、兩替之者共買入之節、右分量不相減様ニいたし、賣出候時分茂銀多取へからず、此旨於令違犯ハ僉議之上可為曲事候事、

一只今迄之通用之元禄大判ハ、当十二月朔日より一切通用停止之事、

一元禄大判者当十二月方潰金成候条、所持之面々者後藤庄三郎方へ差越之、潰金之割合を以小判与可引替、尤貯置へからざる事、

但、潰金之分ハ老枚ニ付小判四両式歩余之積たるへき事、

右之通從 公義被 仰渡候間、琉球江被申越、持合も有之候ハ、来春便方差越候様可被申渡候、右元禄大判之儀、当十二月より潰金被仰付事候へハ、於有合者右仰渡之通潰金ニ而引替可被相渡事、此段申達候、以上、

十月

藏人

道光十九年己亥正月

一御國元加治木辺、当分疱瘡相時行候由、右二付而者風氣移越候儀茂可有之哉、疱瘡時行最早拾五年振相成候故、いつれ当秋二者瘡痂差下時行方可被仰付候得共、自然只今より相時行候而者、兼而菓種等之御手当茂無之候上、今般御國元世振不宜由候得者、春下船々方米可被下方無覺束、御当地二茂新米出来不申内者別而不由有之、旁以看病方差支候付、下船々御取締被仰渡、自然船中之内疱瘡相催候者、又者先達而相仕舞候者も罷在候ハ、一節奥之山龍渡寺江召置候様、船頭共江被仰渡度旨、御在番所江申上置候間、いまた疱瘡不仕者共ハ通堂并奥山近辺徘徊、又者大和人宿并焔帆之琉人宿致出入候儀共一切差留、猶又每家硫磺焼、門二縄を引如何二茂風氣之移無之様、嚴敷取締可被申渡旨、此旨御差圖二而候、以上

亥二月十九日

濱川親雲上

一別紙御書付之通、弾正殿方宮之原甚太夫殿御取次ニ而被仰渡候間、其御地御蔵方、其外元字大判有之候ハ、仰渡候通、来春便より御登可被成与奉存候、左様ニ御座候ハ、御拜領又者為御用意、何比より御求被成置候訳、且亦参先不相知、前々方有来候儀迄委細ニ御申越可被成由、甚太夫殿方口達ニ而承候付、此段申上候、右三ヶ条何れ之筋ニ御申越被成候而も何ぞ差障り申儀ハ御座有間敷与奉存候、且亦為御心得申上候、以上、
十月廿日
吉井甚右衛門

当間親方

〔249〕

一琉球國中野曝獸骨類、近年耕作養用大和江積越候儀御取締向ニ付、格別御差支之廉有之候条、以来前書骨粕類船々積登候儀津口通堅ク御停止被仰渡候間、在番并詰見聞役・琉球役々迄茂其旨相含、聊大形無之様取締可有之旨、但馬殿御差圖ニ付、右之趣撰政・三司官江茂急度可被相達置候、以上、

十一月八日

三原藤五郎

高田尚五郎殿

右之通被仰渡候間、國中取締向等嚴密ニ可申渡旨、唐物方御目附堀本休右衛門殿より被仰渡候間、被得其意御法度之旨趣堅可相守候、萬一相背者於有之者、屹与可及沙汰候、此旨不漏様可被申渡旨、御差圖ニ而候、以上、

亥二月廿二日

浜川親雲上

〔250〕

此節登船々江乗付被差登候足かる之内、髮立候面々者楷船・馬艦船江乗付、自然から抔江致漂着儀茂候ハ、りう球人之致支度筈之由、つけ役衆より承候段、那覇役人申来候、船々海上之不平者難計、依風並から致漂着儀茂可有之、御当地之儀御國元被遊御通融候段、唐江相知れ候而者至而御難題ニ相成事ニ而、都合能不申晴候而不叶事候間、萬一から致漂着、官人衆疑相立被相尋儀も候ハ、りう球人之段申立、其外機変ニ応都合能申晴、少茂御故障不相成様可被取計候、尤右之趣者末々江茂可被申渡由、御差圖ニ而候、以上、

亥五月廿一日

本部里之子親雲上

嘉慶元辰年方同三年迄廻文写

[251]

一今度

御男子様御誕生、

御臺様御養被 仰出、松平敬之助様ツカサ与奉称候旨、公義より被 仰渡候段申来候、依之敬之字并同唱可致遠慮候、

右之通表方江致通達、奥掛御勝手方江茂可相達候、

但、琉球島々江茂可被申渡旨琉球掛江相達、諸郷之儀者地頭・領主・大番頭方可被申渡候、

正月

伯耆

右之通被仰渡候段、此節琉球館より申来候間、敬之字并同唱迄茂童名ニ附居候者ハ急度可相改候、尤名字并名乗者不及遠慮候、此旨支配中江不漏可被申渡者也、

辰三月

三司官

御物奉行

申口

[252]

一尚穆様三年御回忌御法事御執行有之候間、御啓建・御中日四ツ頭、御満散八ツ頭時分、諸人朝衣對(冠カ)ニ而御拜可相勤候、尤忌係之方十日以下之忌ハ御法事中御免候間、此段首里中、那覇中、泊中、久米村中不漏可被申渡旨、御差圖ニ而候、以上、

〔253〕

一唐年号、当正月嘉慶元年与相改候付、此節御到来有之候間、明十四日右年号用候様可申渡事、

辰六月十三日

〔254〕

一芳蓮院様、御忌日二付御七回忌迄者御肴類進上并御咎目事不被仰付、其外之儀者不及遠慮筋被仰付候条、此旨表方江致通達、奥掛御勝手江茂可相達候、

九月

播磨

右通被仰渡候段、琉球館方申來間、此段致問合候、以上、

辰十月廿九日

豊見城親方

〔255〕

一御前様御法号

芳蓮院殿華萼清心大姉右之通奉号候間、承知仕候様琉球諸島江可被申渡旨、御勝手方江可相達候、

七月

河内

右之通被仰渡候段、琉球館方申来候間、此段致問合候、以上、

豊見城親方

[256]

一姫君様御事、綾姫君様与奉稱御臺様御養被 仰出候段申来候、依之御名之字并同唱之名附居候者者可相改候、

右之通表方江致通達、奥掛御勝手方江茂可相達候、

但、琉球嶋々江茂可被申渡旨、琉球掛江相達、諸郷之儀者地頭・領主・大番頭方可被申渡候、

八月

久馬

[257]

一若君様御名

家慶公^{コシ}与奉称候付、慶之文字名并名乗用候儀、尤同唱二而も遠慮可仕候、

右之通表方江致通達、奥掛御勝手方江茂可相達候、

但、琉球嶋々江茂可被申渡旨、琉球掛江相達、諸郷之儀者地頭・領主・大番頭方可被申渡候、

正月

播磨

一今度御誕生之

姫君様御事

総姫君様与奉稱

御臺様御養被 仰出候段申来候、依之御名之字并ふさ名附居候者ハ可相改候、

右之通表方江致通達、奥掛御勝手方江茂可相達候、

但、琉球鳴々江茂可被申渡旨、琉球掛江相達、諸郷之儀者地頭・領主・大番頭方可被申渡候、

十二月

播磨

一御当地之儀、隣国交通無之、御國元迄之通融ニ而京錢通行、別而不自由之所ニ而候故、悪錢・鉄錢之撰無之、繩
 二掛り候分ハ無口能取遣可致旨、先年以来段々被仰越置候処、其守達無之故鉄錢者五貫文二百文ツ、相交、京錢
 者前々御定通致通用候様、猶亦分ケ而被仰渡置候得共、是以不相守撰出を以相用候歟、連々通用之支ニ成立、甚
 以不可然候、近年御國元ニ茂通用不通之時節ニ而御当地江ハ猶更不自由相成、御藏方を始世上ニ茂甚及難渋候
 上、追々冠船御手当等ニ付而者致通用、不差支様無之候而不叶事候処、当分通悪錢撰出候而ハ通用可立直躰無
 之、甚可差支候間、向後諸商売方其外錢取替之儀共、御國元同前悪錢・鉄錢之撰無之、都而繩ニ掛り候分ハ無難
 渋可致通用候、就中諸座・諸御藏役人共撰出之仕方有之候而者甚可差支候間、嚴重致取締首里・泊・那覇・久米
 村ハ横目・惣横目、田舎ハ小横目ニ而可致見締候、乍此上不相守撰出を以相用候者於有之ハ諸品取揚候上、其節

之成行二応、屹与御答目可被仰付候条、聊無相違嚴重相守候様、噫中、首里中、泊中、那覇中、久米村中不漏可被申渡旨、御差圖二而候、以上、已六月八日

具志堅親方

[260]

一此間奉伺儀共有之候處、

御前江被為 召、當時

御幼年二付而、御用向之儀私共猶以入念可相勤候、且不依何用御過子事共御座候ハ、則々申上候様有度旨、

御意被成下候、誠以

叡慮之程、往昔明君之御趣意二被為叶、(寧力)国王安亭之基、無此上御事奉恐感候、右二付而者弥以可励忠勤候得共、

夫々不行屈儀茂可有之哉与奉恐入事候条、各二も難有思召之程深奉汲受、萬端尽心力、私共勤向之内二茂存寄之

儀共者、聊無遠慮被申聞、偏御補佐二奉成候様、精々有勤務度此段達

上聞申渡候、乍此上大形二相心得不出精之儀共有之候而者、甚如何之至候条、克々処謹慎可被相勤者也、

已十一月十五日

評定所

[261]

一久米村者跡々方学校所相建相教候処、首里江者無其儀如何二候条、首里江茂学校所被召建、諸人学問教向被仰付度被 思召上候、弥被召建儀二候ハ、冠船御渡来内相建候得者修学相励、風俗等茂猶以宜相成候間、相考可申上旨、此間 御意之趣有之、思召之程誠難有次第二而御物奉行中江茂吟味申渡候上、弥被召建候様被仰付度旨、達

上聞追々々学校一ヶ所被召建筈候処、首里中多人數之事候得者、一ヶ所二而者相治不申、其上教方も届兼可申積候得者、三平等二茂各平等向二師匠申請人數差分を以致教方候方二茂可有之哉、適厚 思召を以被仰付御事候付而者、往々最通其詮相立候様無之候而者不叶儀二候条、各御方二も随分御吟味を被尽何様之振合を以可宜与之儀御申出可被成候事、

巳十二月十五日

[262]

一其方事、去年^{樂師}正使内二而江戸江差越候節、

御献上・御進覽物銘書并御目錄書認、且正使より之献上物・進覽物銘書并目錄等茂書認、御家老衆御調部二入、

結構出来候由御沙汰有之、御用相立候段、賛議官立津親雲上申出之趣有之、殊勝之至候、先様猶以御用相立候様可相嗜候、仍褒美状如件、

嘉慶二丁巳十二月廿二日

三司官

樂師 嘉味田里之子親雲上

副使内 瀬名波里之子親雲上

正使内 喜名里之子

[263]

一其方事、去年掌翰使内二而江戸江差越候節、

御献上・進覽物銘書并御目錄書認、又者御太刀折紙直り所有之書改、且正使より之献上物・進覽物銘書并目錄等も書認、御家老衆御調部ニ入結構出来候由、御沙汰有之、御用相立候段賛議官立津親雲上申出之趣有之、殊勝之至候、先様猶以御用相立候様可相嗜候、依褒美状如件、

嘉慶二丁巳十二月廿二日

三司官

仲地筑登之

〔264〕

一其方事、琉球館筆者内ニ而滞在之砌、去亥年御進上・御進覽物御目錄調不足有之、書認翌子歳ニ茂江戸御献上・御進上物御目錄直り有之、書改御用相達候段、聞役・在番方申越有之、且去年茂江戸立方筆者内ニ而江戸江差越、御献上・御進覽物銘書并御目錄書認、御家老衆御調部二人、結構出来候由、御沙汰有之、御用相達候段、賛議官立津親雲上申出候趣有之、殊勝之至候、先様猶以御用相立候様可相嗜候、依而褒美状如件、

嘉慶二年丁巳十二月廿二日

三司官

〔265〕

龜山里之子親雲上

一其方事、去年佛蘭西国船来着、逗留佛人等列帰候為御届飛船取仕立、上國被仰付候處、不時之海上往還共早々乗届、畢竟御用之程厚汲受下知方等能相届候所より件之次第、殊勝之至候、仍褒美状如件、

同治貳年癸亥三月十九日

三司官

〔266〕

一御國元四文錢、壹文付代錢八文、銅錢壹文ニ四文宛引合ニ而御藏々御入拂并御領國中一同通融被仰付候由、琉球館より申越趣有之候、然者去申年御國元銅錢壹文ニ鉄錢貳文引合被仰付候付、御当地ニ茂御国同様之引合被召上候付而者、猶亦同様不被仰付候而者段々差支候付、今日より御國元同様四文錢壹文ニ付八文、銅錢壹文ニ四文引合被仰付候間、少茂無難汎通用可致候、右ニ付諸座諸御藏者座檢者ニ而致取締、首里・泊・那覇・久米村者横目・惣横目、田舎者小横目ニて可致取締候、自然不守之者於有之者、其節々形行ニ応屹与御答目可被仰付候条、聊無取違嚴重相守候様不漏可被申渡旨、御差圖ニ而候、以上、

亥三月卅日

安室親雲上

〔267〕

- 一米壹升先 代錢九貫文
 - 一粟壹升先 代錢七貫文
 - 一麦壹升先 代錢五貫五百文
 - 一白大豆壹升先 代錢九貫文
- 亥四月六日

諸物相当之直成ニ而致賣買候様ニ与之儀者、別段被仰渡置通候處、薪木之儀殊之外高直ニ相成、一統及迷惑候由、相聞へ不可然事候、依之那覇・泊津口者各惣横目并船改方直組係、與那原津口者蘇鉄奉行并間切役々ニ而嚴重

致差引、高代ニ而売買いたし候者則々捕付、平等方江差出候様被仰付候間、件之趣領掌以來銅錢引合、上ケ不成、以來之代錢ニ而致売買候様、堅可被申渡旨、御差圖ニ而候、以上、

亥四月六日

桑江親雲上

[268]

一下大豆尅升先

代錢六貫文

一唐豆尅升先

同 五貫文

一上位麦ノ粉尅升

同 五貫文

但、中位以下者本文ニ準代下り、

一疏上位素麴尅斤

代錢四貫文

但、右同、

一豆腐尅丁

赤田・崎山・鳥小堀
三ヶ村尅貫五百文

代錢貳貫文

但、小形者右ニ準し代下け、

一同尅丁 寒水川村

代錢尅貫五百文

一同尅丁 金城村

代錢九百文

一同尅箱 泊

代錢五貫六百文

一同尅箱 那覇・久米村

代錢四貫文

一塩尅升

代錢三貫文

- 一 上味噌壺升 首里 代錢拾八貫文
- 一 同 壺升 那霸・久米村 代錢拾貳貫文
- 一 下味噌壺升 首里 代錢拾壺貫文
- 一 同 壺升 那霸・久米村 代錢八貫文
- 一 同 壺升 泊 代錢五貫文
- 一 醬油壺升 代錢拾貳貫文
- 一 酢 壺升 代錢五貫文
- 一 菜種子油壺盃 代錢拾八貫文
- 一 仙香 三拾結 代錢壺貫文
- 一 上位地下并八重山多葉粉壺斤 代錢拾五貫文
- 但、下位以下者本文ニ準シ代下ケ、
- 一 庭鳥 壺斤 代錢四貫文
- 一 玉子 壺甲 代錢四百文
- 但、小形者本文ニ準代下ケ、
- 一 藍紙雨笠 壺本 代錢四拾三貫文
- 一 同日笠 壺本 代錢三拾貫文
- 式尺式寸之等
- 一 和久笠 壺本 代錢拾貳貫文

壹尺八寸之等

一同笠 壹本

代錢貳拾五貫文

但、式行之外、寸尺相替候等者本文ニ準シ、

一わら唐紙壹帖

代錢五貫文

一上位竹皮草り壹足

代錢七貫文

一同ゐ草り 壹足

代錢三貫文

一同わら草り 壹足

代錢貳貫文

但、三行中位以下者本文ニ準シ代下ケ、

上位

一はせを紙 壹束

代錢貳拾貫文

中位

一はせを紙 壹束

代錢拾五貫文

下位

一はせを紙 壹束

代錢拾貳貫文

一日用 壹人 自分賄

賃錢六貫文

一同 賄與之時

賃錢四貫文

一女同 自分賄

賃錢三貫文

一丹後 壹荷 新調

代錢拾貫文

一同 結替

代錢三貫文

但、右外者本文ニ準シ、

一 備後疊 壹枚 代錢三十貫文

一 割る疊 壹枚 代錢貳拾五貫文

一 同縁無疊 壹枚 代錢貳拾貫文

一 同押卷 壹枚 代錢八貫文

五斤懸

一 鉞 壹刃 代錢七拾貫文

一 ようち 壹刃 斤ニ拾壹貫文ツ、同

一 鎌 壹刃 代錢四貫文

一 鉾 壹刃 代錢六貫文

金武間切同村・並里・漢那・惣慶・宜野座五ヶ村

一 小薪 拾丸 代錢壹貫文

與那原二而

一 同 拾丸 代錢壹貫文

首里二而

一 同 拾丸 代錢壹貫二百文

町屋二而

一 同 拾丸 代錢壹貫四百文

同間切伊藝・屋嘉・古知屋三ヶ村

一 割薪木 拾丸 代錢貳貫貳百文

與那原二而、首里二而

一同 拾丸

代錢貳貫六百元

町屋代

一同 拾丸

代錢三貫文

久志間切久志・辺野古・大浦・汀間・瀬嵩・安部・嘉陽七ヶ村

一同 拾丸

代錢貳貫三百文

首里二而

一同 拾丸

代錢貳貫六百五拾文

町屋代

一同 拾丸

代錢三貫五拾文

同間切天仁屋・有銘・慶佐地・平良・川田・宮城六ヶ村

一瓦薪木 壹丸

與那原二而

代錢九百元

国頭間切安田・安波・楚州三ヶ村

一同薪木 壹丸

與那原二而

代錢壹貫三百文

国頭間切

一長切薪木 壹丸

右同

代錢貳貫六百元

久志間切

一同 壹丸

右同

代錢三貫文

但、四行首里江登候時者馬賃重、

名護間切敷久田・世富慶・東江・大兼久・城・宮里・宇茂佐・屋部・

山入端・安和拾ヶ村

一薪木 壹丸

代錢七百元

同間切喜瀬・幸地・許田三ヶ村

一同 壹丸

代錢壹貫貳百文

恩納間切安富祖・名嘉真・瀬良垣三ヶ村

一同 壹丸

代錢壹貫四百文

同間切谷茶・前兼久・富着・仲泊・山田・真栄田・恩納七ヶ村

一かきや薪木 十九

代錢四百文

名護・恩納間間切

一割薪木 壹荷、丸にして貳丸

代錢七貫文

北谷・讀谷山両間切

一松薪木 壹荷

代錢壹貫八百文

同所

一同 壹丸

代錢壹貫五百文

同所

一同 壹丸

代錢壹貫貳百文

但、八行泊津口

恩納間切安富祖村

一松薪木 壹丸

代錢壹貫三百文

名護間切喜瀬村

一同 壹丸

代錢壹貫六百五拾文

同間切許田村・幸喜村

一同 壹丸

代錢壹貫五百文

同間切屋部村

一同 壹丸 代錢壹貫文

國頭間切伊地・邊土名両村

一同 壹丸 代錢九百文

大宜味間切塩屋・喜如嘉両村

一同 壹丸 代錢壹貫文

久志間切汀間村

一同 壹丸 代錢三百五拾文

同間切慶佐次村

一同 壹丸 代錢壹貫〇百文
(三力)

伊平屋島

一同 壹丸 代錢壹貫五百文

但、九行那覇津口

越来・美里・具志川三ヶ間切方泡瀬口持越壳弘之時

一割薪木 壹荷式束程 代錢八貫文

北谷間切之等首里二而

一同 壹丸 代錢六貫文

首里二而

一同 壹荷 代錢拾五貫文
宜野灣間切之等

一同 壹荷 代錢拾四貫文
越来間切之等

一炭 三拾斤 代錢拾五貫文

亥四月十九日

〔269〕

船頭知念間切久高村

西銘筑登之親雲上

水主同間切久高村

西銘筑登之親雲上

右者、三司官池城親方跡御役御國元御伺之儀付、飛船使龜山里之子親雲上乘船船頭水主被仰付候處、不時之海上首尾能致往還、働之詮相立候間、相当之御褒美被仰付度旨、龜山書付御船手奉行次書を以申出有之、遂披露候處殊勝之儀ニ被思召候、仍而何歟願出之砌、其見合候様被仰付候間、御船手勲功帳ニ書載置候様可被申渡候、此旨御差圖ニ而候、以上、

亥四月廿五日

桑江親雲上

玉城親雲上

御物奉行

〔270〕

一五月四日、爬龍舟漕候儀、異国人引取候付而者、以前之通勝負漕等可有之、此儀前代より國土之公務ニ相懸候旧式ニ而、其慎を以律儀無之候而不叶、跡々麁抹之仕形ニ而終ニ為及喧嘩茂有之、格別成旧式執行之場ニ右躰之舉動、別而不成合之段者勿論、御政事之妨不可然事候、此程多年規式迄を漕、此節より以前之通相成候付而者、勇

立差過何歟不勘弁之儀茂可有哉与、別而御念遣之事候条、件之次第厚得其意末々迄茂兼々堅申付、左候而其当日頭立候面々差越為致下知、随分律儀相勤、曾而龜抹之仕形無之様可被取計候、右二付而者横目并平等方役人共江茂分ケ而取締被仰渡置候付、自然於令違背者屹与可及御沙汰之条、聊無緩疎相守候様、嚴重取締可被致旨、御差圖二而候、以上、

亥四月廿五日

〔271〕

一御船手奉行江申渡於御國元茂御儉約之旨趣堅相守、聊過美之舉動無之様、登船々船頭水主共江時々取締可被申渡旨、御差圖二而候、以上、

亥四月

〔272〕

一御儉約之儀二付而者、去巳年御ヶ条書を以委曲被仰渡、猶亦去未年二茂分ケ而被仰渡置趣有之、一涯取守候様相見得候処、連々緩相成、逗留佛人等引取候以後者酒宴遊興、其外每物繁華之向成来候哉二相聞へ候、一統能存知之通先年来臨時御物入打続、御藏方御難渋於世上茂冠船御手当として出来・出銀被仰付置候上、去年麻疹相時行及物入、且諸物直段茂高料成立手迫之砌柄候処、冠船御申請之儀来寅年二御内定二而、右御手当付而者追々猶又御先例通重高之出物被仰付事二而、先様諸士・百姓猶可及難儀、此段者上下共存知之前候得共、此涯省略向誤而可入念之処、其勘弁無之、右次第不可然事候条、以来歴々之方を始諸士末々二至り、巳年御儉約之ヶ条堅取

守、諸祝儀其外日用たりとも成丈加省略、一統朴実之風を令興起、御儉約之詮相立候様精々心掛可有之候、右付而者惣横目中江見聞被仰付、違背之向者屹与其沙汰可被仰付候条、聊無取違相守候様、首里中・那覇中・久米村中・泊中・諸間切・諸島江不漏可被申渡旨、御差圖二而候、以上、

亥四月廿五日

桑江親雲上

[273]

一銅錢四文引合相成候、以来鉄錢有少由、此儀追々銅錢引合可相替杯与虚説申觸、鉄錢持囲候所方右躰可有之、銅錢引合上ケ相成候付而者、いつれ鉄錢不相交候而者売買不相成事候処虚説二迷ひ、右次第甚以不可然事候間、件之趣具二得其意鉄錢所持之方者差出通用可致候、右二付諸座・諸御藏者座檢者、首里・泊・那覇・久米村者横目・惣横目、村々直組并取締向係、田舎者小横目江見聞被仰付、違背之者者屹与其咎目可被仰付候条、聊無取違堅相守候様、首里其外不漏様可被申渡旨、御差圖二而候、以上、

亥六月十日

桑江親雲上

[274]

一此節唐江御献上御用金銀丸拔太刀之儀、御國元より未下方無之、渡唐船出帆時節更行候付、急度調方申渡候処、仕馴茂無之細工物最初廿日之日賦候処、昼夜出精下知方を以六日之日数二首尾能相調させ渡唐船早々致出帆、殊勝之至候、仍而褒美状如件、

同治式年癸亥十一月十八日

三司官

鍛冶奉行足

伊良皆親雲上

[275]

御当地産物方御本手ニ被備置候出物御米三千四百八拾石之内千七百八拾石、以来代砂糖四拾四万式千六百六拾斤致上納候様、左候而何廉産物方御計ニ而式千八百石代砂糖上納之振合通可致取扱旨、去年御國元より被仰渡趣有之候処、砂糖之儀余之作職ニ相替、手入拵等至而六ヶ敷、当分之上納高さへ疲労之百姓共別而及難儀居、此上焼重申付而者往々難立行事ニ而、右出物御米代砂糖重上納之儀、御用捨之願申上候処、是迄追々御救助筋等之儀共被仰付置、殊ニ出物御米代之儀共別段之事ニ而、別而不容易事候得共申立之趣無余儀相見得候付、御取訳を以来丑年より半方式拾式万六千六百六拾斤砂糖上納被仰付候旨、大藏殿御書付を以被仰渡候段、聞役・在番親方方申越趣有之候、然者砂糖上納之儀、百姓共痛相成事候得共、右通段々御取訳を以半方上納被仰付事ニ而皆同御断申上候而者、御都合不仕候付、達

上聞、百姓共大粧なから(弥力)茂称差重、来年より式拾式万六千六百六拾斤上納可仕段、此節御請申上越候条、得其意候様諸間切并構之向江可被申渡者也、

子二月廿四日

三司官

[276]

一四文銭老文付六文、銅銭老枚ニ式文引合被仰付候段者別段被仰渡通ニ而、右ニ応し諸物茂おのつから直下可売出

儀候得共、萬一己之利欲二迷ひ、此中之様諸物高直二売出候、又者持囲不売出向茂候而者別而如何之事情条、右二付而者惣横目并横目中江茂見分被仰付、自然違背之者於有之者屹与可及御沙汰之条、疎略二相心得間敷候、此旨不漏様可被申渡旨、御差圖二而候、以上、

子三月廿四日

崎浜親雲上

〔277〕

一銅錢壹文引合可相成旨、虚説申觸候者有之、世上致心得違候哉二相聞得候付、屹与致取締候様、先達而被仰渡置候処、今以虚説不相止由、此儀畢竟御國元銅錢壹文引合相成候ハ、おのつから御当地二茂同断可被仰付与相心得候所より、右通致心得違候哉二相見得、当分通二而者世上安心不致、御政事向之支相成、別而如何之事情、御当地之儀京錢不自由之所二而、縦令御國元壹文引合相成候而茂、御当地江者不相替式文引合被仰付候間、件之趣具二得其意、少茂無疑惑取遣可致候、乍此上違背之者於有之者、御沙汰之程不輕答之条、聊取違有間敷旨、不漏可被申渡候、此旨御差圖二而候、以上、

子三月廿九日

崎浜親雲上

〔278〕

一米壹升先

代錢拾四貫七百文

一同壹升先

町屋代

代錢拾五貫五百文

一餅米壹升先

代錢貳拾貫文

一 同壺升先	町屋代	代錢貳拾貫三百文
一 山原米壺升先		代錢拾貳貫文
一 同壺升先	町屋代	代錢拾三貫三百文
一 粟壺升先		代錢拾貫七百文
一 同壺升先	町屋代	代錢拾三貫文
一 麦壺升先		代錢九貫文
一 同壺升先	町屋代	代錢九貫三百文
一 はたか麦壺升先		代錢八貫七百文
一 同壺升先	町屋代	代錢九貫文
一 大麦壺升先		代錢八貫七百文
一 同壺升先	町屋代	代錢九貫文
一 白太豆壺升先		代錢拾六貫文
一 同壺升先	町屋代	代錢拾六貫三百文
一 下太豆壺升先		代錢拾三貫三百文
一 同壺升先	町屋代	代錢拾三貫六百文
一 唐豆壺升先		代錢拾四貫文
一 同壺升先	町屋代	代錢拾四貫三百文
一 黍壺升先		代錢拾貫文

一 同壺升先	町屋代	代錢拾貫三百文
一 いんらう豆壺升先		代錢拾壺貫三百文
一 同壺升先	町屋代	代錢拾壺貫六百文
一 小豆壺升先		代錢拾四貫文
一 同壺升先	町屋代	代錢拾四貫三百文
一 へん豆壺升先		代錢拾三貫三百文
一 同壺升先	町屋代	代錢拾三貫六百文
一 胡麻壺升先		代錢貳拾四貫文
一 同壺升先	町屋代	代錢貳拾貫三百文
一 麦之粉壺升先		代錢九貫五百文
一 菜種子壺升先		代錢拾貳貫文
一 琉素麴壺斤		代錢九貫文
一 とうふ壺斤		代錢貳貫八百三拾七文
一 下味噌壺升		代錢貳拾貫文
一 醤油壺濟		代錢貳拾貫文
一 塩壺升		代錢三貫五百文
一 唐芋壺斤		代錢五六百文不過様
一 芋葛壺升		代錢拾貫文

一 上味噌壺升	代錢四拾貫文
一 豚肉壺斤	代錢拾六貫文
一 同油壺斤	代錢拾七貫文
一 疏木綿花壺斤	代錢八拾貫文
一 上はせを芋壺斤	代錢六拾貫文
一 酢壺濟	代錢拾貫文
一 仙香式拾結	代錢壺貫文
一 上位地下多葉粉壺斤	代錢拾貳貫文
一 八重山多葉粉壺斤	代錢拾貫文
一 庭鳥壺斤	代錢五百文
一 玉子壺甲斤	代錢五百文
一 生魚壺斤	代錢五貫文
一 胡麻油壺斤	代錢貳拾貳貫五百文
金城制	
一 わら唐紙壺帖	代錢拾五貫文
一 同壺帖	代錢八貫文
一 上位はせを紙壺帖	代錢三貫七百五拾文
一 同中位壺帖	代錢貳貫貳百五拾文

一下同壹帖

代錢壹貫五百文

一丹後壹荷 新結

代錢拾貳貫五百文

一結替

賃錢三貫五百文

但、式行外者本文準、

一鍬壹刃 斤目五斤

代錢百五拾貫文

一ようき壹刃 壹斤ニ

代錢貳拾貫文

一鎌壹刃

代錢七貫五百文

一鉾壹刃

代錢貳拾五貫文

一炭三拾斤

代錢貳拾五貫文

一備後疊 壹枚

代錢六拾五貫文

一割ゐ同 壹枚

代錢五拾五貫文

一同押卷 壹枚

代錢貳拾五貫文

一藍紙兩笠壹本

代錢八拾貫文

一同日笠 壹本

代錢五拾五貫文

羽長式尺 貳寸

一雨笠 壹本

代錢六拾五貫文

右同壹尺八寸

一同笠 壹本

代錢貳拾貫文

一和久笠壹本 代錢貳拾五貫文

一上位竹皮草り壹足 代錢拾貫文

一同わら草り 壹足 代錢四貫文

一同る草り壹足 代錢五貫文

濱比嘉・奥間・桃原・邊土名・宇良・伊地・与那・謝敷・佐手・邊野喜・宇加・邊戸・奥、
一薪木壹丸 代錢壹貫五百五拾文

楚洲・安田・安波三ヶ村

一同 壹丸 代錢壹貫八百文

屋嘉比・親田・(見脱)力里・城・根謝銘・一名代、六ヶ村

一同 壹丸 代錢壹貫五百文

喜如嘉・饒波・大兼久・大宜味・根路銘・塩屋・屋古・田港・渡野喜屋・津波、拾ヶ村

一同 壹丸 代錢壹貫九百文

久志間切

一同 壹丸 代錢壹貫文

羽地間切

一同 壹丸 代錢拾貳貫文

数久田・世富慶・東江・城・大兼久・宮里・宇茂佐・屋部・山入端・安和、拾ヶ村

一同 壹丸 代錢壹貫文

喜瀬・幸喜・許田、三ヶ村

一同 壹丸 代錢壹貫五百文

名護間切

一割薪木 壹荷二而拾丸 代錢拾壹貫文

名嘉真・安富祖、式ヶ村

一薪木 壹丸 代錢壹貫四百文

瀬良垣村

一同 壹丸 代錢六百文

恩納・富着・前兼久・仲泊・山田・真栄田、六ヶ村

一同 壹丸 代錢四百文

谷茶村

一同 壹丸 代錢三百文

但、拾三行持賃并馬賃重、

金武・並里・漢名・惣慶・宜野座、五ヶ村

一小薪木 壹丸 代錢壹貫七百元

一同 振売之時 代錢壹貫九百元

一同 町屋代 代錢貳貫百文

屋嘉・伊藝・古知屋、三ヶ村

一割薪木 拾丸 代錢貳貫七百元

一同 振売之時 代錢三貫百文

一同 町屋代 代錢三貫五百文

一木細工 壹人 賃錢拾三貫文

一木分 壹庭 賃錢貳拾六貫文

一男日用 壹人

同五貫文

一同自分賄

同八貫文

一女日用 壹人

同三貫五百文

一壹物(穀カ) 壹装(俵カ)

那霸・與原(那、脱カ)方首里迄 馬賃四貫文

子四月

〔279〕

一大和年号、当三月朔日方元治与被 相改候旨、去十六日到來候間、同日より同様可被申渡者也、

子四月十九日

三司官

〔280〕

一御國元風氣疱瘡相時行、兼牛痘仕候者共致再出候付、牛痘之様子見聞之為去年帰帆之御銀宰領屋宜里之子親雲上・浦崎筑登之御國元滞在之砌、於館内係被申付、廣致見聞候處、兼而牛痘仕風氣疱瘡致再出候者五六拾人二及候處、都而輕相仕廻、其内八九人者兩三日越直二致見廻候處、瘡高手足者多出候者茂罷在候得共身躰出少、熱氣格別弱、氣分常躰二而別而輕相見得、且牛痘不仕者重有之、右通二而御國元二茂牛痘者いづれ不植付候而不叶与申段、屋宜・浦崎申出有之事、

一去年漂着之熱嚙呢國人等江通事係長堂里之子親雲上を以、牛痘之様子相尋させ候處、真痘二而茂植付候瘡疵不相付内者胎毒いまた不拔故、間二者風氣疱瘡出候者も有之候得共、熱氣弱怪我等一切無之、尤植取候瘡瘡不相付内

者、再三植候而可宜与為申由、長堂申出有之事、

子七月卅日

乾隆五拾乙巳年上卷目錄

天明五年二當ル

[281]

一 太孫様御誕生為御祝儀、此節

太守様より

上様

中城王子様江御拜領物御座候付、里主・御物城・御書院、中城御殿江御祝儀申上候様被仰付候事、

一道之嶋、其外他所之船、諸浦潮懸之節、御当地之者致便船候儀一切御禁止被仰渡候事、

一 中城王子誕生之為御祝儀、今般從

太守様、国王江拜領物御座候付、御奉行様招請披被申答候間、御障相伺被申越候事、

一 当世振穀物至而高直成立候付、米尅升二代錢拾貫文二而可売出旨、被仰渡候事、

一 中城王子嫡子致誕生候為御祝儀、從

太守様拜領物被仰付候付、御奉行様御招請御披被申答候間、御障相伺候様被申越候事、

一 太守様御厄年二付、波之上・天久八幡江

上様・中城王子様被遊御參詣候付、御通路筋掃除結構有之候様被申渡候事、

一琉球大凶年二付、江戸表方殿様江御米壹万石、御金壹万両御拜借被仰付候段、御書付之事、
一琉球凶年二付、御國元江御米御拜借之御願被為御申上候処、御願之通御拜借被仰出候段、御書付之事、
一琉球江金銀錢持渡候儀一切御禁止被仰付候旨、御國元方御書付之事、

〔282〕

一大孫様御誕生為御祝儀、

太守様方

上様

中城王子様江御拜領物御座候段、御到来在之候間、今日方明後廿六日迄御書院・中城御殿參上、御祝儀可被申上候、以上、

正月廿四日

與世山親雲上

〔283〕

一牛之儀、老人・病人共葉用申請之外、故なく猥二殺し候儀、跡々方御大禁二候處、近年蜜々殺し致商売之由相聞得候、牛者第一耕業之助二成候故、右通被為入御念、畢竟農民等之為助候得者難有奉存、随分致自愛可飼立之処、無其儀却而目前之高価を貪り、後來之難儀を不顧令活却候段、甚以愚昧之至候、今躰二而者追々牛絶二相成、耕方之支不輕事候条、猶嚴敷締方可有之候、乍此上相背者於有之者、可及御沙汰候間、聊無緩疎堅相守候様、噯中不漏可被申渡旨、御差圖二而候、以上、

正月廿九日

與世山親雲上

[284]

一中城王子様嫡子誕生之為御祝儀、今般從

太守様、國王江拜領物御座候付、御奉行様招請披被申答候間、来十四日十八日兩日之内御障相伺可被申越候、此旨三司官申付候、以上、

三月三日

伊江里之子親雲上

[285]

一太孫様御誕生為御祝儀、從

太守様御拜領物御座候付、御奉行様御招請御披被遊筈候間、来十四日十八日兩日之内御障相伺可申上旨、被仰越趣御書役山元藤藏殿御取次申上候處、十四日御障無御座由、承申候間、致御返答候、以上、

二月四日

森山親雲上

[286]

一御当地之儀、至而凶年ニ而米穀無他事振廻之程段々在番奉行被承及候趣を以、大和船々罷下り、米穀を茂積下候ハ、何れ当地之人江可賣渡候間、依望者賣物之見立等を以一手願、又者押立候株立を所望茂可有之候間、萬一其通相弘候而も成立、小身ハ求方不相調茂可有之儀案中ニ而候、勿論脱躰小身之人社而已強難之筈候得共、適々積

下穀物をも細々行不廻筥、夫故自然与高直ニ可相成儀茂可有之哉、被相考候付、大和船々罷下候ハ、株立之賣高致間敷旨、被申渡置候間、右ニ付而者当地右式之御取締者專可有御座筥候得共、世振沙汰蜜々被及承難黙視、少々ニても凌安方之端ニ茂可相成哉与、右通被申渡儀候間、此段屹与御沙汰申達候様ニとの儀ニ而者無之候得共、先私方御方迄此段得御意候、以上、

二月六日

山元藤藏

[287]

一那覇ニ而頃日墓を明、死人之簪・衣類等盜取者有之由相聞得、甚以惡意深重ニ候、追々他方江茂相懸可申、屹与召捕不被所敵科候而不叶儀候、然者改方之儀、一通之觸流迄ニ而書付預ケ置候体ニ而ハ改之詮茂無之筥候間、與々参会堅相改、猶亦金差師・しち屋等ニも細蜜相札、屹捕出候様相働、其首尾證文を以可申出候、尤右改之儀一涯不相限、以来随分氣を付罷在、縱令不居合段證文差出置以後迪茂見出聞出、則々可申出候、左候而為御褒美錢千貫文可被下候、若隱置脇より於致露頭ハ、是又其科不輕筥候条、此旨支配中不漏可被申渡者也、

四月四日

三司官

[288]

一從

上様、伊東仙十郎殿江定式御返物

一大平布 五疋

一 燒酎 壹壺 五拾盃入

節々品物被差上候御返物

一 官香 十把

一 桐板芥 三反

一 紗綾 二卷

中城王子様御同人江右同

一 大平布 三疋

一 燒酎 壹壺 貳拾五盃入

節々品物被差上候御返物

一 洪扇子 一箱

一 桐板芥 二反

一 紗綾 二卷

右通、里主方御同役有田藤兵衛殿江被差上候事、

[289]

一 琉球大凶年ニ付、御飛脚使を以米五千石差下可申旨、被仰渡趣御座候間、沖船頭京泊之運右衛門船方千拾壹石
壹斗六升積入、私宰領被仰付、去ル四月十四日船間乗出帆、同日甑泊江潮掛、同十七日同所出帆仕候処、同十九
日より同廿一日迄大風罷成、本船亘凌御座候付、穀物少々打捨風俣ニ相流、洋中段々及難船候処、乍漸同廿二

日屋久島着仕、同廿四日同所出帆仕、同廿五日大島江致潮掛、此程御滯留仕候処、今月五日順風吹出候二付、同所方出帆仕候間、只今当津着仕申候間、勤番両三人程御乗付被下候、此段御問合申上候、以上、

六月

桑江親雲上内

比嘉子

〔290〕

一琉球國并島々、近年凶年打續、其上大風雨等二而一統之飢饉可及飢者多有之候故、御國元之儀茂凶年打續、至而御藏米等御不如意之乍上、追々手当茂有之段被聞召上、猶亦被仰付候得共、右通凶年之故無覺束被思召上、御願之趣有之候故、去月廿九日御奉書御到来、翌朔日為 御名代島津淡路守殿御登城候処、御米老萬石・御金老萬兩御拜借被仰付候旨、御太老様・御老中様方御列座、御用番水野出羽守様方被仰渡之候段申来候、右通至而凶年二付、先達而茂段々被仰出趣有之、猶亦前件之通厚思召を以御取扱之段、中山王御承知有之、末々迄茂御趣意難有奉承知候様、琉球江可申越候、

右、如例可申渡候、

主膳

九月

琉球館開役

在番親方江

〔291〕

一琉球近年打續之凶年、就中去年霖雨又者両度之大風二而船々破損又者行衛不相知も有之、定納米纔計積来候故、

旁二付上下共及難儀候付、国王を初儉約を用、心付等有之候得共、日増飢人多存之俣扱方不相調、素方隣国之便も無之、飢米為才覚飛船取仕立、屋我親雲上差渡米五千石程積方之儀申越、猶亦屋我口上二而も申出趣有之、於館内折角相働候得共、過分石数故急々都而之才覚不納候二付、式千石程拜借之願申出、別而御差支之砌二者候得共、右此中格別候間、先達而願通申渡置、右之趣達貴聞候處、右申越候米高早々積下候様手当有之候付而者、至而之大変二而一統之難渋付而者甚御気毒被 思召上候、御國元之儀茂凶年打續、鳴々も飢饉二而過分之積米有之候二付、此節之拜借さへ乍漸為相調趣付而者、御救之儀江府方何分難 仰出候、然共此御方方御救不被仰付候而者外二致方茂無之筈故、在番之役々其地之役人共江申請、然与為凌飢候様いたし、猶亦無油断可被取計旨被仰出候、右通厚思召之儀、中山王御承知有之、末々迄茂相通難有奉承知候様、可申越候、

右、如例可申渡候、

六月

主膳

一先程無類之飢饉二而飢人多有之、御救方不被為及御手、極々御当迫之處、当春御國元方御拜借米等被仰付候故、萬民飢を凌誠以難有次第候處、此上厚思召を以段々御取扱之趣、別紙両通之通候間、猶以御厚恩之程深重難有奉承知候様、末々迄不漏可申渡者也、

十二月十四日

三司官

御物奉行

申口

右之通可被仰渡候条、末々迄不漏拜聞為仕候様、與頭中へ直面可被申渡候、以上、

十二月十四日

喜名親雲上

一琉球江金銀錢持渡候儀、先年以來被召留置候處、諸品代等ニ金銀を以琉人方江請取筈之致内約等候聞得有之、可及御糺方ニも筈候処被成御容免、向後右体之儀、曾而無之様詰合之琉人共、聞役・在番親方方訳而稠敷申渡、代合毎々右之通堅固申渡、聊緩疎無之、向後品物代等相渡候節ハ琉人江直ニ不相渡、聞役承届、藏役人琉人江金銀を以曾而不相渡様、館内立入之者共江茂稠敷申渡置、自然相背候者有之候ハ、琉人者勿論、相渡候者迄茂屹与被仰候様可有之旨、六ヶ年跡子年被仰渡置候処、今以琉球江小判金其外金銀錢段々相渡候様聞得之趣有之候、尤琉人迄ニも無之、船頭・水主使人等之内心得違之者も有之候哉、毎々被仰渡置候趣致忘却、右体之儀不相止段、甚以如何之致方ニ候、右ニ付以來左之通被仰付候、

一小判金・壹部金、琉球江持渡致通融候儀ハ一切不相成事候故、持合候者者無之筈候得共、自然持伝来候者茂有之候ハ、不隠居早々差出候様稠敷申渡、限月を以皆同為差出、在番奉行江届置、御当地江持渡、其段申出相片付候様被仰付候、

一限月持居候段不申出、改方相渡候以後持合居候聞得茂有之、其段致露頭候ハ、御取揚被仰付候上、屹与可及御沙汰候、

一壹部金・小判金之儀、右被仰渡候通於琉球通融無之品候間、進貢・接貢船方大清江持渡候儀、当分逆茂無之筈候得共、軽き琉人共萬一心得違持渡候者も有之候ハ、御当地迄屹与被召呼屹与御咎目被仰付候、其節不相知跡達而

売口方相頭、買受持渡候儀相知候而も屹与及御糺、当人ハ勿論向々役々迄も不調法ニ可相成候間、違背無之様、屹与可被申渡候、

一 今帰仁間切江唐人漂着ニ付、御横目松岡林左衛門殿、御附衆有田藤兵衛殿、同心次田休助、大和横目島袋親雲上、問役宮城筑登之差越候事、

附、御仮屋方荷物夫并乘馬之儀、御申出次第手形入仕置候、尤大和横目・問役ハ御模之通ニ候、

同十八日

[294]

一 牧湊村江唐人漂着仕候段、御鎖之側、吟味喜名親雲上御下り御在番所江御届被申上候事、

一 牧湊村江唐人四人、水壺ニ浮込漂着ニ付、大和横目慶良間親雲上差越候、尤荷物夫并乘馬之儀者御急用故御船手江致問合、垣之花夫ニ而相達、馬者御用馬差出候事、

一來元日午之一刻方未之一刻迄日食ニ付而、当日日食始次第下庫理当を以及言上候得共、御冠服ニ而被遊御戒慎、(者)服圓次第可被遊御着替事、

一 右同日、役懸之王子衆以下役々迄、色衣冠ニ而各詰座江罷出慎居、圓次第退座可仕事、

一 当番之親方・座敷、下庫理江罷出、右同断之事、

右、元日之日食者至而大変之由候付、右通被遊御戒慎、役々迄慎方被仰付候付、奉得其意構之役々江茂可被申渡旨、御差圖ニ而候、以上、

十二月廿九日

喜名親雲上

〔^(隆)年〕
乾四拾一より五拾五迄手形

〔295〕

手形

一出米六升七合九勺二才、

但、知行高仕明知行高尨石二付、

附、大美御殿御知行并給地方旅行高除、
(料力)

一同式合五勺六才、

但、新盛增高相懸現高尨石二付、

一同尨斗八升三合六勺三才、

但、諸地頭作得納尨石二付、

附、雜石者半分引合、

一同五升五合六才、

但、お多か地・百姓地・請地・仕明請地・両先島上納高相加、高尨石二付、

附、慶良間両間切百姓高除、

右、御國元諸士末々迄及困窮候訳を以、近年納方被仰付置候重出米之内、并人別出銀、去ル巳年方御免被仰付置候処、上方表御借銀致増長、御振廻別而調兼、今通ニ而被差置候而者近年中必至与御差支相成筭候処、此節御趣法被相替糶數御儉約被仰付、萬端御事を被為欠、上方表高都御借銀本濟被仰付、往々御所帶方屹立直り候様被仰付筭候付、右為本濟料被定置候出米之外、去年方先キ五ヶ年高尨石二付重出米五升、当夏方上納可仕旨被仰渡

候、御當國ニ茂段々御物入打続御遣大分及御不足、御用意出米を茂当分通懸通被仰付置、諸士・百姓窮迫之時節柄候得共、右御趣法之訳を汲受、一涯相肋可成限致省略、都而跡々重出米之格ニ準シ随分可致上納旨被仰渡趣有之、不輕儀候故御斷も不相成、右之通出米申付候、此旨支配中可被申渡者也、

申三月三日

三司官

〔296〕

一去年御國元方重出米出銀被仰付、去年出銀之儀ハ年中取集、春方夏之間可差登候、当年出銀之儀ハ八月限便宜次第差登候様被仰渡、兩年分当夏一所ニ差上候筋ニ相見得、其段ハ先達而申渡置候通ニ而、然処諸士・百姓困窮之砌兩年分一時ニ相納候儀、甚難儀之筈候故一ヶ年被召延候様、当夏御訴訟可申上候間、一年分ハ随分相調上納可仕旨、支配中可被申渡者也、

申三月

三司官

〔297〕

一高老石ニ付、

米五升宛、真赤米半分、

右者上方表御借銀致増長、為本济料被定置候出米之外、去ル未年方五ヶ年御領國中一統右之通重出米被仰付置、当年より御免可被仰付事候得共、御借銀大分之儀ニ而未治定之筋合茂不相見得候付、諸士困窮之砌候得共、今一ヶ年相重、当子秋迄上納被仰付候段被仰渡旨、

一人別牛馬船出銀之儀者、去年限二而御免被仰付候、

右之通去冬便被仰渡候、御當國之儀段々御物入打續、諸士・百姓窮迫之砌柄候得共、分ヶ而被仰渡趣有之候条、重出米之儀者都而此内之通申付候、此旨支配中可被申渡者也、

[298]

一御香奠物請台式ツ、

但、地杵調、長三尺・横老尺三寸・惣高老尺ツ、

右者在番奉行畠山数馬殿御死去之時方申渡、(作、脱カ)御書院江相届置候間、其首尾方可被申渡者也、

四月廿九日

與世山親雲上

[299]

一出米六升四勺三才、

但、知行高・仕明知行高老石二付、

附、大美御殿御知行高并給地方旅料高除、

一同式合式勺八才、

但、新盛增高相懸、現高老石付、

一同老斗六升三合式勺七才、

但、諸地頭作得納、壹石付、

附、雜石ハ半分引合、

一同四升八合九勺六才、

但、お多か地・百姓地・給地・仕明請地・両先島上米高相加、高壹石付、

附、慶良間両間切高除、

右、御國元近年段々御物入打續、其上御領内・琉球嶋々迄稀成凶年二而御不如意之乍御時節、過分之御救米等被下、且御金・米御拜借被為蒙 仰、江戸・上方表御借銀利下等之御取扱茂被仰付、差向之所者被繰合置候得共、何れニ茂年々御借銀相増候方二而、御利相銀相重候程、猶々御取續御難洪成立、年増御不足銀及過分、今通ニて被召置往々御借銀甚致增長候上ハ何様御吟味有之候而茂其詮無之、別而御太切御時節柄、外之御工面も不相見得、此上ハ諸人困窮之時節なからも重出米人別出銀をも被仰付外ハ無之候処、此跡重出米被仰付、未間茂無之凶年旁付而者、諸人一統別而差迫、就中末々ニ至り候而者極々為差迫由、被聞召及、甚難被成御事候得共旁以難被默止訳を以出銀之儀者不被仰付、去秋より先五ヶ年高壹石付五升重出米上納被仰付、江戸・上方表御時借銀御本濟被仰付筈候間、御時節柄を茂汲受、一涯相勵夫々応身分萬端相慎、無益筋之儀ハ勿論差当候日用之内を茂可被成程致省略、都而跡々重出米之格二準、随分上納仕候様被仰渡候、然処御当地之儀臨時之御物入差屯、其上大飢饉引次至極及難洪候訳を以琉球館聞役・在番親方方奉願趣有之、重出米半方ハ代銀上納二而三部運賃御免被仰付、難有次第二而右通当地窮迫之段茂乍御憐察、御時節柄何分被成方無御座所方不被及是非、一統上納被仰付候故、格別成御事二而、此上者年延等之儀茂難申上、右之通出米被仰付事候間、随分致出精全上納相調候様、支配中可被申渡者也、

未四月廿八日

三司官

[300]

一当時諸向別而差迫及難儀候旨、被

聞召上候付、格別之 思召を以重出米之儀、被成御免候旨、被 仰出候、

右之通、中山王承知有之候様、琉球江可申越候、

申六月

主計

右之通被仰渡、御免年数之儀ハ去未年積登置候者ケ年分御取入相成、四ヶ年者御免可被申渡候、右付申年積登置候出米之儀者被返下筈候処、館内より委細之首尾申越無之候間、申来次第追而首尾可被渡者也、

酉閏五月六日

三司官

[301]

一銀拾五貫百六拾目壹分八厘四毛、

右、福ヶ廻諏訪社頭方入料、

一同四貫五百八拾貳匁六分壹り三毛、

右、普賢院方入料、

合、銀拾九貫八百四拾貳匁六分壹り三毛、

右、中山王より寄進之場所ニ而大体之入料銀、寺社方より取替、

一同貳貫貳百八拾貳匁四分六厘六毛、

右、諏訪社一之鳥居并登り階石溝筋仕調入料、寺社方より取替、

一同三貫九百拾七匁三分七厘四毛、

右、諏訪社石階并石垣道筋土持入仕調方、道奉行方より相調候入料、

合、銀六貫百九拾九匁八分四厘、

右、中城王子より寄進之場所入料銀、

一同、四貫六拾五匁七分七厘五毛、

但、外二家地取拵方賦相除申候、

右、久富貴宮社頭御造替、王子・撰政・三司官相中より寄進之場所ニ而御作事方より相調候太体之入料、

惣銀、三拾貫百八匁壹分八毛、

右者福々廻諏訪社頭御造替、普賢院寺家作様大門作替并石垣階石仕調方、久富貴宮大明神造替之入料、右之通御座候、此段申出候、以上、

午九月廿四日

大野隼人

琉球館聞役

右之通

〔302〕

一中將様御厄年之節、

上様、

先中城王子様・讀谷山王子・浦添王子・義村王子・與那原親方・譜久山親方・伊江親方、御寄進場御入料銀、於琉球館上納方相濟候段、申來候間、其付届申渡、向々江茂随分配分を以代銀上納可被申渡旨、御差圖二而候、以上、

戌正月十八日

山川親雲上

御物奉行

〔303〕

一銀四拾七匁七分、

右、讀谷山王子・浦添王子・義村王子・三司官衆、御寄進場久富貴宮燈爐・手水鉢調料銀、一同四百四拾八匁九分四り六毛、

右、同御寄進場久富貴宮大明神社御造替付、宮殿廻り并神垣其外塗彩色調料銀、跡達而御作事奉行被申出候付、於琉球館被得御差圖候処申渡後候間、早々上納可仕旨被仰渡候段、此節申越有之候、

右

中將様御厄年之節、讀谷山王子・浦添王子・義村王子・與那原親方・譜久山親方・伊江親方御寄進場調料銀、於琉球館上納相濟候段、申越有之候間、御銘々配分を以代錢上納可被申渡旨、御差圖二而候、以上、

戊正月十八日
御物奉行

山川親雲上

〔304〕

一去午年より先五ヶ年、重出米被仰付置候処、諸向別而差迫及難儀候旨、被 聞召通、格別之 思召を以被成御免候段者先達而申渡置候通二而、未年積登置候忝ヶ年分御取入相成、四ヶ年分御免二付而、申年積登置候出米者時々被返下、皆同御渡方相濟候段、琉球館より申来候条、取調本相糺御藏より向々江可被差返者也、

戊四月廿九日

三司官

御物奉行

〔305〕

春楫船作事知念親雲上男子

かま

同佐事山城親雲上男子

松

右者此節疱瘡為移方上国被仰付候間、忝身宛之賦飯米六ヶ月分、例之通可被相渡者也、

御物座

戊五月九日

取次 小波津親雲上

御物奉行

〔朱筆〕
右之通被仰渡候間、各二而可相達候、以上、

戊五月九日

小波津親雲上

船頭 当銘筑登之親雲上

同 古波蔵筑登之親雲上

〔306〕

一錢式千貫文宛、

春楫船作事知念筑登之親雲上男子

かま

同佐事山城筑登之親雲上男子

(松、脱力)

右、痲瘡移用とゞ今般上国被仰付候付、為御合力被成下候間、其首尾方可被申渡者也、

御物座

戊五月十八日

取次 小波津親雲上

御物奉行

江戸立御献上馬中間渡地村

平良にや

右同町端村

玉城にや

仮御馬作事下儀保村

たら玉城

右、江戸御献上御用意馬壹疋為飼置、去年六月十三日より当五月十一日迄、御厩江相詰候付、御馬作事御扶持方之割を以御扶持被下候間、可被相渡者也、

附、先達而内輪渡懸有之候間、其差引可申渡候、

御物座

戊五月廿三日

取次 小波津親雲上

御物奉行

琉球國要書拔粹

〔308〕

唐御代替之時御献上物之事

一皇帝様江日本調之鎧・太刀・長刀・鏝・馬道具等、并勅使江日本調太刀・長刀・鏝之類武器差上候儀、最初進物仕候儀、書留等有之候哉、又者申傳茂有之候ハ、委細ニ可書出之旨被仰付候間、案書より書出差上申候、題目之進物之儀与者相見得候得共、如何躰ニ成始り候儀ハ不相見得、申傳候も無御座候得共、進物不仕者不叶儀与奉存候間、跡々之様ニ御遣被下度奉存候、以上、

康熙五拾三甲午三月日記

三月廿四日

宇地原通事親雲上

覺

- 一金鶴沓對、銀之臺共、 兩め封王謝恩之例、
 - 一細白蕉布、五十疋、 舛長は、先例之通、
 - 一黒地白綾細蕉布、五十疋、右同、
 - 一白地黒綾細蕉布、五拾疋、右同、
 - 一白地細三ツ葉布、百疋、右同、
 - 一綿子式百把、
 - 一金之屏風、沓双、
 - 一金銀扇子、式百把、
 - 一奉書紙、沓萬枚、
 - 一からかミ、沓萬枚、
 - 一貝摺御茶わん、五拾、
 - 一同御茶盆、五拾、
- 右、此節謝恩献上物之考、如斯御座候、以上、

許田親雲上
大嶺親方

雍正三年巳六月日記

六月五日

池宮城親雲上

外略ス

〔310〕

一金丸拔太刀、式振、

但、身長式尺五寸、装束惣而金之熨斗付、柄鮫包黄糸卷提緒黄組糸木綿単入、

一銀丸拔太刀、式振、

但、身長式尺五寸、装束惣而銀之熨斗付、柄鮫包黄糸卷提緒黄組糸木綿単入、

一金壺壹對、兩目七百六拾目、

一銀壺壹對、兩目六百目、

十七舛、長八尋壹尺五寸ッ、

一細焦布百端、内五拾端藍嶋、五拾端白、

一白三ツ葉布、百端、

一壹本物銀扇子、百本、但焼杉箱拾二入、

一壹本物金扇子、百本、但右同、

一金屏風、壹双、

一花紙五千枚、内式千枚白地ニ白花、三千枚白地ニ青花、

一銅、五百斤、

一錫、五百斤、

右、皇帝様、

一金匣沓對、兩目八拾目、

一銀匣沓對、兩目七拾三匁、

一沓本物金扇子、四拾本、但燒杉箱四ツ二入、

一同銀扇子、四拾本、右同、

十七舛調、長八尋沓尺五寸ツ、

一細焦布四拾反、内式拾端藍嶋、式拾反白地、

右同、

一右同、三ツ葉布、四拾端、

右、皇后様、

右、当秋慶賀御使者被差渡候二付、御献上物品立此通二而候間、為納得如此候、以上、

卯七月七日

金城親雲上

惣役 両長史

〔31〕

江戸御使者衣類并御献上物之事

一江戸兩御使者與那城王子・金武王子被御持登候御書翰二御印・御判添申二付、兩長史許田親雲上・宇地原通事親雲上、漢字相付筆者奧間通事同心二而御書翰持登り、御書院方座喜味親方御取次二而、御役人江懸御目相濟候二付、書式枚ハ御判添申候、外函式ツ内函式ツ於大和二御印被添管之由御座候二付、御印添候書式枚相添、御右筆宇地原通事親雲上江相届候事、

附、書式枚ハ御書院為御格護相渡候、同式枚ハ用意二大和へ被差登答候間、掌翰使二而相調、可被差出通可申達由有之候二付、脇筆者石川子を以宮里親雲上江其段申届させ候事、

午五月朔日

覚

江戸為御用、久米村人自作自筆之詩文真艸行二相調、来夏可差上旨被仰付候間、此節相認申候各衆も於其元二右通三通ツ、相認、来夏可被差渡候系立方差上せ申候、字賦之儀者兩大通事・脇通事相談二而可被相認候、乍不申作為筆法等随分入念可被成候、以上、

康熙四拾七年戊子十月日記

十月廿四日

高良通事親雲上 志多伯親雲上

志多伯親方

奥間通事親雲上

康熙四十九年庚寅四月日記

一江戶御献上貝摺硯屏之字、筆者仲井真通事親雲上書調、大嶺秀才持登、今歸仁親雲上御取次二而差出候事、右字左二記之、

〔楷書〕

元丹丘愛神仙朝飲潁水之清流暮還嵩岑
之紫烟三十六峯長周旋長周旋躡星虹身
騎飛龍耳生風橫江跨海與天通星虹身騎
飛龍耳生風橫江跨海與天通我知爾遊心
無窮、

元丘歌 青蓮居士



右八仙人之裏

武皇齋戒拳華殿端拱須臾王母見霓旌照耀

麟麒車羽盖淋漓孔雀扇手指玄梨遣帝食可以

長生臨寓(字)縣頭上復戴九星冠總領玉童坐南面

欲聞要言今告汝帝乃焚香請此語若能鍊魄去三

〔屍〕
戸後當見我天皇所

東川主人

右西王母之裏

〔314〕

覺

新井勘解由殿詩文唐江持渡、翰林学士之衆江見せ席書申請、外間親雲上持来首尾被申上候、右禮銀金子式百疋去
年詩学同前二被持渡候处、其付届等何分等不被申上候、依之御差圖候者、右首尾方江戸迄茂御間合有之筈候間、
詩文翰林院学士之衆江見せ、且又右御禮銀茂進申候处、成程辱被存候、其段外間二而相達候様二返答仕候趣、外
間意趣二而漢文法二相調早々被差出候様二可被申渡候、以上、

康熙五十三年甲午四月日記

四月

日本正徳五甲午二當ル

両長史

湧川親雲上

〔315〕

覺

中将様御逝去二付、諸士今日方白衣裳并普請一七日召留候、殺生禁断并鳴物二七日停止之事、
附、獵師八三日禁断申付候間、此旨首里・久米村・那覇・泊中江可被觸渡者也、

康熙三拾四年乙亥二月記

日本元祿八乙亥

二當ル 二月八日

伊野波親方

識名親方
稻嶺親方

康熙四十九年庚寅正月日記

[316]

福建方北京迄五拾八宿、每宿二使者一人二付一日二銀弍匁宛、大通事以下ハ老人二付壹日二銀五分宛駅貼銀とて宿々方被下候、

右、北京上下唐方被下候路次銀如斯ニ御座候、以上、

正月十日

武富親雲上
宜保親雲上
牧志親雲上

[317]

一長史御用ニ付武富親雲上御客屋江罷登、國吉親雲上江御引合仕候而、御相談可申上由被仰付候書付、左ニ記之、
一御書付之内書拔、

一中山王、北京方あいしらい之儀ハ如何様ニ有之候哉、北京ニ而外國之王之中ニ而ハ何程之格合ニ候哉、
一琉球方北京江罷越候使者、北京方あいしらい何様ニ有之候哉、

一福建方北京江參候節ハ大抵日數幾日程ニ參事候哉、泊々之所又者道中用事達様之儀、又者北京致滞在候次第、
一來年被差上候正使・副使、其外琉人之官名、又者童子其外末々迄其格々之名、於唐ニ唱候名有之候者、不殘委細
可書出候、

九月廿五日

新納市正

右之通御座候間、下書相調可被差出旨御差圖ニ候、以上、

正月五日

國吉親雲上

両長史

覚

王子

按司

親方

座敷親雲上

当親雲上

勢頭親雲上

親雲上

里之子

筑登之

子

にや

一正使

一副使

一附衆

一右筆

一座樂主取

一路次樂主取

一別当

一與力

覚

寅正月五日

以上、

一 儀者

一 ひきりき吹

一 小姓

一 ふら赤頭

一 道具持

一 副使與力

一 樂童子

一 内供

一 御馬作事

一 輦持

一 慶賀使

一 慶祝使

一 謝恩使

一 謝禮使

一 進香使

一 香奠使

一 弔喪使

一 京回貢使

一 重御祝儀之御使者

一 輕御祝儀之御使者

一 重御禮使

一 輕御禮使

一 御香奠御使者

一 常向之香奠使

一 御弔御使者

一 進貢帛帆上國御使者

一 護運才符(府) 一 唐物宰領之才符(府)

一 護運掌筆帖 一 同筆者

一 倉庖使 一 藏役

一 飛服使 一 飛脚使

一 胥船 一 船頭

一 典規吏 一 儀者

右、唐名相当付如斯御座候、以上、

康熙五拾貳年癸巳四月日記

四月

許田親雲上

〔320〕

一 山川方琉球何与申湊江致着船候哉、海路何程有之候哉之事、

一 琉球何与申湊より本唐何与申湊江致着船候哉、海路何程有之候哉之事、

右、御用之由、江戸方申来候間、相糺申出候様ニ可被申渡候、以上、

二月

右之通、彈正殿方和田次兵衛殿御取次を以被仰渡候ニ付、左之通書付を以申上候、

一 琉球下り船之儀、山川致出帆、本琉球之内那覇之津致着船候、海路何程有之候儀、仮屋中江存之者無御座候、

一 唐行船之儀、本琉球那覇之津方致出船、唐福州之内閩安鎮与申湊江致着船、海路之儀存之者仮屋中江無御座

候、以上、

二月二日

右之通書付を以申上候処、山川方琉球海路之儀者、琉球江罷下候船頭共江御尋被成筈二候、那覇方唐福州之内閣安鎮与申湊迄之海路者究而不知候共、前々方申通有之候ハ、当夏便方被申越候様ニ琉球江可申越旨、和田次兵衛殿御取次ニ而被仰渡候間、弥当夏便方御書付ニ而可被仰越候、為納得如斯ニ御座候、以上、

二月六日

吉井勘右衛門

[321]

一琉球那覇之津方本唐福州閩安鎮津口迄四百八拾里程有之由、傳承申候、里程之儀ハ、三拾六丁を壹里ニ積相計申候、何ぞ書留等ハ無之口傳迄ニ而承之候、御尋ニ付而如斯御座候、以上、

康熙雍正式年甲辰又四月日記

長史

(閏)
又四月十五日

安次嶺親雲上

右之表両通相調、長史新城親雲上登城、御双紙庫理米次親雲上御取次差出候処、米次親雲上を以被仰付候者、右里積ちやんふんニハ不相見得候哉、相見得候ハ、其表被書出候而者如何候哉与、御尋ニ付而、新城親雲上方申上候ハ、ちやんふんハ船之走廻を以里積仕置候間、何百里程与ハ巨相計候、依之傳書を以差上申候、左候ハ、先年被書出置候里積之寫日記相見得候間、其通被書出可然由、被下候寫左ニ記、

覺

一福州方琉球迄直差渡、唐里千七百里、琉球里ニノ式百八拾三里三合程、

一福州方久米島迄唐里式千四百里、琉里ニノ四百里、

一久米嶋方福州迄唐里三千里、琉里ニノ五百里、

一那覇方慶良間・久場嶋迄唐里九拾里、琉里ニノ拾五里、

右、任御尋相考如斯御座候、尤慶良間・久場島迄或四拾里、或三拾里之由交々有之、叵取ノ御座候間、此等之首尾申上候、以上、

乾隆式年丁巳十二月日記

十二月五日

長史

金城通事親雲上

同

渡慶次親雲上

[322]

一北京滞留中毎日三度ツ、御賄被下、且又路次五拾八宿御座候処、往還之節驛貼銀与申、一宿ニ付使者一人ニ而一日ニ銀子式匁ツ、大通事以下老人ニ而一日ニ五分ツ、被下候、諸官人御用ニ付往還之節右例之由、但依官人高下銀子之多少有之由御座候、

一進貢期之節ハ、渡唐船兩艘之人數并福州琉館屋江在番仕候存留通事主從迄在唐中并帰國海三十五日分、唐方糧銀・役米被下候、使者兩人者老人ニ付一日ニ銀式匁、其以下之役人ハ一日ニ五分一里・白米二升五合ツ、大筆者以下水主迄一人ニ而一日ニ銀壹分・白米七合式才ツ、被下候、接貢之儀者古例無之、近き比方訴訟相達罷渡候故、糧銀米不被下候、

一北京相仕舞福州下着、諸官人江參官仕、相濟候得者如最前布政司役座ニ而御振舞被下候、御暇次第如琉球致出船

候、

右、任御尋如斯御座候、以上、

二月

金城通事親雲上

渡慶次親雲上

[323]

一渡唐金壹萬三千四百兩ニ被相定候節、御老中大久保加賀守様御宅江

中將様御出被成候様ニ与被仰遣候ニ付、島津中務殿・伊勢拾兵衛被召列御出候処、渡唐金減少被仰付候様ニ段々被仰渡候得共、進貢使船往来之入目多候ニ付、大分ニ減少積積候而及詮議、金千弍百兩減少候而、右金高二八被相定たる儀ニ候処、新金銀ニも古金銀之高同前ニ入目相調候筋ニ而、新金銀之位引入候而茂渡唐方ハ相調筋相聞得候得共、前後相障儀有之候間、此節増金之願国司方可被仰出時節ニ候、

一増金之積ハ古金壹万三千四百兩之積ニ新金を以合候程之重金被差渡候儀御免被成下度旨ニ而可然候、右願之儀者當夏中国司方使者鹿兒島迄被為差越候而可然候、其以後江戸江被相伺御差圖次第被仰上ニ而可有之候、以上、

康熙四拾三年甲申十二月詮議書ニ

日本宝永元甲申ニ当ル

二月

覺

一渡唐銀之儀、貞享四卯年方金高老萬三千四百兩被仰定置候處、新金銀二相改位引入申候、依之古金銀を以相調來候御用物、新金銀二而者不相調不足之積二候得者、御不勝手之方二候間、位引入候分増銀有之候而茂於唐二此中之様二可相調哉、相談仕可申上通被仰付、私共吟味仕候者、琉球之儀洪武以來唐致進貢候處、往古二者当分之様渡唐銀無之、僅之御用物代遣銀迄被召渡候二付、渡唐船一艘二五拾貫目宛之差出仕、唐人江者琉球小國二而不自由有之、右通僅之銀高持渡由申來今以其通に差出仕候處、漸々と渡唐銀相重来候、其段官人方江相知候ハ、過分之遣銀仕候歟、又運上銀被相掛候歟、兎角御為二不罷成方与深相隱申候得共、一度二而無之毎年之儀候得者、密々二而茂漏聞得候哉、唐着船之時并御買物船江積入候涯、段々之役人衆被差出稠敷被相改候、大分之銀船中二而可隱置様無之、又御買物二召成候而茂太荷物琉球館屋中二而取こはめ不罷成、此兩度之改之儀必至与差迫申候得共、色々相忍漸無故障相調來候、然者當時之銀高さへ右通念遣千萬二奉存候處、此上二増銀被仰付候ハ、如何可相調哉、此儀難致了簡御座候、此旨被申上可被下候、以上、

午五月廿一日

天久通事親雲上

外略又

覺

一此節從 御勝手方御座唐買物用として古銀百貫目被差下候、於唐二何そ支之儀者有之間敷候哉、存寄之程可申上

旨奉得其意候、私共吟味仕候處、往古方渡唐船一艘ニ付銀高五拾貫目持渡由書付奉行衆江差出、今以其通仕來候、唐役人段々船江乘往還共荷物相改、銀子を可取企ニて様々違亂を申掛候儀、此間度々御座候、若嚴密之改共被申付候ハ、可致様有間敷与念遣奉存候、唐之儀時々之奉行衆了簡次第二候得者、何分と究而難申上候得共、銀高多買物相増候程何角之申掛、買物之障も出来可申哉与奉存候、此等之旨宜様ニ被仰上可被下候、以上、

康熙四拾四年乙酉十一月記

十一月七日

長史 諸大夫

親方

一此節從 御國許錫千斤唐江被差渡、糸端物之内品替可仕由被仰付候、何そ支申儀ハ有之之間敷哉、遂相談可申上由奉得其意、私共申談候者、錫之儀進貢物二候處、賣買仕候儀如何可有之哉ニ念遣之事候、此中唐奉行衆方琉球土産物之儀被相尋候節者、小國之事ニ而重宝成品物無御座候、銅錫之類多者無之ニ付而漸銅三千斤・錫千斤乍輕少進貢仕候由、致返答置候得者、脇より商賣持渡儀宜ケ間敷候、其上品替共ニ隙取出帆之支ニも可罷成哉、旁々以念遣奉存候、此旨宜様ニ被仰上可被下候、以上、

康熙四拾四年乙酉十一月記ス

十一月七日

長史 諸大夫

親方

康熙三拾四年乙亥二月日記

日本元祿八乙亥

一中將様御逝去二付、首里・那覇・久米村・泊中、申口・座敷・勢頭座敷并諸座大屋子・筆者・筑登之座敷まで、御城并御奉行所明十日方明後日まで御悔被申候様可被觸渡旨、御差圖にて候、以上、

亥二月九日

田嶋親雲上

宇地原親雲上

里主 御物城 両長史

[一] 志多伯親方・古謝親雲上・宮城長史、白衣裳ニ而登城仕、下庫理御悔帳ニ書付申候事、

一 康熙四拾三年甲申十二月十四日、稻嶺親雲上より長史御用之由御座候付、許田親雲上罷出候得者、中將様御死去

二 付御飯屋江 上様御行幸被為遊候間、其心得可仕由被仰付候間、諸士右之段觸渡候事、

覺

一中將様御逝去二付、諸士今日方白衣裳并普請一七日召留候、殺生禁断并鳴物二七日停止之事、

附、獵師八三日禁断申付候間、此旨首里・那覇・久米村・泊・諸嶋中可被觸渡者也、

申十一月十五日

池城親雲上

幸地親方

識名親方

申口 御物奉行

右之通被仰出候間、觸渡候様ニ可被申渡候、以上、

同日

祢霸親雲上 石嶺親雲上

里主 御物城 両長史

〔328〕

一中将様御逝去ニ付、申口座より勢頭座敷迄明日方明後十七日迄、御城并御奉行所江御悔可申上由、觸渡候事、

附、諸座大屋子・筆者・筑登之座敷迄ニ而候事、

一右ニ付而御悔ニ御仮屋江 上様并中城王子様・讀谷山王子様御行幸被為遊候ニ付、親方部ハ袖御免、申口方以下筑登之座敷迄ハ白衣裳着ニ而袖結、長寿寺前ニ而御迎之砌、四ツ御拜仕相済引申候、附、長史并筆者ハ御後方御供ニ而御仮屋之側迄参申候、御上向之時分ハ、大門前ニ而御迎御拜四ツ仕候事、

一右御悔ニ、惣役志多伯親方・長史許田親雲上致登城、并御奉行所・附衆・御横目・足輕宿迄罷出候事、

〔329〕

覺

一龜姫様御卒去被成候之由、御到来有之候ニ付、今日より明後十三日迄物音并殺生禁断被仰渡候間、那覇・久米村中可被觸渡候、以上、

康熙四拾四年乙酉十一月日記

十一月十一日

安慶名親雲上

前川親雲上

同十二日

一 龜姫様御卒去二付、御奉行所江御悔為可申上、惣役・両長史罷出候事、

覺

一中將様、去年十一月廿九日為被遊御逝去由、昨七日御到来有之候、依之那覇・久米村中諸士、今日方白衣裳着用并物音禁断申付候間、早々可被觸渡者也、

康熙三拾四乙亥二月日記

二月八日

識名親方

伊野波親方

〔330〕

一 公方家宣公、十月十五日、被為成葬御候付、御悔之御使者可被差越旨、此節御家老中方以書狀申越候、右付書

翰之儀、去巳年、綱吉公葬御之節御悔之書留御老中様方之御返翰之趣二、國王様方之書翰之趣不相應候、且亦

去々年琉球使者於江戸拜領物之御禮之書翰、当春上間親雲上方を以被差越候節も鹿兒島二而書翰認直江戸江被差遣候、其案文上間親方江渡置候間、旁見合来年被差上候御悔之書翰致吟味候、相認可被差越候、

一 書翰之儀、吟味之上認可被差越事二八候得共、乍其上相替儀も可有之候間、御判紙餘多被差越候様二可申越候、

一 書翰仕立様之儀も以前二相替候、其段者先達而も相認候間、猶其通可有之候、右御悔之書翰宛所之儀、左之通二

候、

一 書簡老通

井伊掃部頭様

一同老通

土井相模守様

一同老通 御連名

秋元但馬守様

久保加賀守様

井上河内守様

阿部豊後守様

右之通得其意、委細琉球江可申越候、以上、

康熙五拾貳年癸巳五月日記

十一月八日

[331]

雍正七年己酉三月

一 御当國曆之儀、康熙九年庚戌年方唐法ニ調方被仰付、曆役御扶持方米貳石五斗、又ハ為御慶賞米五斗御引出物被下候処、中比御簡略ニ付而御扶持方之内より五斗ハ減少被仰付、僅貳石之御扶持方ニ而相勤来候、然者曆調候儀毎年三月より凡付歳末迄ニ相仕廻、耆人ニ而之勤、殊ニ此節方御用多罷成、萬日撰等迄相重被仰付、旁以繁多之筋ニ御座候条、御扶持方ニ而續兼候躰見及申候、依之叵申上御座候得共、向後者三石之御扶持方ニ被仰定被下度奉願候、此等之趣宜様御取成御披露頼上候、以上、

三月十九日

幸喜親雲上

〔332〕

覺

一米三石起、

右、曆役御扶持方之儀、此中米式石被下置候處、此節方曆員數大分相増、其上時・よたへ被仰付候日撰迄も被仰付候二付、大粧成勤役、右員數可被成事、

酉

三月十九日

勢頭

嵩本筑登之親雲上

右之通御扶持方被成下候間、可被奉其意候、物役・^(惣)両長史御下知二而候、以上、

雍正七年己酉三月日記

久米村筆者

三月十九日

賀手納筑登之

〔333〕

一漢字御右筆方御詔物之儀、前々者大宿方為買渡儀二候処、位悪敷故頃年御訟相達、存留江買調被仰付候、然処漸々位劣二相成、筆并白紙ハ題目之者二候処別而不宜、御用難相達候間、随分入念買調可申候、

一諸公事并例替之事二付而、官人方江差上候呈報類、跡々ハ冊二書調持渡、漢字御右筆方へ相調、唐通融之為相成候処、中比方不相納見合之為支申候間、此節方惣様冊書写壹冊者存留役格護二而跡役江次渡、壹冊ハ被持渡、惣

饒波親雲上

名藏親方

役・長史致引合漢字御右筆方江可被相納候、

附、大通事公事方之呈報之類も惣様書写可申候、

一御當地之者、唐漂着者并役者不慮之仕合、其外例替之事出来候得共、其身届方之日記等存留役江次渡無之二付、不圖其事二差當候節差迫致忘却候由承候間、向後ハ委細之書置二而、右同前二跡役江次渡、老冊ハ持渡長史江可被相納候、

右ヶ條之通入念被相調置、代合之砌堅固二次渡可被成候、以上、

乾隆四年己未十一月日記

十一月四日

宜寿次通事親雲上

久高里之子親雲上

[334]

一始御在番衆、御家来・船頭・水主共江常々應答律儀可仕事、

附、於中途若輩之者とも聊尔仕儀於有之者、問役人見届披露可仕事、

一御国之人より萬賣物賭ニ請取間敷事、

附、賣買之諸色引替仕儀、制外候事、

一取次役以下那覇罷下り候砌、泉崎橋口・西門・石門ニ而下馬可仕事、

附、下々之者首里・那覇・泊之間、馬乘間敷事、

右之通、銘々より段々雖申渡置候、猶以堅固可相守候、若違背之族於有之者急度其沙汰可申付者也、

康熙四拾五年丙戌九月日記

九月九日

識名親方

越來按司

[335]

一 兵具御藏御作事二付、塩硝并御道具今月廿日波之上拜殿江差越申候間、諸人出入、且又彼近邊火持參不仕候様
二、久米村中被仰付可被下候、以上、

康熙四拾七年戊子五月日記

五月十八日

兵具当

儀保筑登之親雲上

[336]

一 御当國之儀、連々及御手迫候、御借銀大分相増、以後渡唐銀之才竟不相成仕合二而、去々年段々吟味之趣達 御
聽、新參士之儀被召留候、然処新參士迷惑仕候由被聞召上、其上被思召上趣茂御座候間、如前々可被召仕旨、
御意被成下候条、此旨可被申渡者也、

康熙四拾八年己丑五月廿式日日記

五月廿二日

評定所

[337]

覺

ならしとノ一服之両目四匁考

一煎薬壺服

代錢五百文

但、右之通壺服之定代被仰渡候得共、若薬味之内病人方方出候品者其節納戸方御立直成を以、右薬代ニ差引可致候、

一膏薬壺寸かく壺枚

代錢五拾文

一粉薬付薬代錢之儀者、右せん薬・膏薬代ニ準シ可請取候、

但、此以前通例ニ用來候粉薬付薬代錢者本文之通、此外格別高直之薬を以致調合置候、粉薬・付薬代錢者其薬味之代錢ニ應シ取納可有之候、

一薬代之儀、薬服用召留以後六ヶ月めニ取納可有之候、若右月限致相違候ハ、忝わり利付を以月限相立、證文を以可致取納候、

一此以前用得置候薬代、于今不相払方者、右定代を以当月方六ヶ月目ニ取納可有之候、若右月限致相違候ハ、取納方、右同断、

右之通被仰出候間、支配中堅固可被申渡旨御差圖ニて候、以上、

雍正七年己酉閏七月日記

閏七月七日

保栄茂親雲上

安慶名親雲上

覺

一旅衆諸祝儀之時、女性方躍候儀專祝之二筋二候処、慰物之樣罷成終夜躍候儀女性之風躰不宜候間、向後祝之日中二限り律儀躍可申候事、

附、夜中ニ左右間候砌ハ其夜躍ニ不及、翌日ニ可致事、

一同時はやり哥共仕、女性之振廻見苦敷風儀二候間、祝儀向之哥迄ニ而成程律儀ニ躍、右躰之雜哥、惣而令禁止事、
附、宮拜殿江罷出躍候儀、甚女之風儀不成合仕形別而不宜候間、是又令禁止候、

右之通、是節申渡候条堅固相守候様、各噯中不漏可被申渡者也、

雍正八年庚戌四月日記

四月廿七日

三司官

一近来琉球人、於当地刀・脇差を求、磨拵等相調持渡者有之由其間得候、琉球國之儀者御領内之儀ニ而候得共、向後刀・脇差・弓・鉄炮其外兵具等琉球江持渡儀ハ一切御禁止之事二候間、可得其意候、尤於琉球致所持候刀・脇差御当地江持渡拵等相調候儀御構無之候間、於琉球寸尺并作相知候ハ、其段相糺、在番之奉行江申出之、證文ヲ取持渡、琉球方取次川村少左衛門江渡置候、帰帆之節少左衛門方裏書を取可持下候、異国江刀・脇差其外兵具等差渡儀者公儀御太禁^密之御事候故、琉球國之儀渡唐口之儀ニ付而、別而被入御念御事候、若右之旨致違背於御当地刀・脇差・兵具類相求蜜々持渡候者有之、於令露頭者評定所江申出、急度御沙汰可有之候、此等之趣詰中之面々

江堅可申聞候、尤右之段者三司官中江茂可申越候、聊緩疎有間敷候、以上、

康熙三十八年己卯九月日記

閏九月廿五日

新納美作

[340]

一南泉院幡之字、古波藏親雲上致相談、相調得申候事、附、左二記之、

(楷書)

護國祐民大政臣威武英靈征夷大將軍寶幡護國祐民大臣威英靈征夷大將軍東照太權現寶幡

康熙五拾壹年壬辰三月日記

三月十三日

[341]

覺

一自南京松江至日本用辰針酉戌亥子方風迄ハ走申候半与奉察候事、

一自浙江寧波至日本用寅卯針申酉戌亥方風ニ迄ハ走申候半与奉察候事、

一自下唐至日本用亥子針巳午未申方風迄ハ走申候半与奉察候事、

一自琉球至福州用酉戌針子丑寅卯辰方風迄ハ走申候事、

右乘前不存候得共、推量迄ニ茂書付可差上旨被仰付候間、此乘前ニ而候半、推量迄ニ如斯御座候、琉球ニ而福州

口江乘前并彼地方帰帆之乗前、如此御座候、以上、

康熙貳拾五年丙寅詮議書二

六月十日

高良親雲上

[342]

覺

一恐多御座候得共申上候、塩焔御藏之儀、前々より御仮屋内ニ御格護御座候処、萬一出火共有之候ハ、一大事与被思召上候儀御尤至極ニ奉存候、然者此節若狭町村・久米村之境ニ御移御格護被仰付由御座候、依之相考候得者、康熙三拾五丙子年福州塩焔御藏ニ出火有之、近邊之野山華林寺与申大伽藍(藍)并人家大糖(糖)ニ吹散、其上風下之方ハ城之困石垣吹崩、外村迄も焼損為申儀ニ御座候ハ、久米村・若狭村之儀、僅二三町之内ニ有之、別而久米村之儀ハ往古々唐往還之案書格護仕置候間、弥念遣至極ニ奉存候条、前々御格護被仰付被下度千万願ニ奉存候、此等之趣宜様ニ御取成奉頼候、以上、

康熙六拾一年壬寅詮議書

九月

池宮城親雲上

[343]

覺

一為字文致上京候久米村秀才如何程之人躰之子息ニ而候哉与、御尋も御座候者、正議大夫之子息与申上可然奉存候、

一右秀才、北京方帰国之時分為續役、又可参哉之由御尋御座候半、右四人勤学首尾能仕帰国候而師匠ニ可罷成与存候間、續役者御遣被成間敷与存候由、申上可相済与奉存候、

一右秀才何年程可為滯留哉与御尋御座候者、七八年相勤、年次第罷婦女房逃候而者不叶之由、申上可然奉存候、
一右秀才於北京・福州、八卷ニ而見官仕可然与奉存候、

右之條々、僉議仕可申上之旨被仰付候間、砂邊親雲上相會相談仕、如此ニ御座候、以上、

亥十月

諸大夫

都通事

覺

一大和往還仕候哉之由御尋御座候ハ、往還不仕由申上可相済与奉存候、

一武具之類御尋御座候ハ、少々有之、見候得共何方ニ而作り候哉、然与存不申由、申上可相済与奉存候、

一金銀銅鉄糊枘すわう國中方出候哉之由、御尋御座候ハ、若輩ニ而存知不申由、申上可相済与奉存候、

一唐國方買渡候糸商賣仕候哉之由、御尋御座候ハ、商賣者不仕、衣裳作り候与申上可相済与奉存候、

一扇子刻箱紙させる何方方参候哉之由、御尋御座候ハ、七嶋方年貢仕由申上可相済与奉存候、

一曆之儀御尋御座候ハ、福州布政司方被下受用仕与申上可相済与奉存候、

一官人之禄御尋御座候ハ、存知不申我々ハ老人ニ而一年ニ米四拾かため被下由、申上可相済与奉存候、

一三拾六姓御尋御座候ハ、子孫相絶、蔡・梁・鄭・林・金相残候由、申上可相済与奉存候、

一学校有之哉由御尋御座候ハ、有之由可申上候、師匠之儀ハ御扶持被下被立置候与、申上可相済与奉存候、

一孔子御祭之儀御尋御座候ハ、二八月初之丁ニ御祭仕候、規式ハ禮生存候与申上可相済与奉存候、
一葬服葬禮御尋御座候ハ、葬服三年仕候、葬禮ハ有之候得共不相知候、茶毘之儀ハ十日内ニ仕候与申上可相済与奉存候、

一琉球國如何程有之哉之由御尋御座候ハ、如何程有之候哉不存由申上可相済与奉存候、

一府縣有之哉之由御尋御座候ハ、八府二三拾六縣有之由申上可相済与奉存候、

一國中^方出候上納御尋御座候ハ、不存由申上可相済与奉存候、

一百姓食物御尋御座候ハ、五穀有之食仕与申上可相済奉存候、

一書物板行有之^{（衍字）}有之哉之由御尋御座候ハ、板行有之候得共古ニ候而唐之書物之様無之由申上可相済与奉存候、

一琉球女袴着可仕哉之由御尋御座候ハ、着仕与可申上候、

一黒木之儀、御尋御座候ハ、太平山^方參候得共、餘多無之由申上可相済与奉存候、

右、北京秀才於彼御地ニ御尋も御座候半、我々詮議仕可申上旨被仰付候間、相談仕候條々、乍恐如斯御座候、以上、

康熙貳拾五年丙寅

十月

諸大夫

都通事

[345]

此節、秀才四人北京江学文并言葉稽古ニ上京ニ付、例年之遣銀方七貫め相重候、尤右之銀方於北京秀才師匠共取合之禮銀可被見合候、且又主従之賦飯米之儀、当十月迄三拾七ヶ月分於当地被下候、然処長々滞留故賦飯米御重

可被下由、親々方訴訟有之候、然共彼地之様子前以何分与難相究候、前々渡唐之人數唐方被下候糧食米御物ニ召上候得共、右秀才糧飯米出候者面々ニ可被相渡候、右員數ニ而も於彼地ニ難調得仕合ニ而者、右銀之内方賦飯米老人分相重、米之儀者起壹石ニ付三拾め之考ニ而可被相渡候、尤各帰朝之時分彼地之様子得与可相知候間、至其節可申渡候、以上、

康熙貳拾五年丙寅

十一月九日

稻嶺親方

池城親方

〔346〕

覺

北京秀才、國子監ニ入為致學文候御願、前亥年勅使汪老爺・林老爺方

皇帝様江言上被成候処、礼部江詮議被仰付候、就其礼部詮議之趣者、往古之例相考申候得者、唐之太宗皇帝御代貞觀年間新羅國・百濟國より王子被差遣、國子監ニ入被為學文候、大琉球國者大明初方中國隨、進貢之年期不限、王子并陪臣之子皆子監ニ入為學文、別而之御取持ニ而禮待甚々厚有之、且又洪武・永樂・宣德・成化之間茂琉球官生、國子監ニ入為致學文候例、大明會典相見得申候、今琉球之儀ハ、遠國ニ而候得共蒙 皇帝様之御仁徳、學文之道を御慕、眞実御願被成由候得共、^(者力)其御懇望之通陪臣之子弟四人國子監ニ入學文被仰付可然奉存候、康熙貳拾三年六月八日禮部方言上被仕、同十三日詮議之通ニ被仰付由、從 皇帝様御意被成下候段、同年

八月廿二日禮部方

尚貞様江御付届之咨文相見得申候、然者琉球官生之儀、本王子方御遣被成候得共、大明中比方其代陪臣之子を被差渡候間、致大清二茂其例を以王子ハ御召留、官生計御遣被成候、雖然本王子御取持之例有之ニ付而準其例、国子監之内新敷家普請被仰付、春夏秋冬四季之衣裳等被下、且又毎日御賄料并拜領物茂官人同前ニ被下候得共、誠以不輕儀与奉存候、若於北京琉球官生者如何躰之官人子息ニ而候哉与御尋御座候ハ、三十六姓之末孫、紫金大夫・正議大夫之子与申上ニ而可有御座候得者、只今秀才位之者方御遣被成儀者餘れ輕々敷御座候間、若唐秀才並之御取持ニ罷成候ハ、残念至極奉存候、唐官生之儀茂相考候得者、無拋御人躰之子息方國子監ニ入申二付、正八品官同格之御取持ニ而御座候、左候得者琉球官生も若里之子位被下、御遣被成候ハ、唐之格式相應可仕与奉存候、弥此節之儀者若里之子位秀才地位之儀ハ、勅使徐老爺委細扱ニ而候得共、秀才者餘れ輕者ニ而唐格式ニ相叶不申候間、唐官生同格若里之子位被成下度奉存候、此等之趣宜御披露頼上候、以上、

康熙六十一年壬寅僉議書二有ル

新城親雲上

山田親雲上

〔347〕

- 一 大和往還仕候哉与御尋御座候ハ、往還仕不申由相答申候、
- 一 書物板行有之候哉与御尋候ハ、四書五經詩文之類ハ有之由相答、
- 一 琉球文字有之候哉与御尋候ハ、國中ニ而者多者琉文字を用申候由相答、琉球ニ茂育者醒人程之人御生候而文字等被作候哉与御尋候ハ、阿摩久与申神人御生候而、五倫之道文字等為被教由相答、

〔348〕

寫

今度御誕生之 御若子様江益之助様と御名被進候間、可奉承知候、尤益之字を名并名字ニ用候儀向後無用可仕候、助之字不及遠慮候、乍然松之助、跡之助類唱似寄候名、且亦益之字ニ而無之候而茂ますと唱候字ハ物而遠慮可仕候、此旨支配中へ不漏様可被板通達候、以上、

雍正六年戊申十月日記

日本享保六辛丑二当ル

八月九日

大藏

御勝手方

右之通、此節被仰渡候間、御書付之筋堅固ニ相守様、各喫中不漏可被申渡者也、

十月

三司官

御物奉行 申口

〔349〕

覺

吉 宗 重 豊

右之文字・名乗之字ニ用候儀向後無用可仕旨、且又右之文字ニ而無之候而も、よし又ハむね・しけ・とよと唱候字迄、惣而遠慮可仕与存候ハ、心次第相改可然候、此旨支配中江不漏様可被致通達候、以上、

雍正三年乙巳四月日記

正月

大藏

御勝手方

右之通和田次兵衛殿御取次二而被仰渡候間、此段御問合申上候、以上、

二月八日

吉井勘右衛門

〔350〕

一今度

薩州様江御縁組被仰出候尾張様御息女様、御名房姫様与奉申候、依之房之字并唱之名付居者ハ可致遠慮候、名乗之儀者相改不及候、

右之通致通達候、御例方御勝手方江者寫を以可相達候、以上、

乾隆五年庚申五月日記

日本元文五庚申

五月

織部

右之通被仰渡候間、奉得其意名付居候者ハ急度相改候様、噯中江不漏様可申渡者也、

六月廿五日

三司官

〔351〕

乾隆五拾三年より同五拾六年迄廻文 天明八年ニ当ル

一 太守様、中将御官位被遊御昇進候得共、此内之通太守様与可奉称旨被仰渡之段申来候付、問合之事、
一来月朔日日蝕有之候段、大和曆ニ相見得候間、日蝕中爬龍舟かね打候儀、可被差留旨、御差圖ニ而候、以上、

申四月廿三日

喜名親雲上

〔352〕

一 去年四月廿四日

敬姫様被遊 御逝去候段、御到来御座候間、諸士明日より日數三日慎之事、

一 普請之儀、明日方日數三日可相留事、

一 殺生并鳴物遊興ケ間敷儀、明日方日數十日、右同断、

右之通被仰渡候間、不漏様可被申渡旨、御差圖ニ而候、以上、

西正月廿三日

小波津親雲上

〔353〕

一 太守様与御改被成候付、 豊之文字名并名乗ニ用候儀、同唱迄茂可致遠慮候、

一 御実名齋宣公与奉称候間、宣之文字者遠慮候、

右之通去々未正月被仰渡候段、此節琉球館より申来候間、童名并唐名・名乗ニ附居候者ハ急度可相改候、尤名字

八不及遠慮、此旨申渡候、以上、

西二月廿六日

三司官

〔354〕

一大和年号、当二月三日寛政与被相改候旨、当月八日到來候間、同日方用候様可被申渡者也、

西三月十五日

三司官

〔355〕

除證文

御小人

当年拾七才

新垣仁右衛門

右者琉球人新垣にや二而御座候処、天明七年未八月十五日篠崎藏太左衛門御取次を以、代之御小人二而、日本姿

被仰付候間、後年手札御改之節方此方帳面相除申候間、御方帳面可被書載候、尤御法度之宗旨二而無御座候間、

除證文如斯御座候、以上、

但、琉球手札之儀者、御改以後二而琉球館江相届不申候、当年夏便二差越筈二御座候間、相届次第差上可申候、

琉球館聞役

天明九年酉正月

矢野直之進

御小人頭衆

右之通被仰渡候段、今般琉球館方申渡候間、右抱主并身近き親類江も承知為仕、其首尾可被申出旨、御差圖二而候、以上、

酉四月廿一日

山川親雲上

里主

御物城

[356]

一先月十九二日、江戸東御殿二而

御男子様御誕生

御名 時之丞様与奉称、御順之儀者

雄五郎様御次二候条、此旨奉承知、時之字并同唱迄茂名二附居候人者可致遠慮候、

右之通表方江致通達、奥掛御勝手江茂可相達候、

閏六月

石見

勘解由

右通被仰渡候段、琉球館より申来候間、唐名名乗二附居候方者可相改候、尤名字ハ不及遠慮候、此旨支配中可被申渡者也、

酉十一月廿一日

三司官

御物奉行

357

一御内證様御事、御部屋様

於千萬様御事、御内證様

右者 思召被為在、右之通被 仰付候条、此旨表方へ致通達、奥掛御勝手方江茂可相達候、

八月

勘解由

358

一御領國中燈油不足、末々ニ至不自由之由相聞得候付、此節木綿実を以油燈方申付、追而賣出筈候、右油之儀者食事ニ召仕候儀者禁物ニ候、紫根差交燈候得者赤色ニ相成由候付、無紛ため右之締方申付候条、食物二者一切加へ申間敷候、就中幼稚者共江氣を付可申候、

右之通向々江不漏様、早々可申渡候、

五月

安房

359

一御領國中燈油致不足、木綿実を以燈方申付候、食事ニ召仕候儀者禁物ニ候故無紛ため紫差交赤色ニ相成候締方ニ而、追々賣出筈候付、先達而申渡置候、右ニ付猶又紫根無相違、種子油ニ似寄候儀者一切致間敷旨、油屋江稠敷申渡、尤隣家掛合之者両三人より茂請書差出置、燈調候上者廻り前横目見分を請、時々賣出候様可申渡候、右次

第之儀故諸向種子油買取、若疑敷油茂候ハ、御当地并近在者廻り横目、諸私領者締方横目・所横目之間江何方より買取候旨、油相添可差出候、

右之通、向々江不漏様可申渡候、

閏六月

一大宜見王子御膳進上御料理拜領、磯御茶屋江被為召、又者御暇御給候儀、段々御急キ御日割被仰渡候得共、今般御初入部ニ付而者、段々之御規式御座候間、当月廿二日御暇被下候、御日賦り之段兼而内々承知仕候付、右通被仰付候而者表向者勿論、脇々御付届茂太分之上、役々以下茂多人數之事ニ而、夫々之付届又ハ町方引合等之儀、何分差急候而も正月中相掛り、二月より先帰帆之筈候得共二月中ハ関日と申風並不定ニ有之、遠海乗渡候儀跡々より致遠慮事ニ而、おのつから三月帰帆ニ可相成候、然者琉球之儀船數少ク、当分罷登居候船々ニ而、正使・副使乗船之手当ニ而何れ之筋正月中帰帆不致候而者、船修補旁二日教を込候故、江戸立出帆之時節取後候儀も難計、甚以無寬束候間、随分差急正月中致帰帆候様ニ与、其御地より被仰越を以段々御内意申上候付、兼而之御日割相直り御勤方早々相濟、去月廿八日御暇御給、去十八日御使者楫船兩艘ニ被成御乗船候、右通王子勤早目被仰出候儀、専江戸立上着無遲滞様ニ与之御事候間、五月中上着有之候様可被仰渡儀奉存候、去年当年打續御使者乗船越年候故、江戸立老艘速茂致越年候而ハ、對天下御都合不宜、此儀至而御念遣之段、委細承知仕候間、此段御間合申上候、以上、

西十二月廿一日

田原春右衛門

與那原親方様

權山金左衛門

永山親方

右之通申來候付、何れも五月中御上着不被成候而不叶事候間、仕廻方折角被差急、聊遲滯之儀無之様取計可被致旨、御差圖二而候、以上、

戊正月十五日

小波津親雲上

〔361〕

一 今般江戸御使者立、五月中上着無之候而不叶段、琉球館より申越趣有之、折角被差急聊遲滯之儀無之様二与之儀者先達而被仰渡置候処、此節唐船帰帆遅ク仕廻方相滞、別而御心配之御事候間、弥日賦之通荷物積入仕廻首尾申出候上、順風次第無滞出帆可被致候、若例年之様二相心得及延着候而者、甚御不都合成事候条、極々差急き一日茂早々致上着、兼而被仰渡候詮相立候様取計可被致候、乍不申在番親方二茂段々之御用向有之、江戸御使者一所二出帆無之候而不叶事候間、随分差急き候様是又可申渡旨、御差圖二而候、以上、

戊五月廿一日

小波津親雲上

松嶋親方

〔362〕

一 今度御誕生之

姫君様 淑姫様与奉称候付、ひで与唱候名者末々迄茂遠慮可仕候、

右之通、表方江致通達奥掛御勝手方江茂写を以可相達候、

一 太守様江佐竹右京大夫様御妹

幸姫様御縁組御願通被仰渡候付、

御名之文字并唱遠慮可仕候、

十月

求馬

右膳

右通被仰渡候段、琉球館方申来候間、童名附居候者ハ急度可相改候、尤名字并名乗者遠慮二不及候、此節支配中

可被申渡者也、

戊五月十五日

三司官

御物奉行

[363]

一 太守様、今般中将御官位被遊御昇進候付而ハ、中将様御同名之御事候間、何様可奉称哉之旨、奉得御差圖候処、
当分之通

太守様与可奉称旨、月番御用人伊集院伊膳殿御取次を以被仰渡候、為御納得此段御問合申上候、以上、

戌十一月廿八日

田原春右衛門

松嶋親方

右之通到来有之候間、致通達候、以上、

亥四月三日

御書院

御物奉行

山川親雲上

364

嘉慶三年戊午正月方同五月迄

日本寛政九年丁二当ル

覺

一 勅使様御乗船、物長式拾式尋、横式丈七尺六寸、

一同大檣老本、長拾六尋四尺、根廻八尺八寸、

一同弥帆檣老本、長拾式尋式尺、根廻五尺、

右、御尋二付唐人方聞合、如斯御座候、以上、

八月十一日

大嶺親雲上